

も も じ や な
百按司墓木棺修理報告書

2004年 8月

沖縄県 なきじん 今帰仁村教育委員会



巻頭図版 1 上：百按司墓近景〈手前の墓が第1号墓所〉

下：第1号墓内部の様子〈写真右奥：1号、写真左：2号と2号に納められた3号の部材
大きな部材は家形墓の部材〉



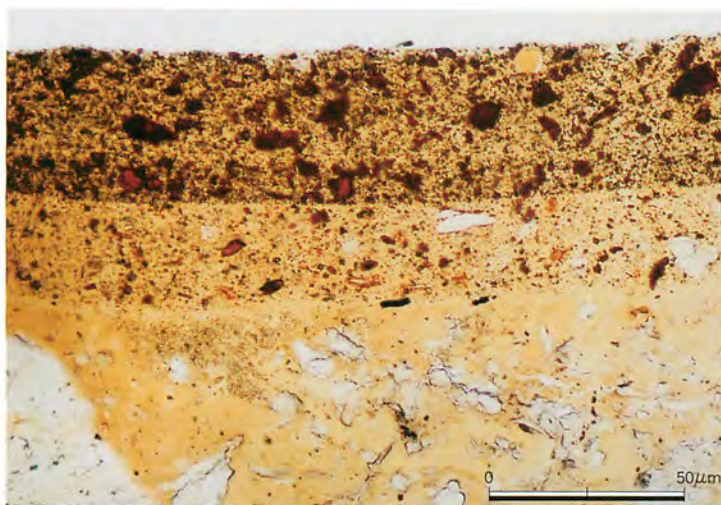
卷頭図版 2 1号木棺 上：修復前
下：修復後



卷頭図版3 2号木棺 上：修復前
下：修復後



卷頭図版 4 3号木棺 上：修復前
下：修復後



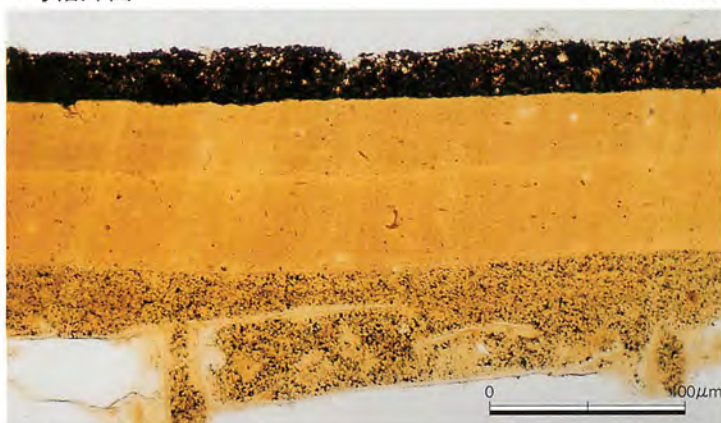
1号棺外面

×520



1号棺外面

×13



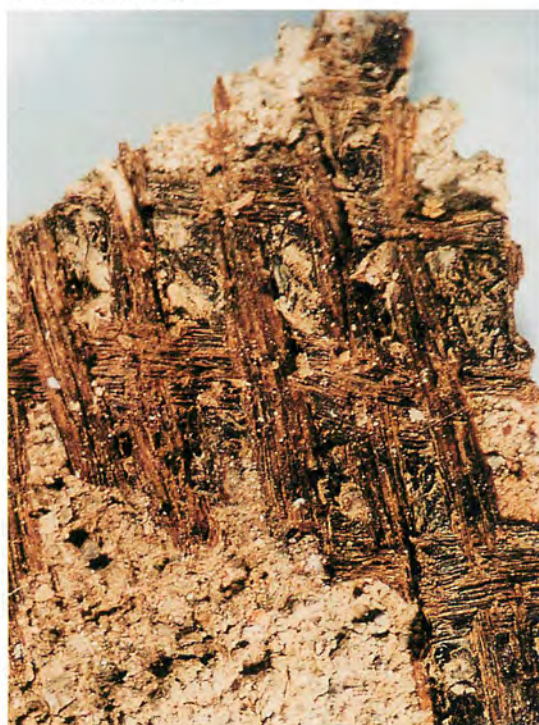
3号棺側板外面

×260



3号棺脚外面

×13



1号棺 布着せ・下地

×26



3号棺 側板内面

×520

序

ももじやな
百按司墓は今帰仁村字運天に所在する墓で、墓所内には今も厨子が安置されています。墓の名称である「按司」は沖縄のグスクを築いた有力な首長の呼び名で、百按司墓は「数多くの按司の墓」という意味を持っています。墓そのものは現在村の文化財として指定されております。その墓に木製漆塗りの厨子（木棺）が3基安置されており、これについて早急な保存修復が望まれておりました。

そこで、今帰仁村では平成14年度及び平成15年度に住友財団文化財修理事業の助成をいただき、百按司墓に納められる3基の木棺の保存修理事業を実施しました。実際には、今帰仁村教育委員会が平成13年度より調査や下準備を行い、財団法人元興寺文化財研究所に修理を委託して、平成14年度から平成15年度に修理を実施、現在今帰仁村歴史文化センターに資料は展示されております。

本書は、その修理の経過と調査の概要をまとめたものであります。

本書が広く活用され今後の文化財の保護と管理に資するとともに、文化財に対する理解と文化財保護思想の高揚、さらには文化財研究の一助になれば幸いです。末文となりましたが、本修理事業の実施に際してご尽力いただきました元興寺文化財研究所、設計を担当いただきました赤嶺和雄氏、復原製作を引き受けて頂きました松原工務店をはじめ、ご指導とご協力を頂きました関係者各位、並びに本修理にご理解をいただき助成いただきました住友財団に厚くお礼申し上げます。

平成16年8月

沖縄県今帰仁村教育委員会
教育長 山城 清光

修理事業の概要

事業 者：今帰仁村教育委員会
事業 名：百按司墓木棺修復事業
所 在 地：沖縄県今帰仁村字運天
業 務 名：百按司墓木棺修理委託業務
監 督 員：今帰仁村教育委員会社会教育課文化財係 宮城弘樹
受 託 者：財団法人 元興寺文化財研究所
主任技術者：山内章
工 期： 自 平成14年6月5日 至 平成15年3月31日
自 平成15年6月6日 至 平成15年12月2日
委 託 費： 平成14年度 ￥3,516,686－
平成15年度 ￥3,454,452－

修 理 概 要：対象となる資料は百按司墓1号墓所とされる墓所内に安置された3基の木棺で、それぞれの資料についてクリーニング、漆塗層の剥落止め処理、乾燥・合成樹脂含浸による木部材の強化・木部虫損及び欠損箇所の補修と接着、釘の防錆処理、脚材の復原製作、木製部材の防腐・防虫処理、修復後の経過観察・復原のための調査と現況図及び復原設計図を作成し、木棺の復原製作を行う。また、適宜木棺の修理中観察を行い、必要な部分については分析を行うとともに、記録を作成する。

規 模：	①1号木棺	②2号木棺	③3号木棺
	身（残存置）	身（残存置）	身（復原値）
	幅 約 65.0 cm	幅 約 81.0 cm	幅 約 67.0 cm
	奥行 約 45.0 cm	奥行 約 56.0 cm	奥行 約 40.0 cm
	高さ（脚含まず）約 40.0 cm	高さ（脚含む） 約 58.0 cm	高さ（脚含む） 約 48.0 cm
	板の厚さ 約 2.5 cm	板の厚さ 約 2.5 cm	板の厚さ 約 1.0 cm
	※脚、蓋ともに欠損。	蓋（復原値）	
		幅 約 97.0 cm	
		奥行 約 70.0 cm	
		高さ 約 25.0 cm	
		板の厚さ 約 1.5 cm	
		※報告では2号木棺の部材の一部	

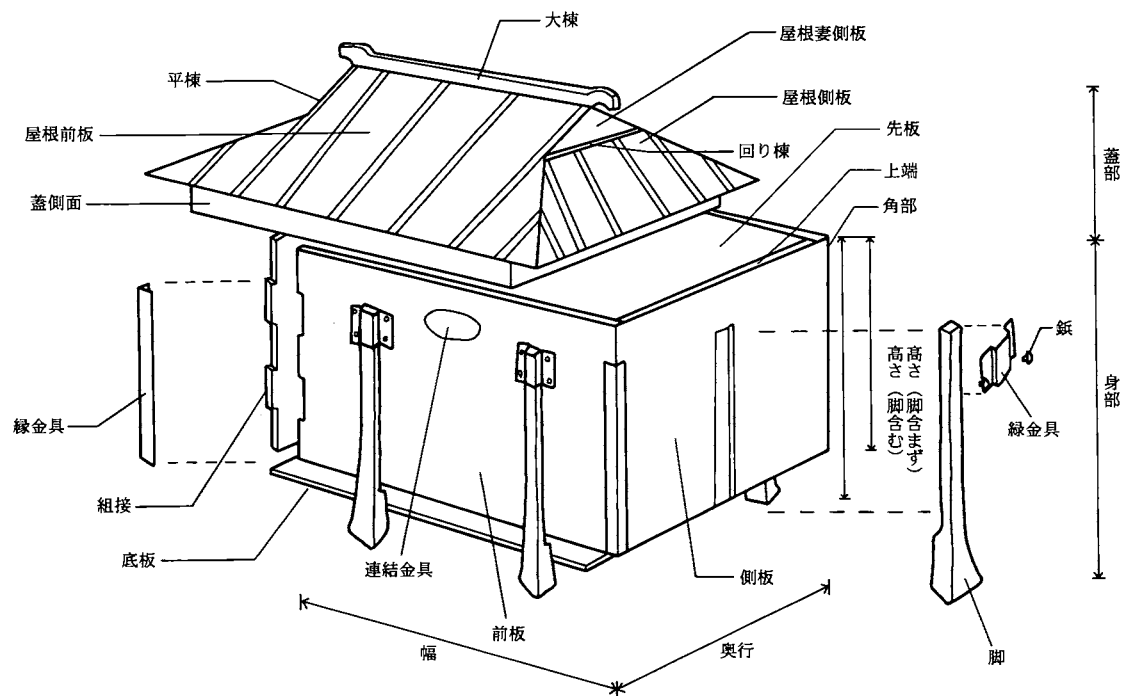
設 計：設計同人G A N（代表者 赤嶺和雄）
復 原 施 工：松原工務店（社長 松原茂明）

例 言

1. 本報告書は、今帰仁村字運天所在の村指定文化財「百按司墓」に安置される木棺の保存修理事業として実施した「百按司墓木棺修理事業業務」の一環として刊行されるものである。
2. 本修理業務は今帰仁村教育委員会から財団法人元興寺文化財研究所に委託して行った。
3. 本業務の実施にあたっては下記の方々からご指導をいただいた。記して謝意を表す。
屋我嗣良（琉球大学・農学部）・川島由次（琉球大学・風樹館館長）・佐々木健志（琉球大学・風樹館）・石田肇（琉球大学医学部）・土肥直美（同左）・譜久嶺忠彦（同左）・赤嶺和雄（設計同人GAN代表）・下地安広（浦添市美術館）・謝敷真起子（同左）・岡本亜紀（同左）・上江洲均（名桜大学教授）・西銘章（沖縄県立埋蔵文化財センター）・青山奈緒（同左）・安和吉則（浦添市教育委員会）・金武正紀（那覇市教育委員会）・仲村渠智（沖縄県文化財保護指導委員）・金関恕（(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長）・石田英実（京都大学教授）・中務真人（同助教授）・本川昌治（同助手）・知名定寛（神戸女子大学教授）・久保智康（国立博物館）・中野徹（黒川古文化研究所）・四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）・福島清（株式会社国建）
4. 本書の執筆編集は下記のとおり分担し、宮城弘樹が編集を行った。
第Ⅰ章1・3・4、第Ⅱ章1・2、第Ⅳ章：宮城弘樹
第Ⅰ章2、第Ⅱ章3・5：仲里なぎさ
第Ⅱ章4：四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）
第Ⅱ章6：井上美和子（(財)元興寺文化財研究所）
第Ⅱ章7：土肥直美（琉球大学医学部）
第Ⅲ章：山内章（(財)元興寺文化財研究所）・宮城弘樹・仲里なぎさ
復原図作図：（有）設計同人GAN 代表者 赤嶺和雄
5. 図面作成や資料整理等は宮城弘樹・松本綾子・仲里なぎさによる。
6. 図面・写真は修理事業に係るもののうち、主要なものを掲載した。
7. 百按司墓の木棺の呼称については、これまでの報告事例から「板厨子」「木棺」「漆龕」「指物厨子」などが知られるが、本報告では事業名称である木棺を採用している。今後の研究等によっては不適な表現もあると考えるが、本書では便宜上木棺で統一する。

凡例（木棺の構造）

木棺の構造は身部と蓋部からなり、身は側板と底板を組んだ箱に脚が付く形となる。構造は箱型の木製収納具として知られる櫃に類似しており、形状の類似性については早くから「唐櫃に類似する（菊地1908）」として紹介され知られるところである。いずれも針葉樹の一枚板で長方形、蓋（被蓋造）、脚付きとなり、朱（赤色）漆塗りである点は共通するが、製作方法としての継はやや異なる。特に脚の本数にみる形式や釘の仕様として鉄釘、銅釘、木釘など各木棺や部位によって選択を異にするようである。各部位の名称や呼称については下図のとおり行った。



もくじ

巻頭図版

序

修理事業の概要

例言

凡例

第Ⅰ章 百按司墓の概要

1	百按司墓の位置と環境	1～3
2	百按司墓の歴史	4～6
3	百按司墓の調査略史	7
4	百按司墓の木棺	8～9

第Ⅱ章 調査の概要

1	調査と修理の経過	10～11
2	組織	12
3	木棺の観察	13～27
4	百按司墓唐櫃形漆龕の科学分析	28～32
5	金属製品	33～36
6	木棺部材の樹種鑑定	37～45
7	人骨	46～47

第Ⅲ章 修理の概要

1	修理の経過	48
2	修理の方針と仕様	49～50
3	体制	51
4	処置内容	52～54
5	1号木棺の修理	55～56
6	2号木棺の修理	57～58
7	3号木棺の修理	59
8	3号木棺その他部材の修理	60
9	復原図の設計と作製	60～64
	完了写真	65～70

第Ⅳ章	おわりに	71～72
	参考文献	73～74

付 篇

	田辺泰撮影運天古墓群の古写真	77～81
	新聞資料	81～83

第Ⅰ章 百按司墓の概要

1 百按司墓の位置と環境

今帰仁村の立地する本部半島の地質構造帯は南西諸島の西側の地層帯に位置し、比較的古い地層が分布する。中でも本部半島の地層の特徴は、岩塊が泥岩の間に分布するとともに比較的狭い範囲で様々な地質が露頭分布しており複雑な地質構造を示している。一般的に本部半島の複雑な地質については東部が時代未詳の砂岩・泥岩優勢の湧川層、中部がチャート・緑色岩類・泥岩・石灰岩からなる古生層、西部は成層石灰岩・石灰質シルト岩、塊状石灰岩などからなる三疊系今帰仁層の大きく3つの地塊に分類されると説明される。

字運天小字名運天原は今帰仁村本島部の北東端に位置し、東部の地質構造帯である砂岩が海岸線に分布する。新生代第四紀（約160万年前）頃に堆積し仲尾次層に分類される地層は、カキや二枚貝などの貝化石の層が発達する。比較的軟質であることから開発も容易で掘込みの墓や戦時中の避難壕が多くつくられた。この地層は今帰仁村では大井川河口から運天まで分布しており、局地的に段丘石灰岩が発達する地域となっている。運天原の集落は、東に屋我地島を、北に古宇利島を望む海岸線沿いの沖積層・砂丘地に立地している。

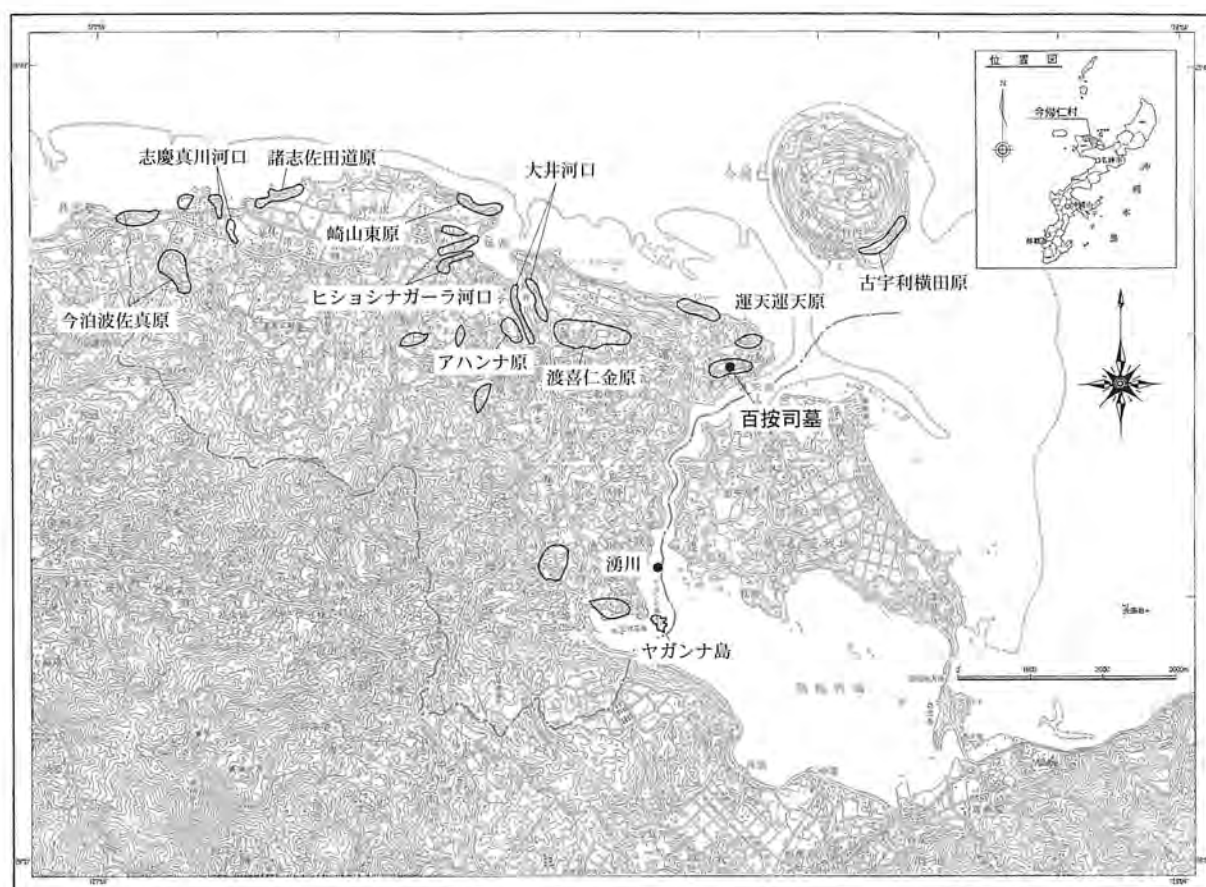


図1 百按司墓位置図（仲原2004加筆）

○ 古墓群

集落はムラウチと呼ばれており、基盤目状に整然と整備された美しい景観をつくり出す。集落の北・西・南側には断層が発達し、急峻な崖に囲まれた空間をつくっている。この断層崖中腹に百按司墓が立地している。崖斜面には第四紀の琉球層群が露頭し、内陸側の標高の高いところでは琉球層群上部が、海岸側低いところでは琉球層群下部が露頭する。前者よりも後者の方が砂岩質で掘り込む事も容易であることから、この不整合面及び琉球層群下部（仲尾次層）に墓群は形成され、様々な形態の墓が分布している。

百按司墓はこのような地質帯の特質をもった場所に選択され造築されている。その下の砂丘地に形成されたムラウチ集落は、天然の良港として知られている。運天集落は『おもろさうし』では「うむてん」と謡われており、『海東諸国紀』の「琉球国之図」（1471年）には「雲見泊要津」とし、重要港湾として登場する。このような歴史的背景とともに源為朝の上陸地として伝えられている。また、慶長の役（1609年）には島津の軍勢が琉球征伐のために上陸した港でもある。他にも、近世末には日本開国を誘引した西洋船が寄港、日露戦争には日本海軍の補給施設、太平洋戦争においては日本海軍の基地として利用されている。

ムラウチ集落には近世から明治にかけて番所があり、大正5年まで役場の置かれた土地であった。現在もムラウチ集落にはアサギやウプガーがあり昔の面影を残すとともに、古宇利への定期船の棧橋として、また漁船の寄港地として港の景観を伝えている。

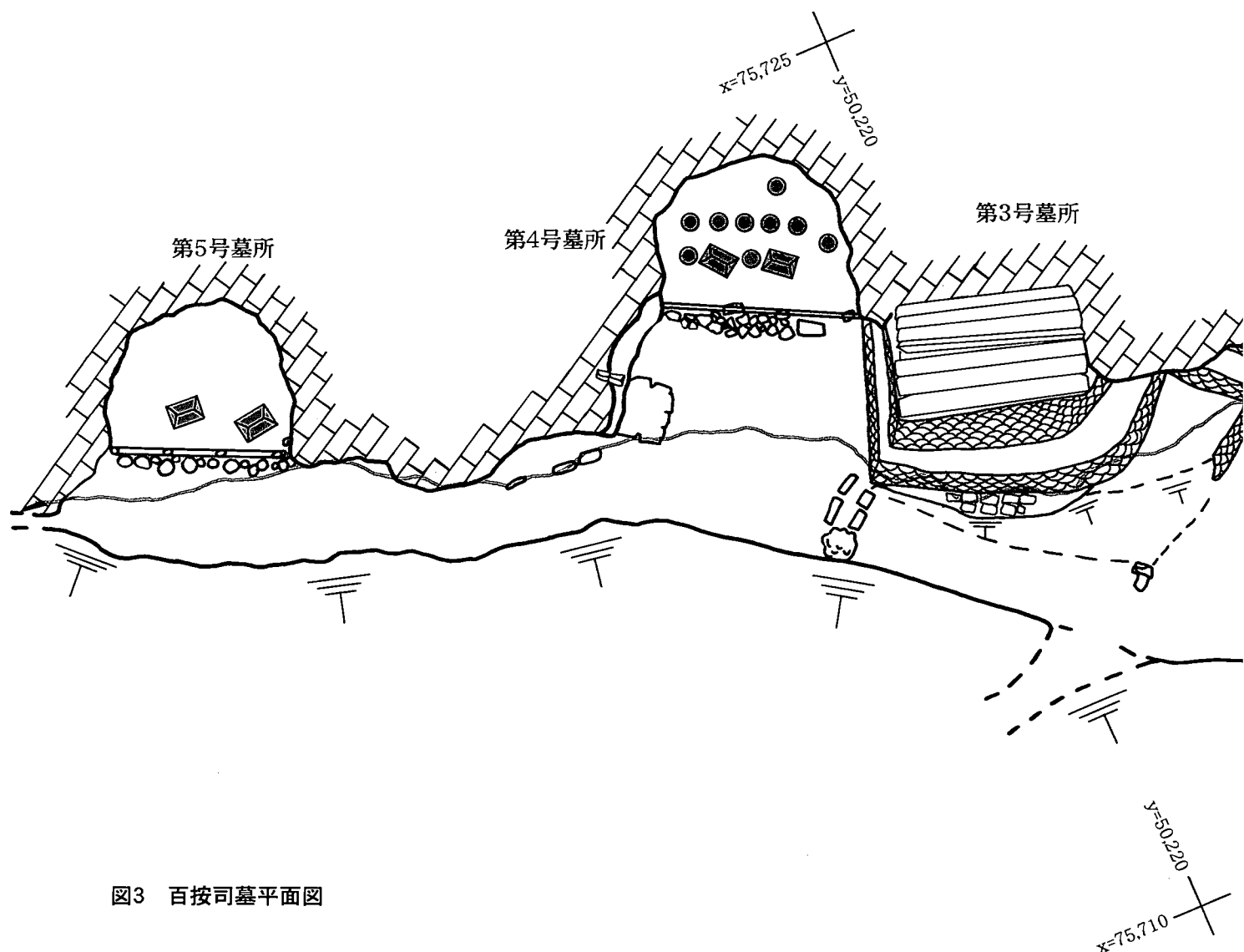
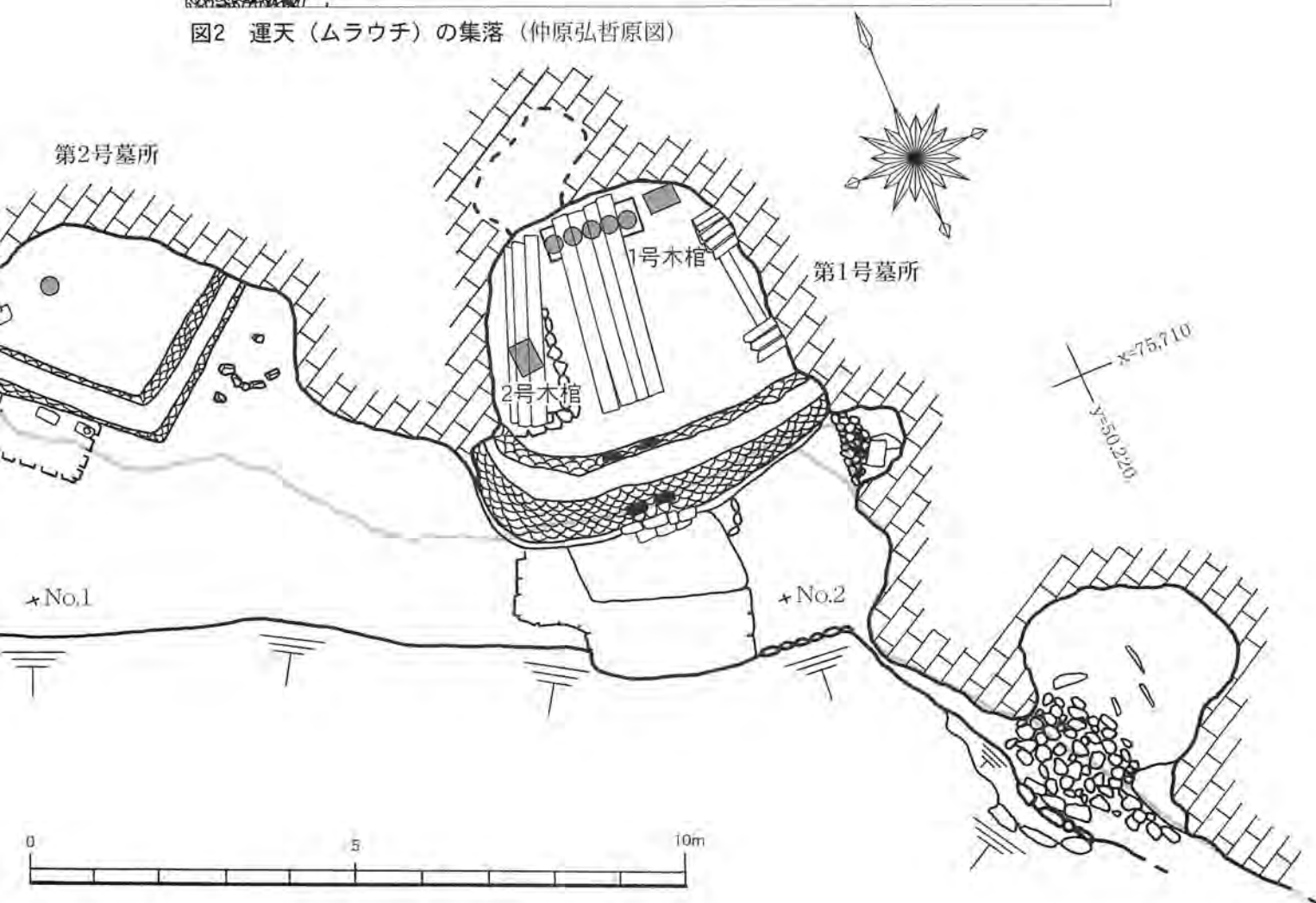


図3 百按司墓平面図



図2 運天（ムラウチ）の集落（仲原弘哲原図）



2 百按司墓の歴史

地元では百按司（モモジャナ・ムムンジャナ）墓と呼んでいる墓は崖の中腹、自然岩壁を利用してつくられている。一帯には山北（北山）監守の一族を葬った大北（ウーニシ）墓をはじめ、正確な数は定かでないが、50以上の古墓が集中する地域である。百按司墓は崖の中腹の洞窟岩陰を利用しており、現在見る墓は漆喰で塗り固められた半月状の石積みによって囲まれている。いくつかの資料から、かつては方言でザフンまたはジャフン（和名：ヘツカニガキ）と呼ばれる木材で組まれた家形の墓があり、壁材にはチニブ（竹製の網代）が用いられたと推測される（図4）。墓内部にはおびただしい数の骨が入る複数の木棺が納められていたようである。いくつかの木棺は漆塗りで、高い身分の者を葬った墓であることが指摘される。これらの木棺は明治26年に運天を訪れた笹森儀助によって図化されており（図5）、当時の木棺の状況を知ることのできる貴重な資料となっている。

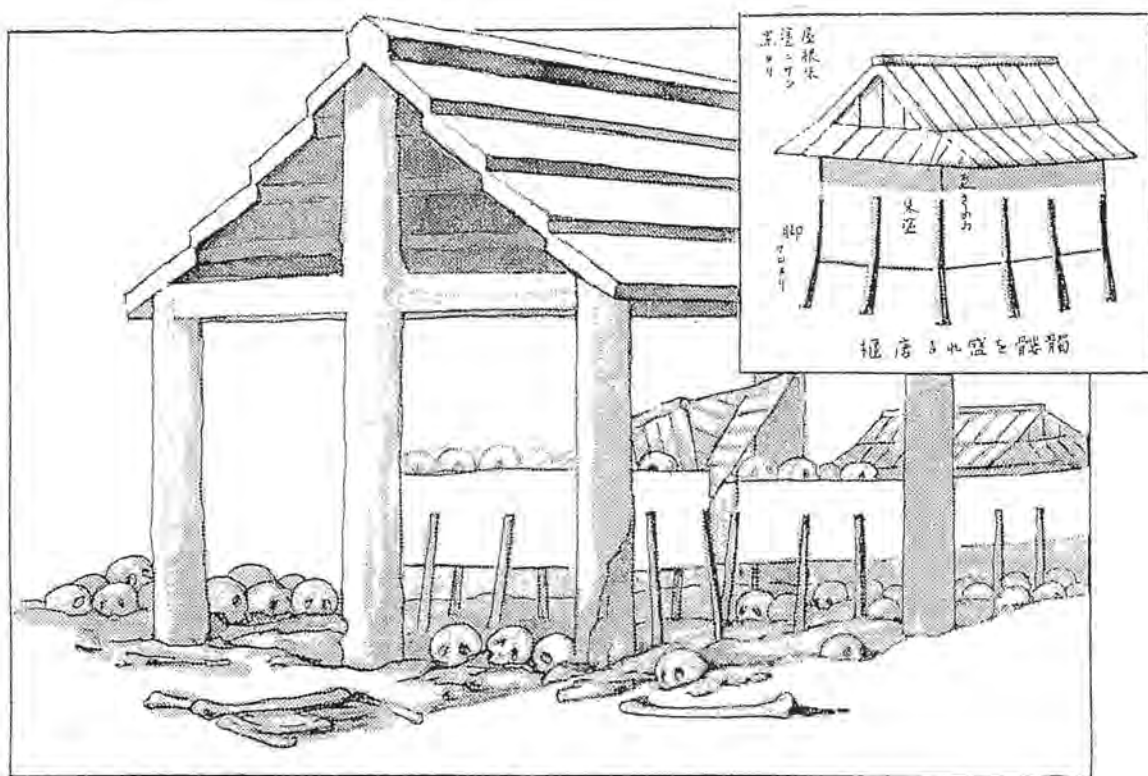


図4 運天港どくろ塚（菊池幽芳原図、立石鉄巨写より）

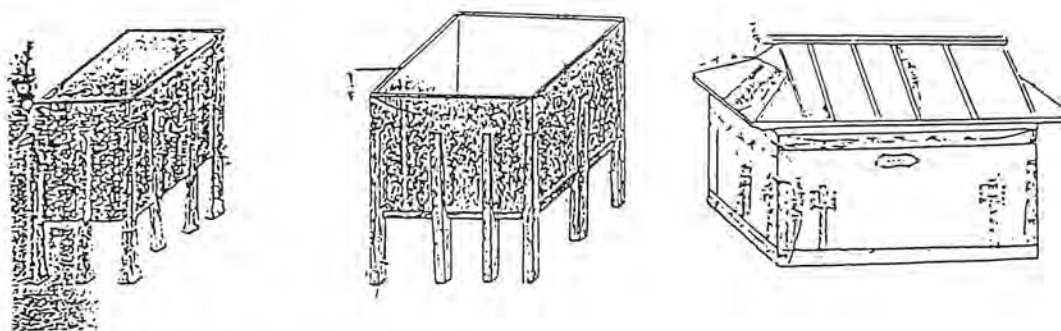


図5 笹森儀助作図木棺の図（仲原1993より）

現在知られる百按司墓について記した最も古い文献として『中山世譜』（1697年）がある。それとほぼ同じ内容を記したのが『球陽』（1745年）である。『中山世譜』の尚忠王の条には下記のように記されている。

尚徳王失徳。履宗絶祀。由是。監守貴族之徒。皆遁世而隠。即今。今帰仁間切。下運天村。所謂百按司墓者。其貴族之墓也。墓内枯墓甚多。又有骨龕数個。以木為之。修飾尤美。皆銘巴字金紋。而一個。稍新者之壁。有字云。弘治十三年九月某日。以此考之。則其貴族。至于尚真王代。而老盡焉。此其證也。

（大意：尚徳王は失脚し、今では監守貴族たちも皆世の中から隠れて暮らしている。今帰仁間切の下運天村に百按司墓という墓があり、その貴族たちの墓である。墓の中には古い骨が多数散乱し、また骨の入った龕も数個ある。これらは木で作られていて、美しく飾られている。金色の巴紋のものが一個あり、それは他のものと比べて新しく、弘治十三年九月某日の字が記されている。すなわちその貴族たちが、尚真王の代に至って老い絶えてしまったことの証拠だろう。）

弘治13年は西暦1500年にあたり、『中山世譜』はその約200年後に編纂されたものである。「弘治十三年」の記録については、幾つかの資料からも検証可能である。例えば明治39（1906）年発刊の加藤三吾の『琉球の研究』によると「（運天港の）後丘の崖下に百按司墓（モ・ジアナ）と呼ぶ古墳があつて白骨の累々として推積し、鎧櫃に似た個数の敗棺も在るが、棺側に巴字の紋形纔に存し弘治十三年九月某日の文字も辛く認められる」とあり、巴紋と弘治13年の銘があつたことを記している。また島袋源一郎『沖縄県国頭郡志』（1919年）には「……垣を攀じて中を窺うに木龕及び鎧櫃の如き朽篋数個ありて白骨累々として堆積せり。而して壁側に『弘治十三年九月某日』およびえさしきやのあし（伊差川の按司ならん）の墨痕を認め得べし」とし、弘治13年の銘のみならず「えさしきやのあし（伊差川按司）」の銘書きもあつたことが記しており、興味深い。この記録に登場する銘書入りの木棺は、戦前首里城に設けられた博物館の館長島袋源一郎によって同博物館に展示された。それを見学した東恩納寛惇により「木製唐櫃様四脚又は六脚、屋根は破風造、その壁の破片に巴字金紋の痕も明瞭に見え、又壁側に『弘治十三年九月、えさしきやのあし』の銘文も読まれる」（『南島風土記』）と記されている。

再び『悄（ミスミス）新シキ者』、つまり他の木棺よりも新しいものであるという記述について考えてみたい。弘治13年より古い木棺となると当然西暦1500年以前のものとなり、百按司墓の被葬者を1469年に終わりを告げた第一監守（第一尚氏王統代の山北（北山）監守）の時代の貴族とすることも可能性として推測することができる。

百按司墓には未確認の別史料として「万暦5（1577）年、今帰仁城下より運天に移葬された」との伝承がある。昭和15年に島袋源一郎によって記された『本部町瀬底島大底門中元祖由来記』に掲載されたもので、その内容は「大底の祖先にあたる第一尚氏系統の今帰仁按司数代の墓も山北城下に在ったが、万暦年間に至り間切の番所の所在地たる下運天背後の洞窟即ち『百按司墓』に移葬したとの事である」。註書に「万暦五年は天正五年に当たり」「記事応氏家譜に見ゆ」と時代と出典を明らかにしている。「応氏家譜」というのは『古琉球三山由来記集』に収められている「応氏由来記」かと思われる。この「応氏由来記」の中に「北山王攀安知王君之碑文記」があり下記のように記されている。

「……其墓是也其先墓モ亦在城西及親泊村東志慶真村西及湧川村小左森之下……（略）……今茲見此墓歷代歳久四方荒蕪頗及破壊時は万曆五年乙丑正吉凶 再葺修墓此是……」

百按司墓の移葬する以前、城下に墓があったのはどのくらいの年月なのか不明であるが、少なくとも百按司墓は第一監守時代の位の高い人の墓と考えられる。

いずれにしても墓そのものの年代を決定するには、さらに調査研究が必要であることは言うまでもない。現状では、弘治13年および「えさしきのあし」の銘があること、巴紋が記されていたこと、木棺が漆塗りであることなどから、16世紀以前の山原地域の有力な按司あるいはその一族の墓であるということは間違いないと思われる。

墓の築造以降、墓所は重要な参拝地として人も訪れていたことであると考えられるが、これらを知ることのできる文書は希少である。墓所の様子と増改築があったことを伝える事例として、明治14（1881）年上杉県令が今帰仁間切を訪れ百按司墓を巡見したときの記録から知ることができる。それは、「山ノ半腹ニ邃洞アリ、白骨ノ髑髏、其ノ中ニ堆積ス、或ハ腐朽セル、鎧櫃ノ中ニアルモアリ、土人伝ヘテ、百按司墓ト伝フ」と県令日誌に記されている。当時の百按司墓が荒れ果てていたことを伺うことができる。翌明治15年2月2日付で県令上杉茂憲から内務卿山田顕義へ「管下今帰仁間切運天港側白骨埋瘞ノ義ニ付上申」書が提出され、さらに明治15年8月3日付で内務卿山田顕義から太政大臣三条実美に伺いが立てられている。その返事は「県庁費中ヲ似テ支弁セシムヘシ」というもので、百按司墓は県の予算で修復されることとなった。

百按司墓修復については『沖縄県史』12巻史料編（2）841～842頁に掲載されている「沖縄県下今帰仁間切白骨埋えいノ件」と題する資料にその経緯を見ることができる

この文書によると、百按司墓の修復の予算は総額40円6銭。上杉県令から内務卿宛の文書に「至急御裁可して欲しい。御裁可できたら別紙（見積書）の金額40円6銭を別途支給して下さい」旨の内容が記されているので、百按司墓の修復費用は補正予算でもって組まれたものと思われる。修復見積の内訳は材木や石、小石、石灰などの材料費がおおよそ18円。残りの金額が石工人夫、その手伝い、石灰を練る職人の賃金となっている。

上杉県令の具申は通り、その後百按司墓の修復がなされた。修復の時期についてははっきりしないが、上杉県令の具申が通った直後に修復がなされたと考えられる。菊池幽芳が『琉球と為朝』（明治41年）の中で「明治15年には始めてこれらの石畳（石垣）を設けてからは、空気の疎通を妨げたのと、中には湿気が多い」と修復後の様子を記している。

明治26年、修復から数年後に運天を訪れた笹森儀助が「番所ノ南、百按司山ニ百按司墓ヲ参拝ス。洞窟ハ数年前、石垣ヘ悪塗ニテ堅メ外部ヨリ顕レタル数百ノ髑髏ヲ蔽ヘリ」と記している。「悪塗ニテ」とあるのは、漆喰の状態があまり良くなかったのであろうか。笹森は第一墓所に納められていた屋根のついた棺等の実測図を残しており、「造りは精巧人目を驚かす、恐らくは（琉）球人の細工にあらざるべし」とコメントを残している。

3 百按司墓の調査略史

百按司墓は歴史上有名な墓であることから、多くの研究者によって紹介されている。というのも、前項で記したように琉球の正史である『中山世譜』(1697年)に山北(北山)監守貴族の墓として紹介され、墓や木棺の様相についても記されているからである。

時代が下り沖縄県令が配され、明治14年(1881)に上杉県令が百按司墓を巡視した際その荒れ果てた状況を日誌に残している。あまりの荒廃ぶりに翌年の明治15年(1882)には内務卿山田顕義へ上申し、県庁費をもって修復された。それから11年後の明治26年に訪れた笹森儀助は、墓と木棺の状況をスケッチしその寸法を記録している(図5)。明治39年(1906)に発刊された『琉球の研究』より、著者の加藤三吾もまた百按司墓を訪れている。同年菊池幽芳が現地調査をし、明治41年(1908)に『琉球と為朝』の中で修復後の様子を報告している。大正3年(1914)にはエドモント・ジーモンによって墓の様子が紹介されている。

県内研究者による調査は、明治38年(1905)の島袋源一郎と東恩納寛惇の調査が知られている。島袋は『沖縄県国頭郡志』大正8年(1919)に、東恩納は島袋によって首里城にあった沖縄縣教育會附設郷土博物館に展示された木棺を見学して『南島風土記』昭和32年(1957)にそれぞれ報告した。

近年の木棺調査は歴史的な調査のみならず、様々な学問分野による学術調査が行われている。人骨調査や漆膜片の科学分析などの文化財調査、木棺材であるチャーギの抗蟻性についての調査対象にもされた。特に漆器に詳しい荒川浩和の調査(1983)によって、木棺の構造などについて詳述しており、百按司墓に安置された木棺の文化財的価値について高い評価を与えるとともに、これらの早急な保存と対策について警鐘を鳴らしている。

表1 木棺調査略年譜

西暦	年号	月日	調査者	対 象	案内・立会	報告
1893	明治26年		笹森 儀助	木棺の図面作成		仲原1993
1905	明治38年		島袋 源一郎	運天百按司墓より木棺調査(調査メモあり) 木棺は首里博物館へ		東恩納1957
1906	明治39年	3/22	菊池 幽芳	運天百按司墓現地調査	仲村源正	菊池1908
1914	大正3年		Edmound Simon	運天百按司墓現地調査		Edmound 1914
1916 1928 1975	大正5年 昭和3年 昭和50年	1/8~11	金関 丈夫	人骨調査	島袋源一郎	金関1978
1975	昭和50年		屋我嗣良他	木棺の抗蟻性に関する調査	県教育庁?	屋我他1976
1983	昭和58年	10/17	荒川 浩和	木棺(1~3号) 現地調査	山内昌藤	荒川1983
2000	平成12年	10/3	浦添市文化課	木棺漆膜片採取	宮城弘樹	未報告
2001	平成13年	11/26	今帰仁村教委	木棺(3号) 取り上げ		本報告
2002	平成14年	3/1	今帰仁村教委	木棺(1・2号) 取り上げ		本報告

註：金関恕氏により大正5年・昭和3年に金関丈夫氏が沖縄へ来島したことをご教示いただいた。

4 百按司墓の木棺

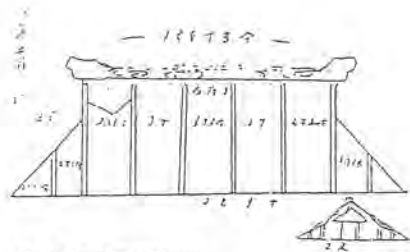
荒川が報告したとおり、百按司墓1号墓所には木棺が概略3基存在する。概略としたのは次章以下で述べるとおり、本報告3号木棺はバラバラの部材を検討した結果、数個体の木棺の部材であると推定されたためである。したがって3号木棺と仮称した2号木棺内部材は、1基ではなく数個体の木棺の部材であると言える。また、一部については2号木棺の蓋部材であると推定された。これまでの記録された木棺と当該資料について、現在推測することのできる相関は表2のようになる。

まず、本報告1号木棺は笹森図「奥の棺」(図6-⑤)に相当する身と同一で、荒川報告の漆龕(一)に該当する資料と考えられる。次に本報告2号木棺がいずれと該当するかは不明だが笹森図「中の棺」(図6-③)もしくは「入口の棺」(図6-④)と同一で、荒川報告の漆龕(二)に該当する資料と考えられる。3号木棺については、a b c dとして少なくとも4つの部材群にグルーピングされる。aは本修理で組み上げることができた3号の身で、これもいずれに該当するか不明だが笹森図「中の棺」(図6-③)もしくは「入口の棺」(図6-④)と同一で、荒川報告の漆龕(三)に相当すると考えられる。3号bとした木棺は検討した結果2号の蓋の部材で、島袋作図の(図6-①)と同一と考えられる。荒川報告では詳述されていないが、棟の部分をスケッチしている。

また、上記以外の資料については残念ながら現存しておらず、首里城に所在した首里博物館に保管されたが、戦災によって滅失したものと考えられる。そのリストには「彫刻百按司墓木彫、葬具 木棺」(園原2002)として記されており、これらの資料が東恩納寛惇や田辺泰の写真で知られる資料(図6-⑥⑦⑨)であると考えられる。また東恩納寛惇の撮影した木棺部材と島袋源一郎の図面で紹介される拓図は同一品であると見られる(図6-②⑦)。おそらくは県立博物館のリストにある2点はこれらのものであったと推測される。

表2 これまで調査された木棺と現木棺との相関表

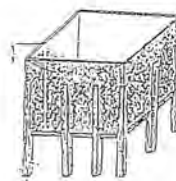
本報告	菊池幽芳	島袋源一郎	笹森儀助	東恩納寛惇	田辺泰	荒川浩和	備考
1号			⑤奥の棺(身)			漆龕(一)	図8
2号			③中の棺 ④入口の棺			漆龕(二)	図9
3号a						漆龕(三)	図10
3号b		①木棺の図面					図11-12~18
3号c							図11-11
3号d							図11-19~22
不明							図12
		②拓本		⑦木棺の一部			紛失資料
	⑩右上図			⑥今帰仁百按司墓の木棺	⑨PLATE86-1		紛失資料
					⑧PLATE86-2		紛失資料
			⑤奥の棺(蓋)				行方不明



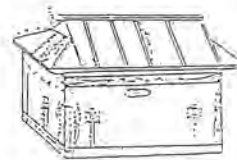
①百按司墓木棺の図面
島袋源一郎原図（仲原1993）



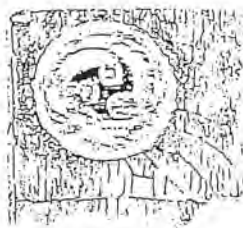
③中の棺
笹森儀助原図
（仲原1993）



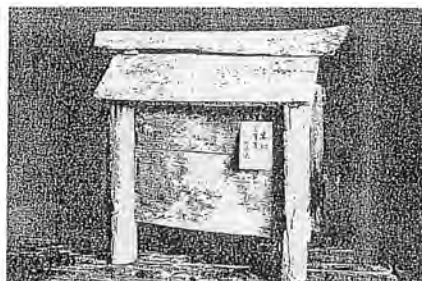
④入口の棺
笹森儀助原図
（仲原1993）



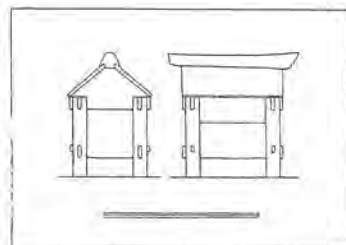
⑤奥の棺
笹森儀助原図
（仲原1993）



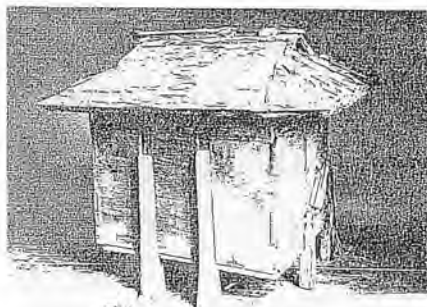
②百按司墓の拓本
島袋源一郎原図（仲原1993）



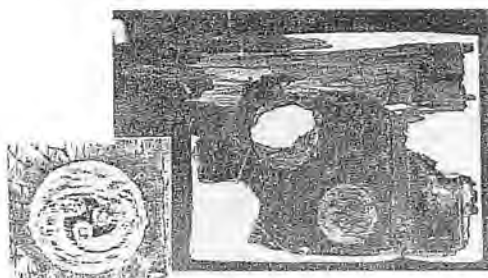
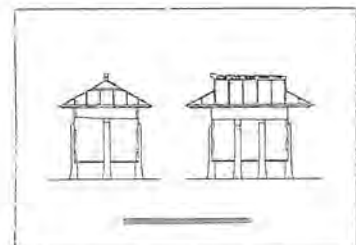
⑧田辺泰撮影
PLATE86-2・同図面（田辺1973）



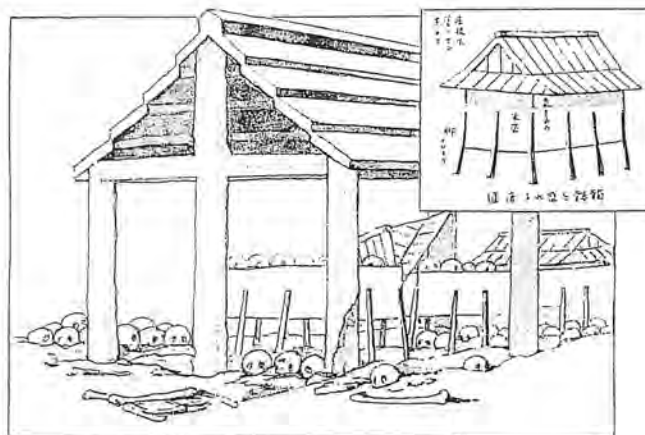
⑥今婦仁百按司墓より発見の木棺の一部
（東恩納1957）



⑨田辺泰撮影
PLATE86-2・同図面（田辺1973）



⑦今婦仁百按司墓より発見の木棺の一部
（東恩納1957）



⑩運天港のどくろ塚 菊池幽芳原図（菊池1908）

図6 これまで紹介された木棺の図

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査と修理の経過

既に前項で紹介してきたように百按司墓木棺の取り上げは、これまでの調査によって何度か行われている。最も有名な資料は沖縄縣教育會附設郷土博物館へ移送され、先の大戦で残念ながら滅失したものと考えられている。この資料は田辺泰『琉球建築大観』（1937年）や東恩納寛惇『琉球の歴史』（1957年）の紹介によって周知されている。1970年代には、仲宗根平男・屋我嗣良氏らによって調査され、一部部材が琉球大学で保管（登録番号RUMF-HF-00001・RUMF-HF-00002）されている（写真1）。

今回、今帰仁村では第1号墓に現存する3基の木棺について修理計画を建てた。木棺はそれぞれ1～3号木棺として仮称し、以下その調査・修理経過について簡単に記す。

2号木棺内にバラバラの状態で入れられていた3号木棺は、平成13年11月26日に元興寺文化財研究所山内章氏立会のもとに取り上げ作業を行った。続いて1号・3号木棺については平成14年3月1日に人骨の取り上げを土肥直美氏に依頼し、今帰仁村教育委員会によって実施した。この時点では木棺3基全てを今帰仁村歴史文化センターに保管し、当面の調査作業を進めるための実測や現状撮影などを実施した。早急に求められた対応として木棺3基の防虫があげられる。これについては平成14年3月16・17日に燻蒸処理を行い、一応の処置を行った。平成14年5月～6月にかけて、現況確認のための実測調査を実施した。百按司墓木棺の実測は、光量に気を配り、極力不接触で行った。縮尺は原寸で実施することとした。これは木棺が漆塗りの製品であることから退色を防ぐとともに漆膜での剥落と木材の痛みが著しい資料に触れないよう細心の注意を払い、保存処理後の部材の形状変化に備えて原寸記録を要したからである。本作業については仲里が中心にあたった。あわせて、木棺内から出土した金属製品についても実測を行った。

作業を進めると同時に関連資料の収集を行った。既に調査された事例などの追調査を行う中で、琉球大学の附属資料館である風樹館に百按司墓木棺の部材が保管されていることが分かった（写真1）。その資料については屋我嗣良教授や風樹館館長川島由次、同館佐々木健志氏の計らいによって、平成15年2月13日に資料を今帰仁村教育委員会へ返却いただくことができた。

平成14年6月18日には、木棺に関する教育委員会内での部内検討会を行った。これを踏まえて、建築方面からの指導をと考え、翌19日赤嶺和雄氏に資料を実見いただき、設



写真1 風樹館に保管されていた木棺部材



写真2 百按司墓検討会

計検討を行った。6月5日に契約した元興寺文化財研究所の職員とともに、保管先である今帰仁村歴史文化センターにて6月24日に木棺の移送方法等の検討打ち合わせを行う。翌25日には「木棺検討会」として、これまで調査に関わって頂いた方および当該事業について様々な形でご指導いただいた先生方に参加依頼して検討会を実施した（写真2）。検討会では修理前の木棺の現物を実見いただき、修理方法や修理の際の注意、留意点などの様々な意見をいただくことができた。その後調査の補足を行い、7月29～31日には資料の梱包、積み込みを行った。梱包に際して、剥落の著しい1号木棺については薄めた布海苔や兎膠で布着せし剥落止めを行った（写真3）。梱包作業は山内章氏が行った（写真4）。運搬は8月1日出発し8月3日奈良県元興寺文化財研究所保存科学センターへ到着、開梱を行った。運搬は今帰仁村教育委員会職員宮城がたった。開梱の当日は土曜日であったこともあり、打ち合わせは翌々日5日に実施した。その際元興寺文化財研究所の計らいで、元興寺所蔵の厨子や櫃の現物資料を研究所代



写真3 布着せ状況



写真4 梱包作業の様子

表の辻村泰善氏の紹介で見せていただいた。午後より担当職員の山内章、角南総一郎両氏らとともに打合せ会議を行い、研究所所長の坪井清足氏よりご指導いただいた。あわせて、坪井清足氏の計らいで金関恕氏に同席いただき、同氏の御尊父金関丈夫氏の沖縄調査についてご教示いただくことができた。以後木棺の調査及び修理作業は元興寺文化財研究所で行われ、平成14年8月5日と平成15年9月17日に、進捗確認を宮城が2度実施した。この間、平成15年7月10日には設計を依頼した赤嶺和雄氏と打合せ調整（於：那覇市）を行った。

余談だが、平成15年2月15日浦添美術館において開催された漆芸研究会において、百按司墓木棺の修理報告を宮城が紹介する機会をいただいた（於：浦添市美術館）。この際美術史を中心とした専門の先生方よりご教示いただき、木棺修理に関する知見を得ることが出来たことは有益であった。

平成15年12月1日、作業は完了。元興寺文化財研究所にて、業務完了検査を宮城が行った。検査後、返納の準備を行い、平成15年12月3日今帰仁村歴史文化センターに資料が返納され、同日そのまま展示ケースに入れて一応の作業は完了することができた。

なお、報告書については平成16年度に実施してまとめることとした。

2 組織

事業主体 今帰仁村教育委員会

平成13年度

教育長・・・・・・・・山城 清光
社会教育課長・・・・内間 繁樹
今帰仁村歴史文化センター館長兼
課長補佐・・・・・・・・仲原 弘哲
文化財係長・・・・・・・・田港 朝津
文化財係・・・・・・・・田場 盛史
・・・・・・・・宮城 弘樹
資料整理・・・・・・・・仲里なぎさ

平成15年度

教育長・・・・・・・・山城 清光
社会教育課長・・・・諸喜田展生
今帰仁村歴史文化センター館長兼
課長補佐・・・・・・・・仲原 弘哲
文化財係長・・・・・・・・當山 清巳
文化財係・・・・・・・・玉城 寿
・・・・・・・・宮城 弘樹
・・・・・・・・玉城 靖
資料整理・・・・・・・・仲里なぎさ
・・・・・・・・松本 綾子

平成14年度

教育長・・・・・・・・山城 清光
社会教育課長・・・・諸喜田展生
今帰仁村歴史文化センター館長兼
課長補佐・・・・・・・・仲原 弘哲
文化財係長・・・・・・・・田港 朝津
文化財係・・・・・・・・玉城 寿
・・・・・・・・宮城 弘樹
資料整理・・・・・・・・仲里なぎさ
・・・・・・・・松本 綾子

平成16年度

教育長・・・・・・・・山城 清光
社会教育課長・・・・諸喜田展生
今帰仁村歴史文化センター館長兼
課長補佐・・・・・・・・仲原 弘哲
文化財係長・・・・・・・・當山 清巳
文化財係・・・・・・・・玉城 寿
・・・・・・・・宮城 弘樹
・・・・・・・・玉城 靖
資料整理・・・・・・・・仲里なぎさ
・・・・・・・・松本 綾子
発掘調査アドバイザー
金武 正紀

3 木棺の観察

1. 1号木棺（図7・写真5～8）

洞穴の最も奥、岩壁に接するように安置（図3）。木棺の底板は完全に抜けており、ビニール袋を敷いた状態で遺骨を納めコンクリート製ブロックの上にのせられていたことから、既に原状には手が加えられていたとは明らかである。

① 計測値（残存）

幅	約 65.0cm
奥行	約 45.0cm
高さ（脚含まず）	約 40.0cm
板の厚さ	約 2.5cm

※脚、蓋ともに欠損。

② 木材の組み方と漆

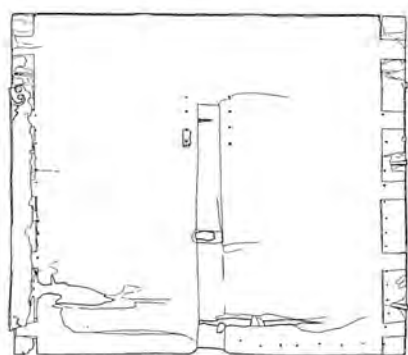
側板は蟻組という方法で組まれ（写真7）、木・鉄製の釘を用いている。釘はいずれも長側板から打ち付けており、各角部とも蟻組で上部1枚目にはダボを継ぐ。3枚目から下方へ3本ずつ鉄釘を打ち、場所によっては木釘も確認できる。木材を組み立てた後、木棺の内面・外面に朱漆を塗布する。外面の漆は木材の端部や装飾金具の裏部に残るのみで、その殆どが剥落する。内面に残る漆も鱗状にささくれてきており（写真8）、剥離の進行が著しい。

③ 脚について

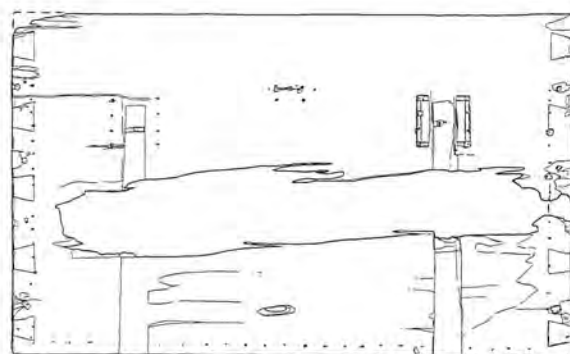
脚は部分的なものを除けば全て欠損しているものの、側板にはそれを下部からスライドして組み込むための蟻形溝が彫られている。脚は長側板に2本ずつ、短側板に1本ずつの計6本ついていたようだが角部にはついていない。その形状は正倉院や法隆寺（鶴山1998）などに現存する唐櫃と類似する。脚は更に上部一ヶ所を鉄釘で打ち付けていたようで、側板にそれが残存する。

④ 装飾金具について

装飾金具は、特に岩壁と接していた面に比較的良い状態で残っていた。厚さ0.4mmの板状金具で木棺の角部や脚上部と底板を覆い、丸頭の金属製鉚でとめられている。板状金具は文様が施されており、そのデザインは裏側から細かな鑿を入れた点描によって二重枠組みを描く（写真6）。角部の縁金具には、上下対象となるような文様が施されている。また、脚上部の縁金具は角部に僅かなU字状の溝があることから、脚材にも同様の溝があったか、面取りがされていたと考えられる。側板と底板を継ぐ角部にも縁金具が付されていたようで、鉚が打たれ一部二列確認できる。金具はもう一箇所確認され、一方の長側板上部中央には割ピン状の二股に打ち付けられた金属製鉚があり、その配置から唐櫃に見られる施錠金具の痕と推測される。尚、この金具は側板内面まで貫通し、裏面からも確認することができる。



1

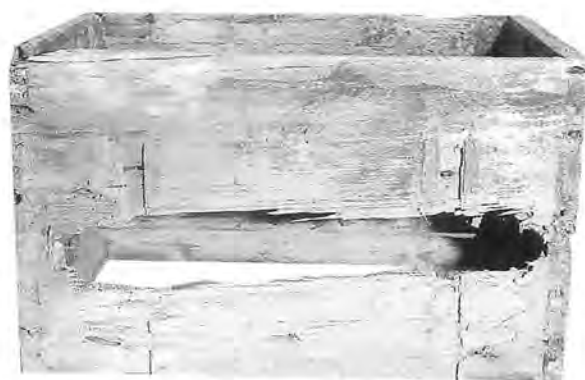


2

図7 1号木棺実側図

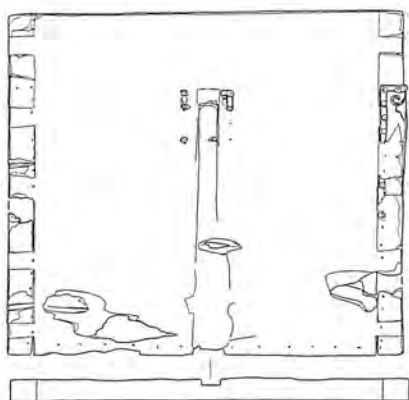


1

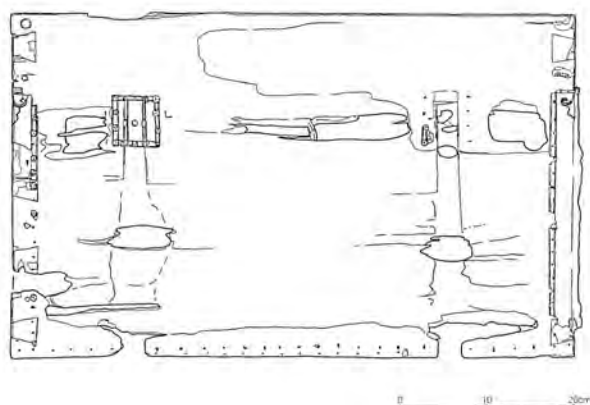


2

写真5 1号木棺



3



4



3



4



写真6 1号木棺部分（縁金具）



写真7 1号木棺部分（組接状況）



写真8 1号木棺部分（身内面の漆近影）

2. 2号木棺（図8・写真9）

墓の西側中央に安置され、木棺内部には、人骨と3号木棺が入っていた。本木棺も前述した1号木棺同様、残存する底板に段ボール紙を敷き遺骨を納めている。近年手を加えていることは明らかである。

① 計測値

幅	約 81.0cm
奥行	約 56.0cm
高さ（脚含む）	約 58.0cm
板の厚さ	約 2.5cm

※蓋と脚の一部は欠損。

② 木材の組み方と漆

側板は1号木棺同様の蟻組で、釘は用いず直径約1cmのダボにて木材を継いでいる。ダボは木製で長側板、短側板双方から各ホゾごとに継がれており、本木棺において縁金具や釘などの金属製品は確認できない。底板は二枚の板を「あいじゃくり」で組んで側板とダボで継ぎ、更に受け桟によって支えられているが、湾曲し側板との接合は密ではなくなっている。

漆は内面、外面共に施されており、内面には茶褐色のみ見られるが、外面には茶褐色と刷毛目のついた朱漆が部材の継ぎ部分に僅かに確認できる。しかし、現状として外面の漆は殆どが剥離し、僅かな漆片と一部の面においてその残存状況を伺い知ることができる。

③ 脚について

脚は1号木棺同様、側板6カ所及び4つの角部の計10本と推測されるが、角部2本は欠損。木材の接合も緩んできている。側板とは他の木棺同様蟻形の溝にスライドさせて組み込んでおり（すえつきざん）、釘等は確認できない。角部の脚は側板に掴み込むように継いでいる（図8、断面図参照）。両長側板中央にある2本の脚には底板を支える受け桟を通して、1本は欠損。脚は下部にいくにつれて幅広になる特徴を持つ。角部2本の脚を欠いた短側板は特に痛みが著しく、底板の支えを必要とする。

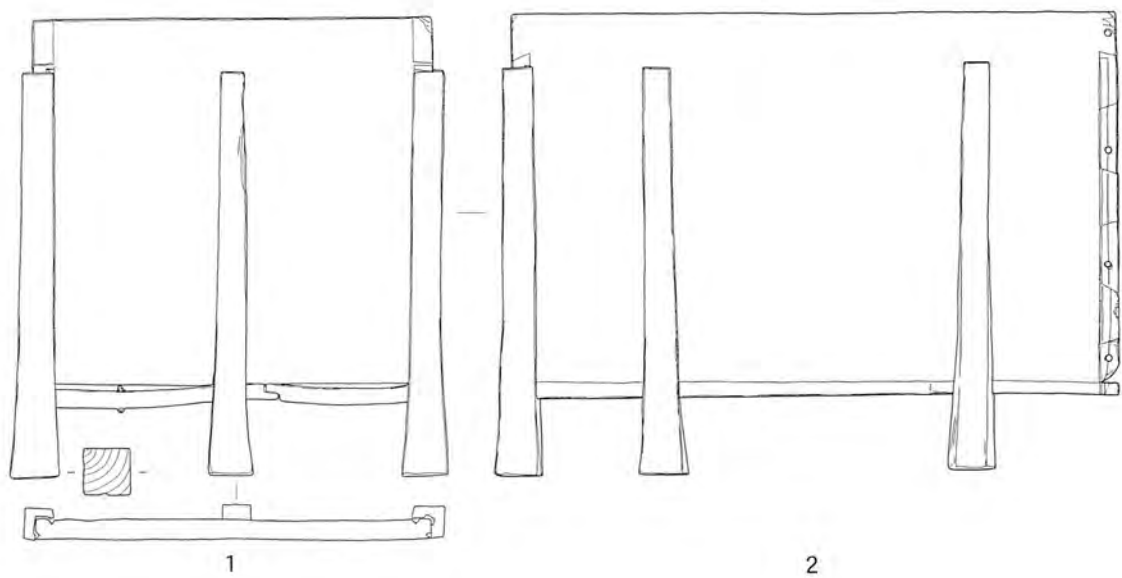


图8 2号木棺实侧图

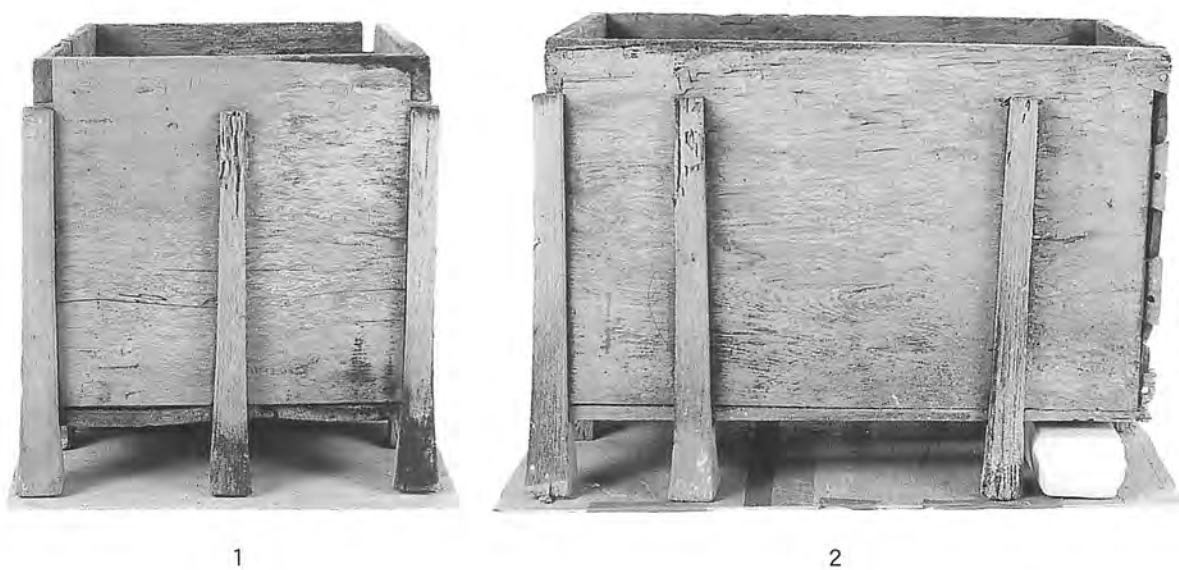
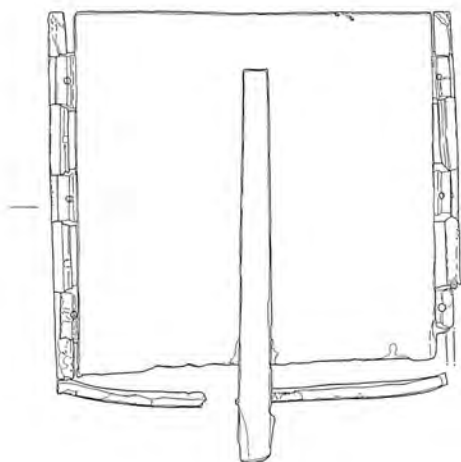
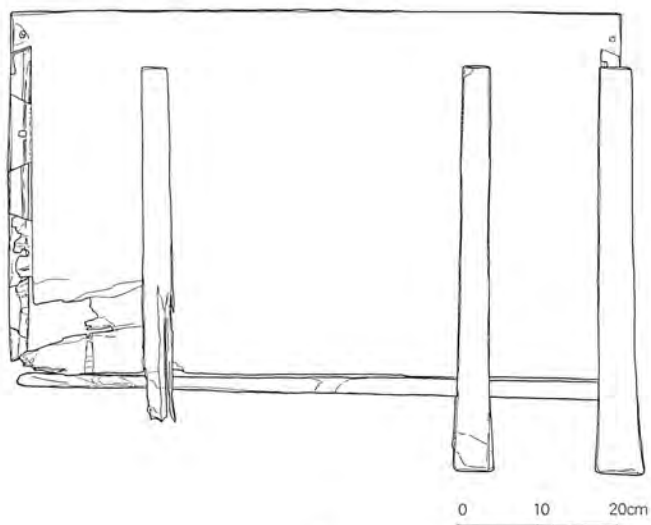


写真9 2号木棺



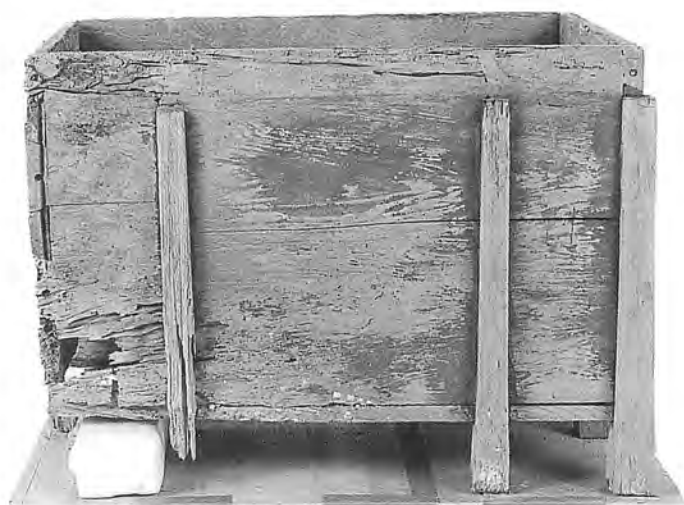
3



4



3



4

3. 3号木棺（図9～11・写真10～12）

2号木棺内に各部材バラバラの状態で行われていた。その部材の形状やサイズ、特徴、材質の様子などからほぼ4郡に分類されたと考えられ、以下a・b・c・d・種不明として分類に紹介したい。また、紹介するa種はサイズ、形状から琉球大学風樹館蔵の部材と一致する。

① 計測値

身部 a：幅	約 67.0cm
奥行	約 40.0cm
高さ（脚含む）	約 48.0cm
板の厚さ	約 1.0cm

※以下b c d 不明の部材は各部材ごとに紹介する（表3）。

② 木材の組み方と漆

3号木棺 a（身部）（図9・写真10）：側板・脚部は角部の面取りが施され、丁寧に形造られている。側板は吹き寄せ継ぎ（或いは片蟻継ぎ？）で組む。底板は一枚板で、銅釘で側板に打ち付けており、脚の形状と漆の剥離具合から受け桟によっても支えられていたと考えられる。ただし、底板を打ち付けた銅釘は側板に突き刺さった状態で残る。漆は内面、外面共に施されており、側板の内面と底板の外面には茶褐色、側板外面には全体的に茶褐色だが朱漆が塗布確認される。他の木棺に比べて漆の状態は良好だが、底板外面の剥離は特に激しくささくれている。

3号木棺 b（蓋部）（図10-12～18・写真11-12～18）：部材の形状から入母屋造りの屋根形と推測される。蓋部長側板の部材が2枚確認され、加工の様子から垂木を組んで屋根材を支えたと考えられる。漆の残存状態より板の両面には朱漆が、棟に当たると思われる部材には茶褐色の漆が塗布されていたと推測される。

3号木棺 d（蓋部）（図10-19～22・写真11-19～22）：部材の形状から入母屋造りあるいは切り妻造りの屋根形と推測される。屋根側板と考えられる部材が2枚確認され、蓋側面にあると思われる部材が長・短あり蓋の奥行きと幅を確認することができると考えられる。蓋受け部の幅（残存）60cm、奥行き50cm、高さ7cm、板材の厚さは約1cm

③ 脚について

3号木棺 aは2号木棺と同様計10脚で、角部が面取りされ下方で幅広につくられる。側板中央に位置する脚は1・2号木棺同様蟻形溝にスライドさせて継ぎ、銅釘が確認できる角部は溝が無く、長側板・短側板双方に銅釘を打ち付ける。側板中央にある脚からは、受け桟を通す為の溝が彫られている。受け桟は両長側板中央を通る2本と両短側板中央を通る1本の計3本あったと考えられる。

3号木棺 c（脚部材）（図10-11・写真11-11）は1・2・3号a木棺のどの身にも形状が一致しない。特徴として、漆塗り、溝が深く、丁寧に面取されている点が3号a木棺とは異なる。これはかつて当該墓に存在した木棺の一部部材であると推測され、前記木棺と区別した。

④ 釘について

3号木棺は総じて銅製、木製が確認されている。3号a〈身〉では銅製・木製のものの2種が確認され、3号b〈蓋〉の釘にも銅製・木製のものが使用されている。3号c〈脚部材〉では銅釘が、3号dでは木製の釘が利用されている。特に3号a〈身〉では銅釘を打ち付ける向きや数に一定の規則性が認められ、身部を接合する銅釘は側板も底板部分も全て釘頭部の先端が外面から内面に向けて打ち込まれる。また、銅釘の数が側板中央部分の釘は2本の釘で内側から外側に向けて打ち込まれているのに対して、角部の脚は3本の釘で外側から内側に向けて打ち込まれている。

表3 3号木棺の部材一覧表

番号	分類	推定	推定部分	計測値 ※ ()は残存長				漆		釘	備考
				幅	奥行	高さ	厚さ	内	外		
1	3号a	3号	身短側板	—	40.0	(32.0)	1.0	○	○	○	脚付き
2	3号a	3号	身長側板	66.5	—	37.0	1.0	○	○	○	脚付き
3	3号a	3号	身長側板	—	40.0	37.0	1.0	○	○	○	脚付き
4	3号a	3号	身短側板	66.5	—	(20.0)	1.0	○	○	○	部材上部風樹館蔵
5	3号a	3号	身底板	66.5	40.0	—	1.0	○	○	○	
6	3号a	3号	身脚角部	4.0	4.0	43.0	—	○	○	○	
7	3号a	3号	身脚角部	4.0	4.0	(35.0)	—	○	○	○	
8	3号a	3号	身脚角部	4.0	—	(32.0)	—	○	○	○	
9	3号a	3号	身脚角部	4.0	—	(22.0)	—	○	○	○	
10	3号a	3号	身脚平坦部	3.0	3.0	43.0	—	○	○	○	
11	3号c	不明	身脚平坦部	4.0	2.5	41.0	—	—	○	○	
12	3号b	2号	蓋屋根前板	(84.0)	—	(20.0)	1.5	×	○	○	
13	3号b	2号	蓋屋根前板	(44.0)	—	(25.0)	1.5	×	×	○	
14	3号b	2号	蓋屋根大棟	(55.0)	2.5	3.5	—	—	○	○	
15	3号b	2号	蓋屋根大棟	46.5	7.0	10.0	2.7	×	○	—	
16	3号b	2号	蓋屋根側面	(77.5)	—	9.0	1.5	○	○	○	
17	3号b	2号	蓋屋根側面	81.5	—	9.0	1.5	○	○	○	
18	3号b	2号	蓋垂木材	—	18.0	1.5	2.0	×	×	○	
19	3号d	不明	蓋屋根側板	—	51.0	22.0	1.0	○	○	○	
20	3号d	不明	蓋屋根側板	—	(33.0)	(17.5)	1.0	○	○	○	
21	3号d	不明	蓋側面	—	50.0	8.0	1.5	○	○	○	
22	3号d	不明	蓋側面	60.0	—	8.0	1.5	○	○	○	
				長軸	短軸		厚さ				
23	不明	1号?	底板?	(58.0)	(40.0)	—	1.5	×	×	×	要検討
24	不明	不明	板材	71.0	(30.0)	—	2.0	×	×	×	
25	不明	不明	板材	(70.0)	12.0	—	2.0	片側面○		×	
26	不明	不明	板材	71.0	20.0	—	2.0	×	×	×	
27	不明	不明	板材	(28.0)	(19.0)	—	1.5	×	×	×	28と同一材
28	不明	不明	板材					×	×	×	27と同一材
29	不明	不明	不明	(14.5)	2.5	—	2.0	×	×	×	
30	不明	不明	不明	(17.0)	2.0	—	2.5	×	×	×	
31	不明	不明	不明	(14.5)				×	×	×	破片
32	不明	不明	不明	(18.0)				×	×	×	破片

単位 = cm

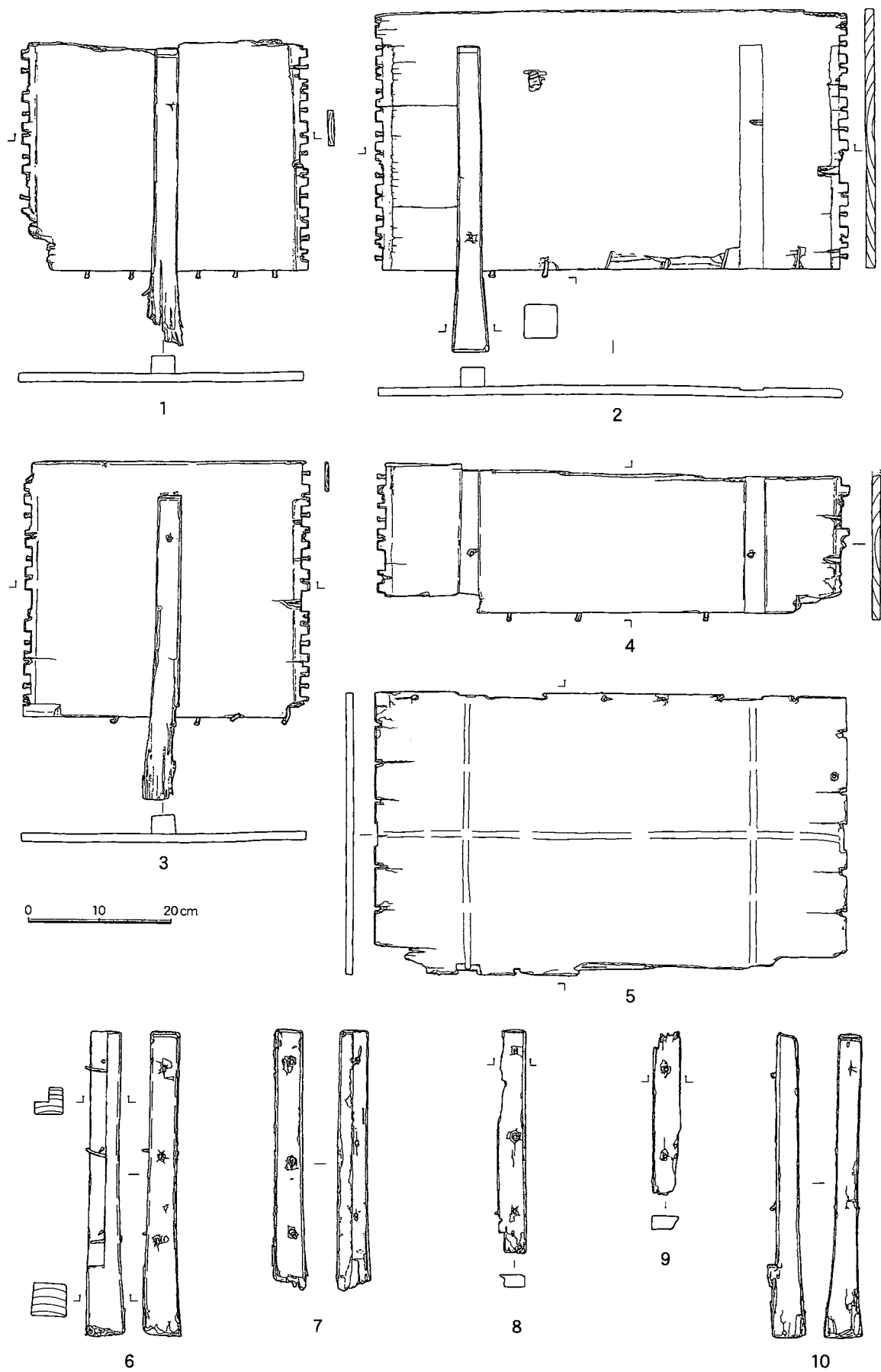


图9 3号木棺实侧图 (1) 1~10: 3号a

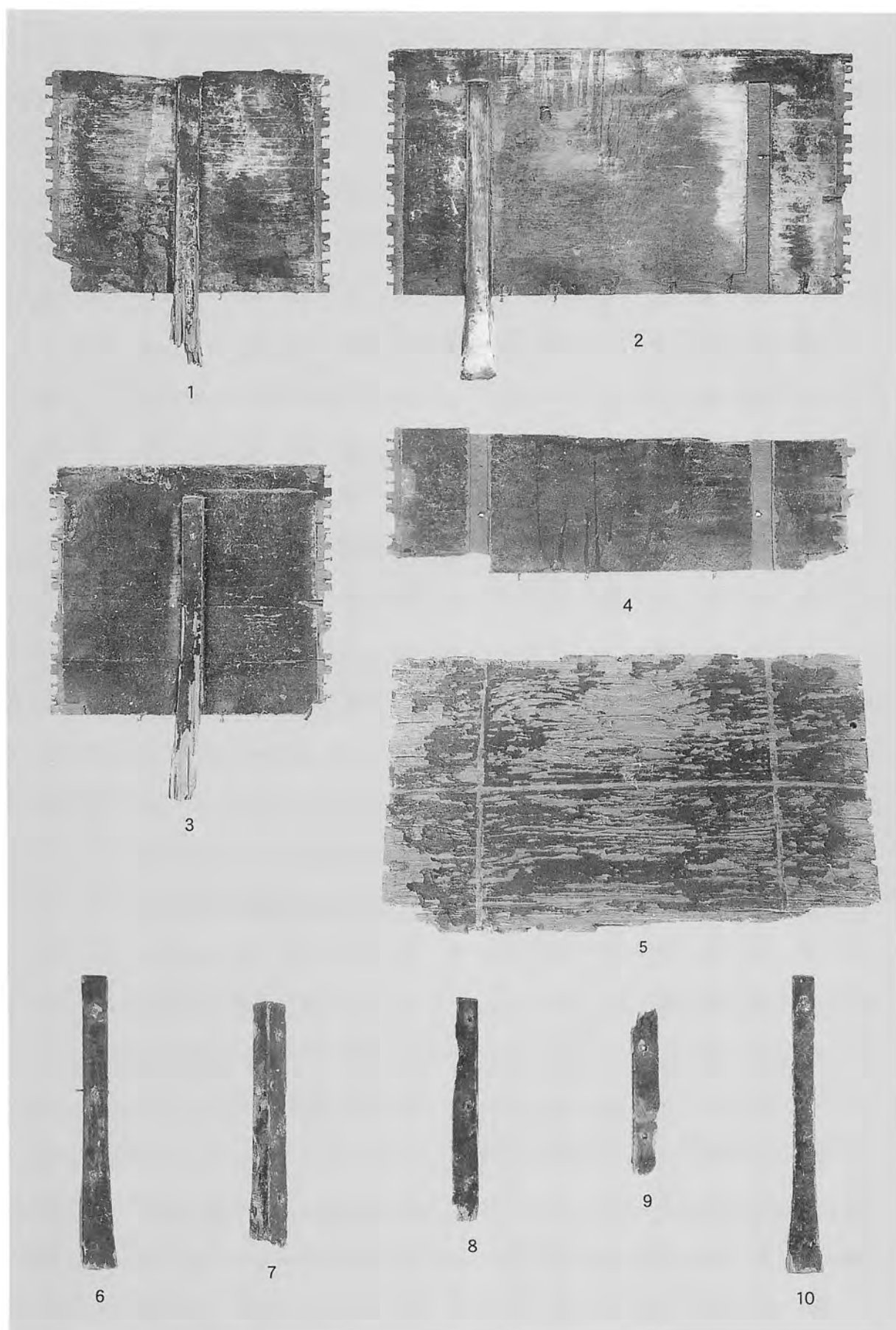


写真10 3号木棺（1） 1～10：3号a

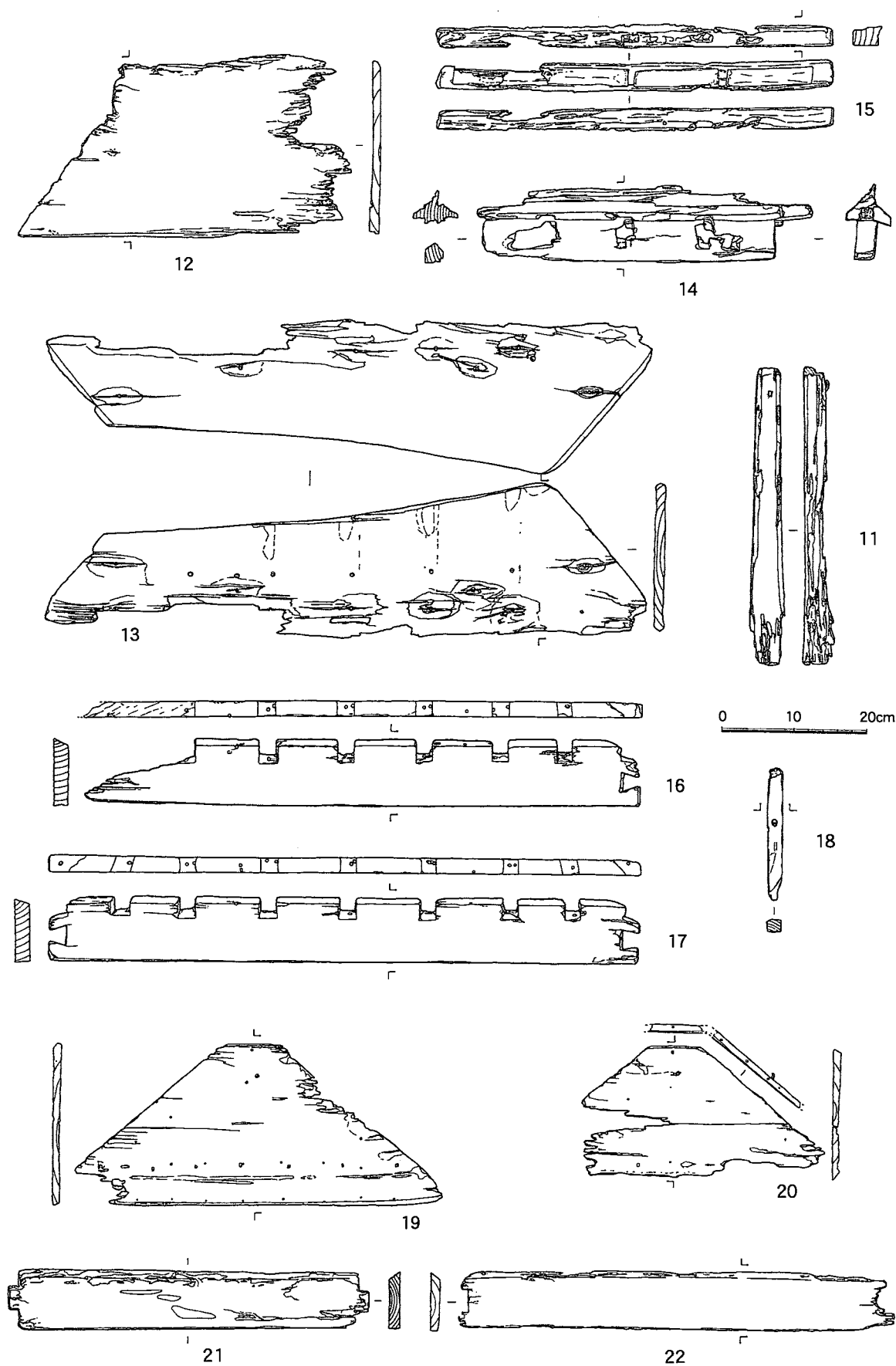


図10 3号木棺実側図 (2) 11: 3号c 12~18: 3号b 19~22: 3号d

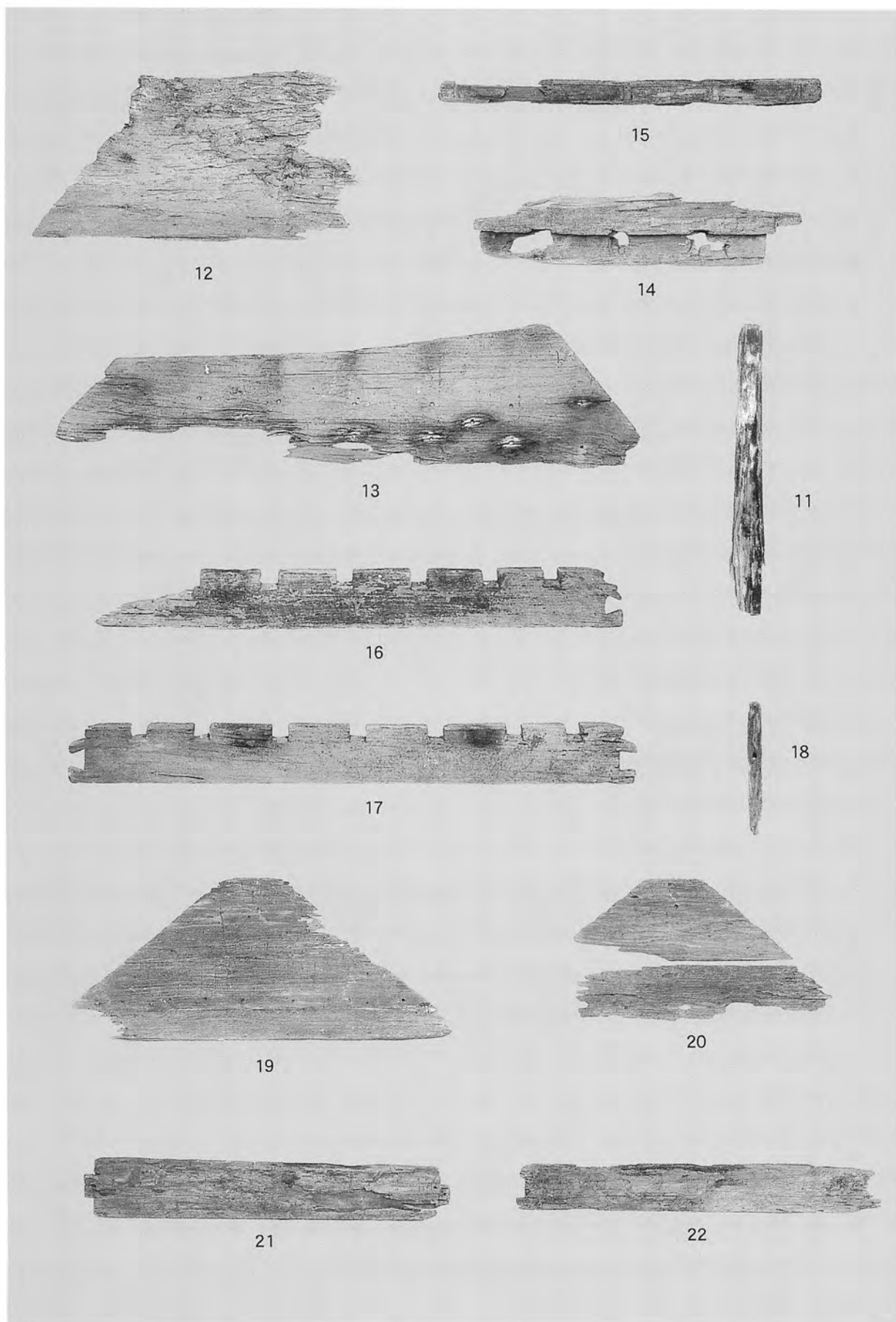


写真11 3号木棺 (2) 11 : 3号c 12~18 : 3号b 18~22 : 3号d

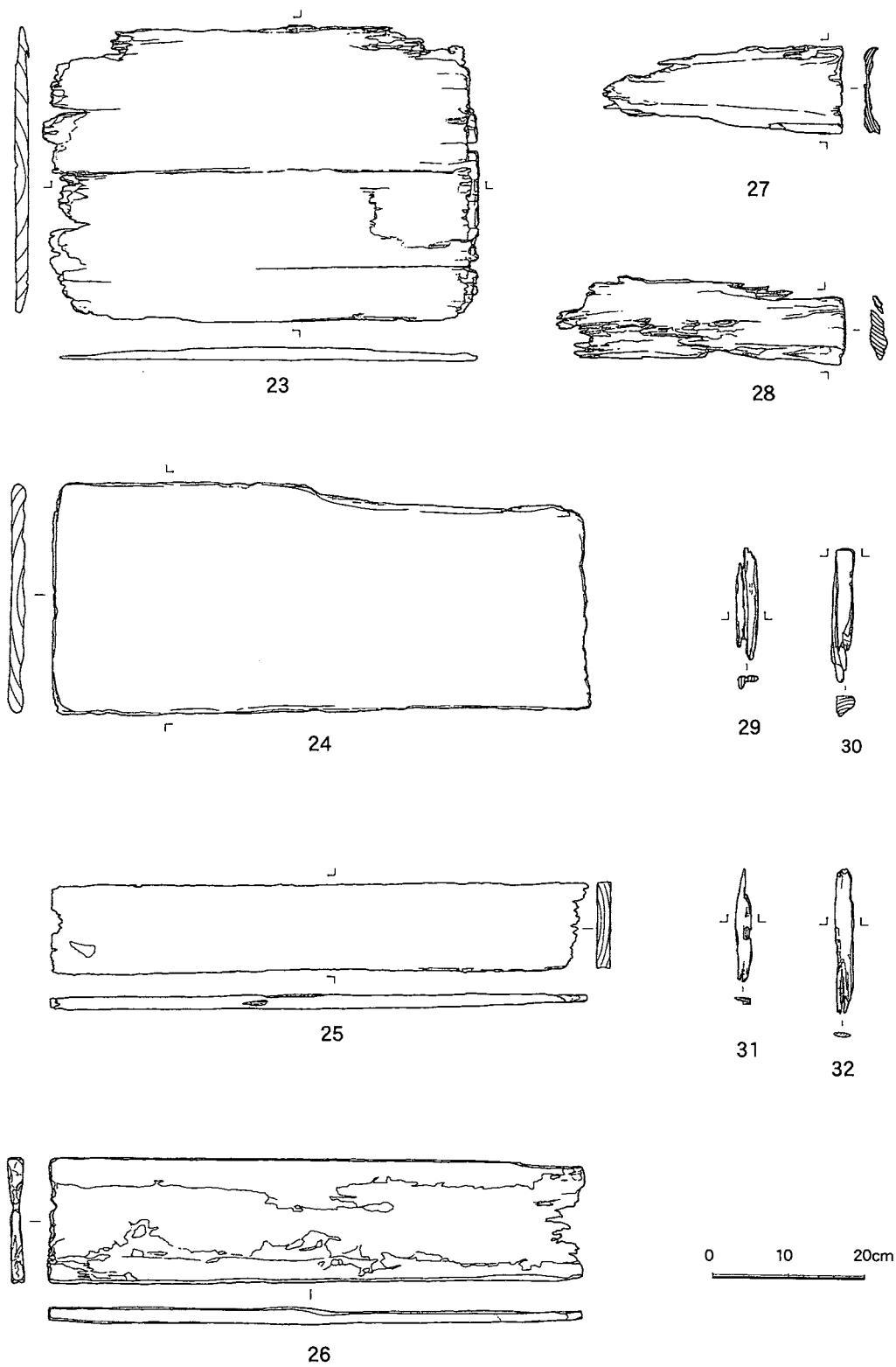


图11 3号木棺 (3) 23~32：不明

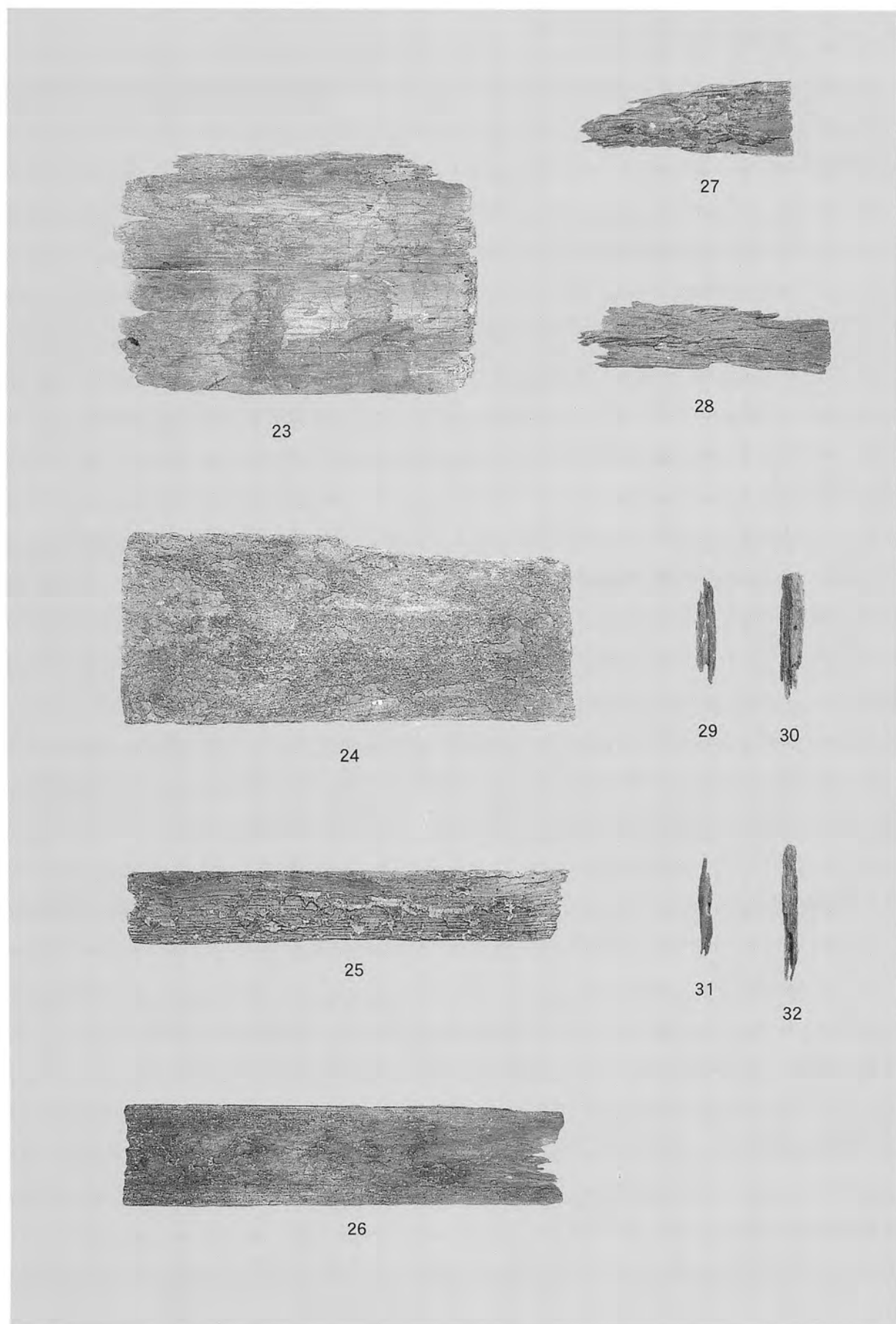


写真12 3号木棺 (3) 23~32 : 不明

4 百按司墓唐櫃形漆龕の科学分析

四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）

1. はじめに

今般、沖縄県今帰仁村教育委員会より、百按司墓唐櫃形漆龕の修理報告書作成にあたって、漆塗膜の分析報告を依頼されたので、事実関係について報告する。百按司墓については、先にいくつか紹介しているが¹⁾、その後、初期琉球漆器の技術系譜を探る目的で、浦添市教育委員会が調査事業を進めており、その一環として琉球大学所蔵品も含めて再度分析を行った。詳細は「浦添ようどれ」の発掘調査報告書において掲載されるが、本稿では百按司墓の新たなデータも含めて再構成の上、ここに報告する。資料提供された今帰仁村教育委員会、琉球大学、および報告を承諾いただいた浦添市教育委員会に深謝する。

2. 分析方法

漆器には階層や価格、器種に応じてさまざまな製品が生産されており、その品質を解明して技法や製作地、流通などの手がかりをえるためには、塗膜内部の科学分析が不可欠である。塗装工程や材料については、偏光顕微鏡・金属顕微鏡、膠着剤の直接的な分析はフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）、赤色顔料や下地の分析には蛍光X線分析法を実施した²⁾。

なお使用する用語のうち、「黒漆」については、炭素系粒子（油煙・松煙）や鉄系化合物粒子などの黒色顔料を含むものを「黒色漆」、黒色顔料を含まず酸化によって黒色化しているものは「黒色系漆」として区別する。同様に「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。下地の鉱物粒子については、粒度の細かい砥の粉及び類似のものは「サビ（錆）」、粗く不均一な鉱物粒子を用いたものは「地の粉」として記述する。

3. 分析結果

1号棺（巻頭図版5）

百按司墓は奥の方から1～3号墓と呼ばれ、1号墓1号棺は6脚の唐櫃形漆龕で、外面は朱漆塗り。外面には鉱物粒子の下に、植物繊維（麻類か）による粗い平織痕（目合は1×2mmほど）が確認できる。つまり漆龕に布着せを行った上に鉱物粒子（地の粉）による漆下地が施され、さらに漆塗りが行われている。

塗装工程（塗膜分析、番号は下層からの順）

外面

- ①布着せ層。
- ②地の粉漆下地層（199μm前後）。布着せの上に2～3層の鉱物粒子が確認できる。石英・長石・有色鉱物などからなっており、大は122×147μm。下層ほど粗い粒子である。
- ③黒色漆層。7～27μmの厚さで黒色漆層が確認できる。黒色顔料は胡麻油による油煙の可能性がある（赤外分光分析の項参照）。

- ④朱漆層 (29 μm 前後)。上層に比して朱の密度は低い。
- ⑤朱漆層 (42 μm 前後)。朱粒子は全体に粗く、大は14×15 μm 。

3号棺 (巻頭図版5) 琉球大学風樹館所蔵

1号墓3号棺は10脚の唐櫃形漆龕で、外面は朱漆塗り、内部と底面は黒色漆塗り。弘治13年(1500)に近い年代とされている。

塗装工程 (塗膜分析)

側板外面

- ①黒色漆層 (49～54 μm)。木胎(木地)に直に黒色漆が施されている。黒色顔料の粒子が細かく均一なので、松煙より油煙の可能性が高い。
- ②漆層 (54 μm 前後)。
- ③漆層 (30 μm 前後)。
- ④朱漆層 (37 μm)。朱粒子は長径2 μm 前後。

側板内面

- ①黒色漆層 (46～61 μm)。外面に同じ。
- ②漆層 (57～70 μm)。
- ③漆層 (64 μm 前後)。

脚

- ①黒色漆層 (24～49 μm)。
- ②漆層 (98 μm 前後)。
- ③漆層 (68 μm 前後)。
- ④朱漆層 (15 μm 前後)。分析部位での朱の層は薄い、他の層ではこれの倍程度はあったと思われる。朱粒子は長径2 μm 前後。

赤外分光分析 (表4・5)

分光学 (Spectroscopy) は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」³⁾と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法という⁴⁾。漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法 (F T - I R) を用いた。

分析用試料は1～2 mgを採取しKBr (臭化カリウム) 100 mgとともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた (錠剤法)。条件は分解能4 cm^{-1} 、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。測定機器は日本分光製F T - I R 420。表4 (ノーマライズ) は岩手県浄法寺産の朱合漆 (基準データ) と琉球大学風樹館所蔵の3号棺脚2点 (異なる部位) のスペクトルを重ねたもの。縦軸は吸光度 (A b s)、横軸は波数 (カイザー)。浄法寺産の朱合漆は1060 cm^{-1} 前後のゴム質のやや多いものを掲載したが、3号棺朱漆2はこれと近似した吸収を示している。3号棺朱漆1は劣化も少なく今日の漆塗膜とあまり変わらない。2点とも2925 cm^{-1} 、2850 cm^{-1} 、1720～1718 cm^{-1} (カルボン酸)、1650～1630 cm^{-1} (糖タンパク)、1465 cm^{-1} (活性メチレン基)、1280 cm^{-1}

表4 赤外線吸収スペクトル (3号棺朱漆)

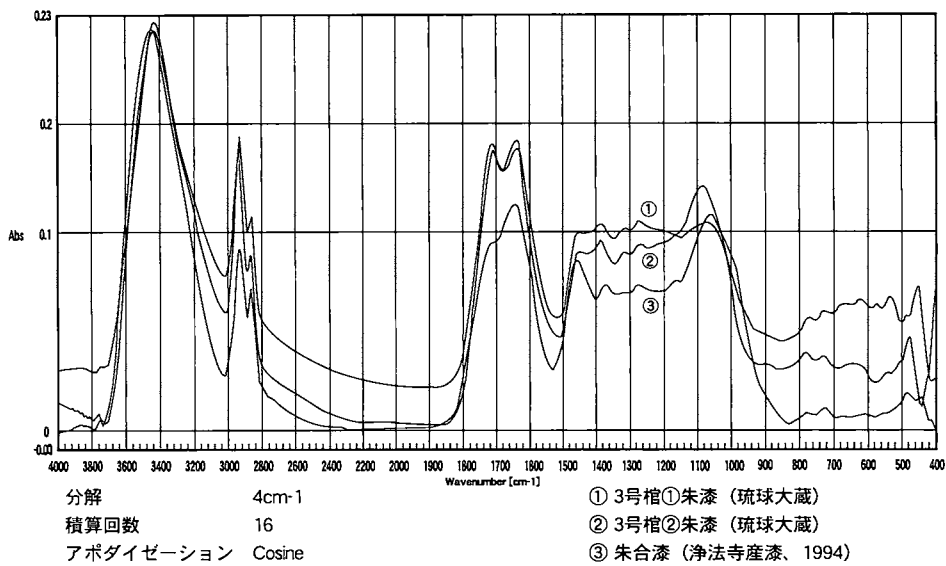


表5 赤外線吸収スペクトル (3号棺黒色漆)

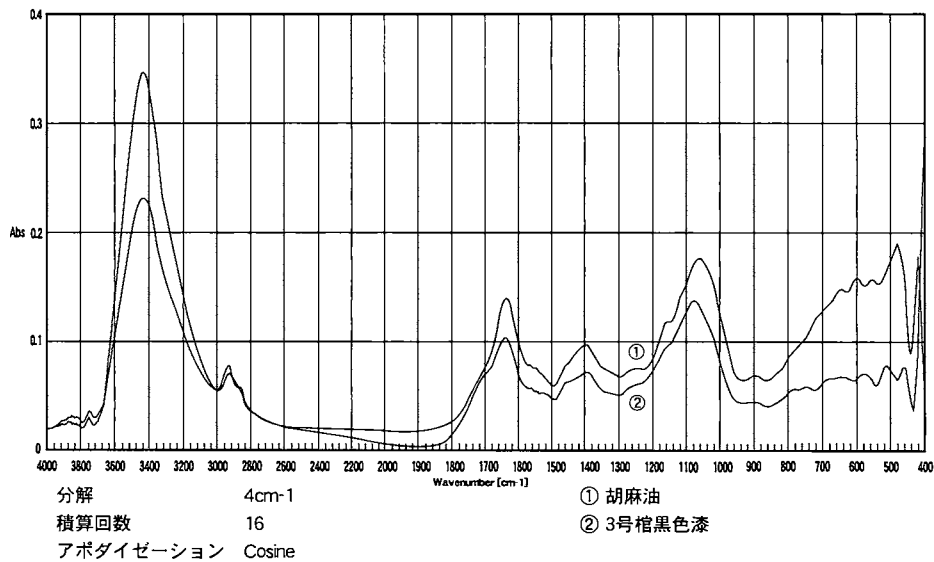
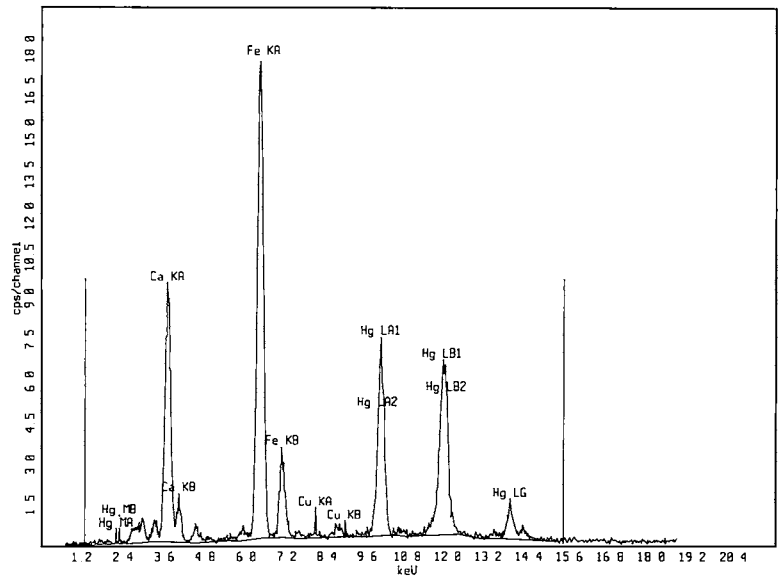


表6 蛍光線定性分析スペクトル (1号棺朱漆)



(フェノール)、 $1070\sim 1030\text{cm}^{-1}$ (ゴム質) の吸収からみて漆塗膜と判断される。

図5は琉球大学風樹館所蔵の3号棺脚の黒色漆と胡麻油のスペクトルを重ねたもの。指紋領域において漆の吸収と若干重なる部分もあるが、ほぼ両者は同一の吸収を示しており、黒色顔料は胡麻油の油煙である可能性が高い。

蛍光X線分析 (表6)

蛍光X線分析は試料にX線を当てると、元素特有のX線 (特性X線ないし固有X線) が発生 (放出) する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う。分析条件は下記の通り。

使用機器：パナリティカルPW4025、エネルギー分散型蛍光X線分析装置。

使用管球：RHターゲット9W。

検出器：高分解能電子冷却Si半導体検出器。

測定条件：30kV、 $4\mu\text{A}$ 、 $20\mu\text{A}$ 、フィルター Kapton、50sec。

測定室雰囲気：大気。測定部分の径1mm。

分析対象：1号棺外面の朱漆

定量分析のスペクトルでは、重元素の鉄分 (Fe) が強いピークを示すが、半定量値 (以下同) では28.8%である。これには下地と漆塗膜からのものを含んでいる。カルシウム (Ca) は下地 (地の粉) のもので、44%と最も多い。沖縄の代表的な鉱物粒子であるクチャ (現在の漆器下地に使用) とニービはCaOの数値が極めて高く、大陸や本土産漆器との識別に有効と考えている。上塗漆の顔料は朱 (HgS) が検出された (27%)。3号棺も同様であった。

4. おわりに

本部半島北部の運天港を見下ろす急崖斜面の洞窟に築かれた百按司墓は、北山王とその一族、または第一尚氏系北山監守一族の墓と推定されている。3号棺には「弘治13年9月某日」(1500年) の銘が存在したといわれ、初期琉球漆器の定点として著名な存在だ。墓は奥の方から1～3号墓と呼ばれており、今回の分析は1号墓の1号と3号棺である。今回琉球大学風樹館所蔵の伝3号棺資料を分析したところ、先に分析報告した3号棺のデータと一致した。

唐櫃形漆龕の形式的変遷としては、6脚の1号棺から10脚の3号棺となる。では漆龕の技術的系譜としてはいかがであろうか。浦添ようどれとの関係から考えてみたい。

浦添ようどれでは、14世紀後半～15世紀前半に石積み構造に改修。その際に瓦葺きの礎石建物と唐櫃形漆龕は廃棄処分され、新たに石厨子 (石棺) が設置されたとの見解が導き出されている⁵⁾。浦添ようどれ出土の漆塗膜分析からは、地の粉漆下地において、琉球漆器ならではの石灰質や貝片の粒子が観察され、蛍光X線分析でもCaOの数値が高いことからみて、現状では最古の琉球漆器と判断される。このように初期漆龕においては、堅牢な地の粉漆下地が採用されている。百按司墓1号棺 (6脚) では布着せの上に地の粉漆下地が施されており、浦添ようどれと共通している。地の粉 (鉱物粒子) は本土の中世漆器に比べて粒度が粗く、しかもCaOの数値が極めて高い。こうした傾向は大陸や本土産漆器との識別に有効と考えている。ところが3号棺 (10脚) においては、下地の地の粉がなく木胎に

直ちに黒色漆が施されていた。その黒色顔料の特定については、顕微鏡的には松煙よりも細かく均一な油煙類と識別できるが、確定はなかなか困難であった。しかし赤外分光分析のスペクトル（表5）から、胡麻油の可能性が高いと判断するに至った。琉球漆器としては今回はじめての指摘事項となる。

以上の検討から漆龕には地の粉漆下地（1号棺）と、これが省略されたもの（3号棺）の存在が明らかとなり、技法と形式の双方から新旧関係に対応するものと考えている。

末筆ながら本稿作成にあたっては、浦添市教育委員会安里進部長、今帰仁村教育委員会宮城弘樹主事から便宜をはかっていただいた。厚く御礼申し上げたい。

註

- 1) 四柳嘉章「琉球漆器の髹漆技法について－塗膜の科学的分析報告（一）」
『浦添市美術館紀要』第6号、1997
四柳嘉章「琉球漆器の髹漆技法について－塗膜の科学的分析報告（二）」
『浦添市美術館紀要』第9号、2000
四柳嘉章「琉球漆龕の塗装工程－浦添ようどれ他の科学分析事例から」
第4回琉球漆芸研究会議発表要旨 浦添市美術館、2003.2.15
- 2) 四柳嘉章「考古資料の修復と文化財科学－福井県家久遺跡・磯柳墓出土漆器の事例から」『國學院大學博物館学紀要』第27輯、2003
- 3) 尾崎幸洋『分光光学への招待』産業図書、1997
- 4) 山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988
- 5) 『浦添ようどれ墓室見学会』（現地説明会資料）浦添市教育委員会文化課、2002

参考文献

- 仲原弘哲「運天－歴史の視点から」『名護博物館紀要あじま』第3号、1987
徳川義宣「琉球の漆工芸」『琉球漆器』徳川美術館、1978
荒川浩和「琉球の漆工芸」『琉球漆器の美展』浦添市、1983
荒川浩和「百按司墓の漆龕－琉球漆工芸資料」『漆工史』第6号、1983
宮城弘樹「琉球の指物厨子について－百按司墓資料を中心として」
第4回琉球漆芸研究会議発表要旨 浦添市美術館、2003.2.15

5 金属製品

今回修理した全ての木棺は、木材と木材の接合に釘やダボを打ち付けている。特に1号木棺では縁金具で角部等を飾る。釘は、木製、銅製、鉄製のものがあり、一つの木棺に数種の釘が使用されている。ダボは、組接部分に開けた直径約1cmの穴につめて木材を接ぐものである。

1号木棺を飾る縁金具は身の四角（写真13）、脚部上・下端部（写真14）、そして側板と底板部分に用いられていたと考えられる（図7・写真5）。これは、縁金具を鋌で留めた痕跡がこれらの部分に認められることから判断される。金具は脚材の上端部よりも上では使用されていないことは蓋受け部分であったためと考えられる。

金具の特徴は薄くした板状のものをを用いており、同様の金具破片は木棺内からも多数得



写真13 1号木棺縁金具

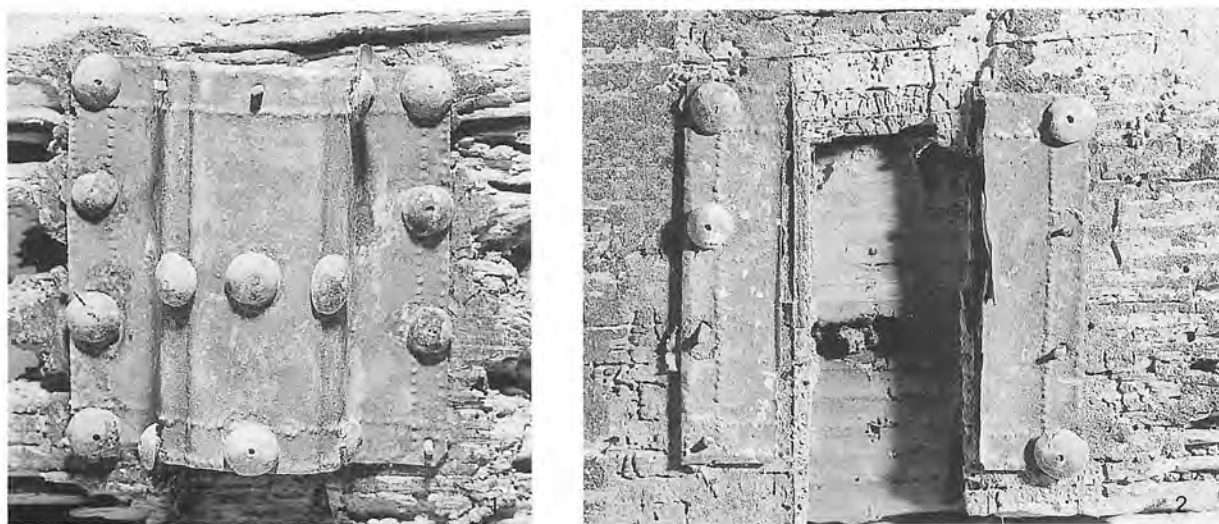


写真14 1号木棺縁金具（脚部）

られている。縁金具を留める釘は丸頭の鉋で、これも木棺内から多数検出した。図12は1号木棺内から得られた丸頭鉋（図12-1）、丸頭鉋の頭部のみの破片資料（図12-2～14）、不明の鳩目銭様の製品（図12-15）、そして側板と底板に用いられたと考える点描の施された金具（図12-16・写真13）がある。縁金具については材質をエネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）で分析した結果、CuとZnを検出した。黄銅（真鍮）の可能性はある。

縁金具の文様は鋸鉄による点描が金具の縁を二重に廻り、端部に垂花状の文様が施されている。垂花状の文様は、上端が下向き、下端は上向きで、対象に配されたものと推測される（図14）。

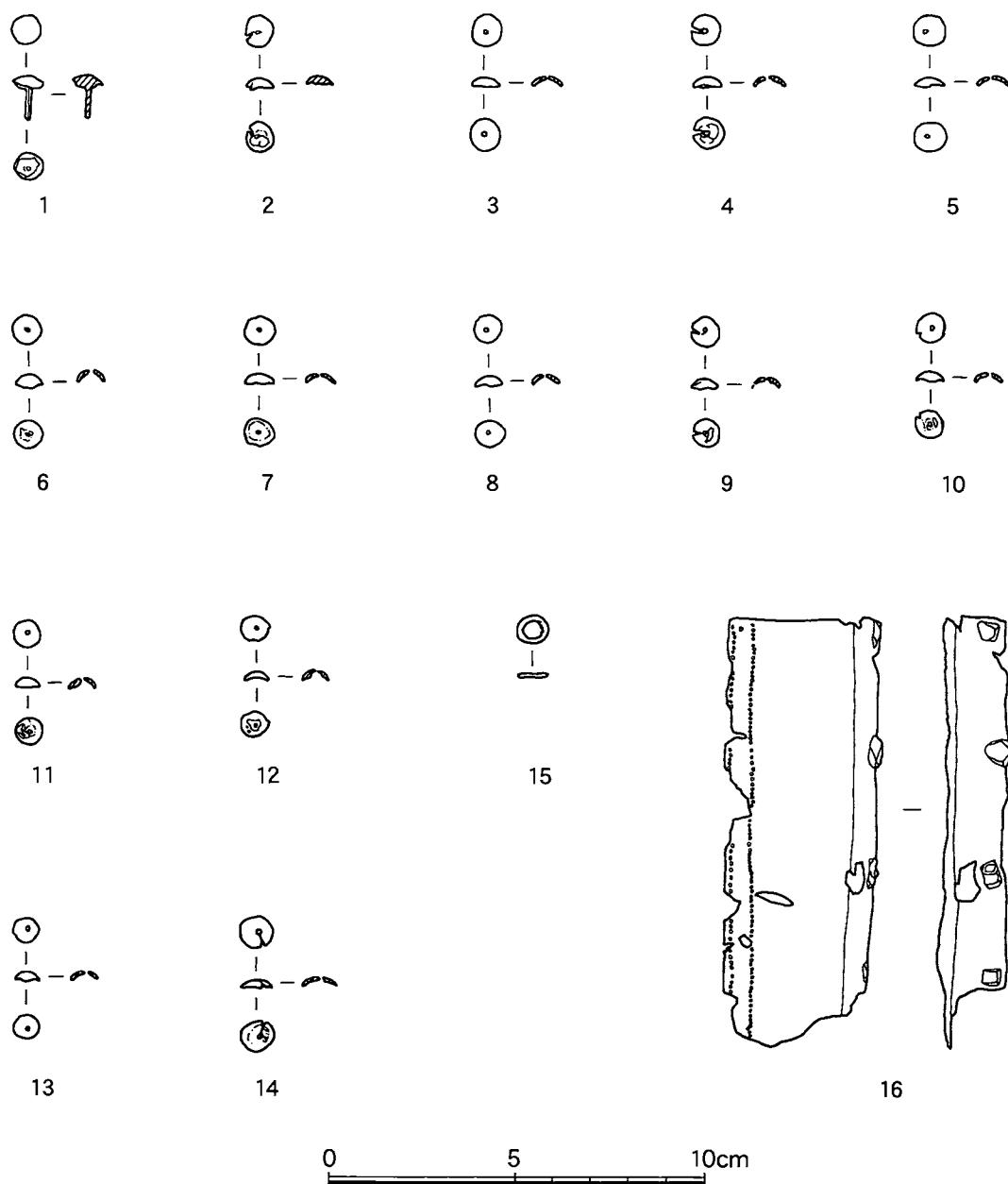


図12 1号木棺内検出の金属製品

本金具における点描による手法は、沖縄の金工には常見の手法として一般的に知られていとされ、黒川古文化研究所所長中野徹氏によって以下のような所見をいただいたので引用させていただきます。

中国で薄い造りの銀器が大量に製作されるようになり、宋時代に普及した。唐時代の初期、厚造の銀器への施文は、鑿を直角より少しねかす程度にかまえてざっくりと打った正三角形に近い打点を連ねた描線で表された。やがて中、晩唐から五代にかけて、銀器が薄造粗製になるにしたがって、鑿の力による歪曲を避けるために、鑿をねかせて力を放散させるようになり、打点は徐々に長い二等辺三角形へと変化していく。さらに銅を混ぜた薄い銀板が使われるようになると、文様表現の簡略化と手取り早い歪曲防止策として、先端が丸い鑿を直角に打った点(凹凸いずれをも利用)を連ねて施文するようになった。この点描の影響か、あるいは古来の金粒細工を写したのかは定かではないが、元時代の青白磁にビーズを繋いだような点描の文様表現もあり、それらの多くは唐草文様や屈論文など簡単な構成の文様に応用されている。華美豊穡な花と葉をもつ唐草は、唐時代に様式として確立するが、晩唐五代には衰退し、宋時代にかけては茎ばかりの蔓草のような唐草が流行している。この蔓状の唐草文は宋元時代の工芸、とくに陶磁器と漆器において主要な装飾の一つとなり、明時代の中葉までは時間的な形式の変化を明確にたどることができる。

この棺の金具の上下に施された文様（復元図の左右両端の葉形の文様）は、大きくひらいたパルメット文の葉を上からとらえた描写で、元末明初、14世紀中葉から15世紀中葉の青花磁器に多用されており、ほぼ同時期の形式であろうと判断される。

1号木棺の縁金具以外の金属製品については、釘があり鉄製のものが得られている。これと併用して木製ダボも用いている。側板の組接上部のみダボで接ぎ、以下の組接部や脚部の接合には釘を用いる。脚部は上部に鉄釘を1本だけ打ちつけ、銅製の縁金具で覆っている。側板の組接部には鉄釘を3本ずつ同位置に打ち、所々に木製の釘も打たれている。両釘間の配置に規則性は見られないが、釘の打ち付ける方向は長側板から短側板へと決まっている。1号木棺で得られた図13-1～10も上述した部分に利用された鉄釘資料と考えられる。

2号木棺には縁金具は確認できない。身部では釘は一切使用されておらず、組接部分を全てダボで接ぐ。脚部にはダボも釘も打ち付けず、組んでいるだけである。底板もダボで打ち付け、受け桟で支えているのみである。2号棺の蓋（3号b）については銅釘が用いられている。2号棺内から得られた銅釘資料の一部には2号棺の蓋に用いられたものもあると考えられるが、主に3号棺に利用した物と考え下記で紹介する。

3号木棺は、部材がバラバラで数組あると考えられるため一様に述べることはできないが、銅製釘のみ使用（3号a、c）のものと木製釘のみ使用（3号d）のものがある。両釘使用（3号b）のものに分類される。

木製の釘は、いずれの木棺も板材に打ち込まれた状態で見ることができる。2号棺内より得られた釘について図13-11～23に図示した。断面方形の皆折釘で長さは完形の図13-11～18では3.9cm～4.5cmで約一寸～一寸五分となる。

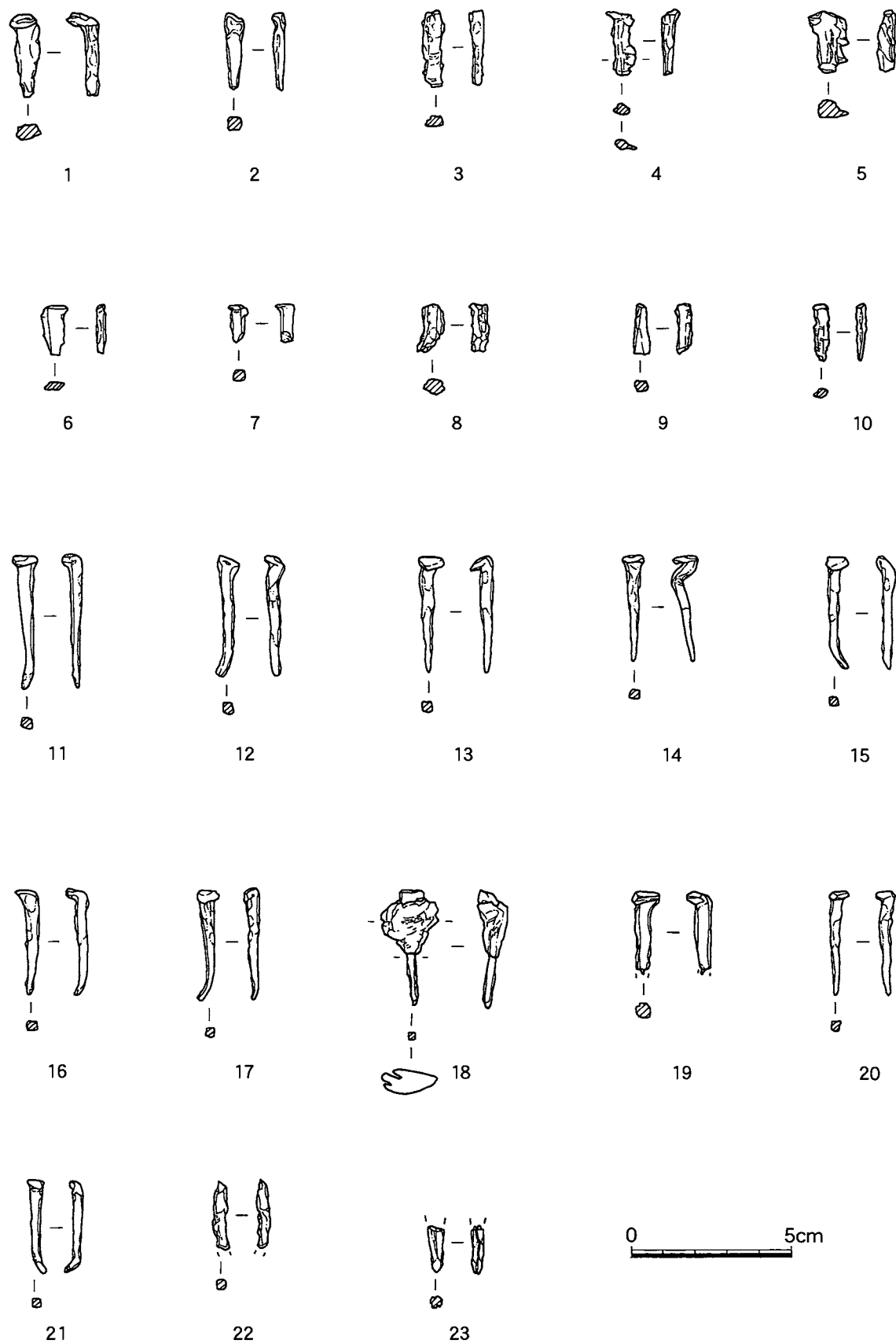


図13 1号・2号木棺内検出の金属製品 1～10：1号木棺内検出 11～23：2号木棺内検出

6 木棺部材の樹種鑑定

1. はじめに

樹種の分類は、花、果実、葉など、種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。しかし、木材組織は、種ごとの分化が進んでいないため、組織上大きな特徴を有する種を除き、同定できない場合がある。種の同定が困難な場合は、科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節（分類の大きい順）のいずれかで表した。

なお、鑑定は井上美知子氏がおこなった。また、スギ、ヒノキの鑑定にあたっては、京都大学木質科学研究所 伊藤隆夫氏、森林総合研究所 能代修一氏のご協力をいただきました。

※科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節、種の分類は、主に原色日本植物図鑑（保育社）によった。

2. 切片作製

写真に示した箇所から、メスを用いてごく微量の試料を採取した。つぎに、カミソリの刃で、鑑定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柁目面（放射断面）の3方向の切片を正確に作製した。

※遺物が完形であるなどの理由で試料採取が困難な場合は鑑定に必要な面のみ切片作製を行った。

3. 永久プレパラート作製

切片はサフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤（E U K I T T）を用いて永久プレパラートを作製した。

4. 同定方法

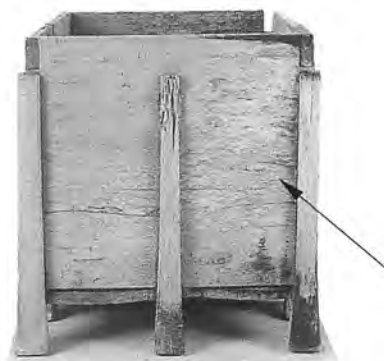
針葉樹については、早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の状態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察し同定した。

5. 顕微鏡写真撮影

木口面は30倍、柁目面は広葉樹100倍・針葉樹200倍、板目面は50倍で撮影した。



1号木棺側板



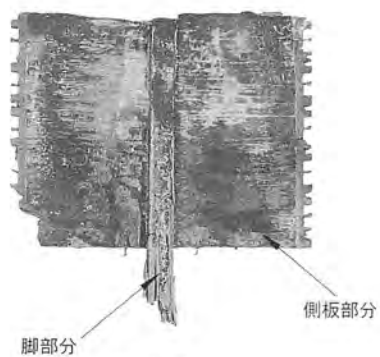
2号木棺側板



2号木棺底板



2号木棺脚



3号木棺-1



3号木棺-7



3号木棺-10



3号木棺-11

写真15 試料採取箇所（矢印箇所は試料採取箇所）



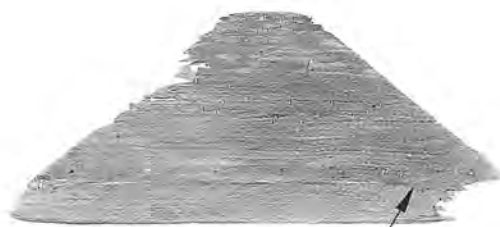
3号木棺-13



3号木棺-17



3号木棺-18



3号木棺-19



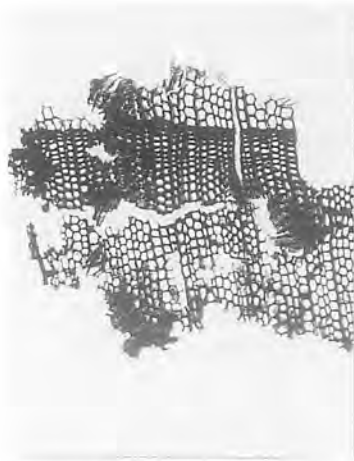
3号木棺-24



3号木棺-25



3号木棺-26



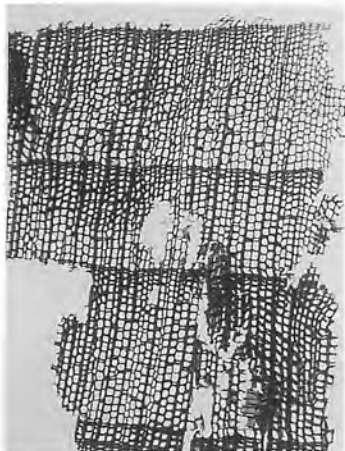
木口面 30倍
1号木棺 側板 イヌマキ



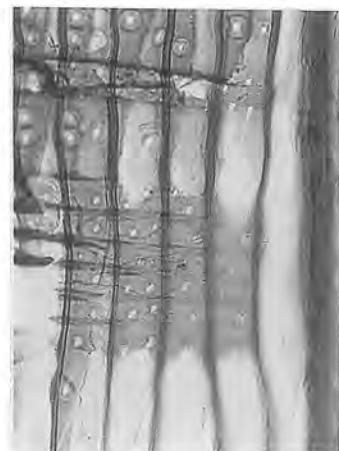
板目面 200倍



板目面 50倍



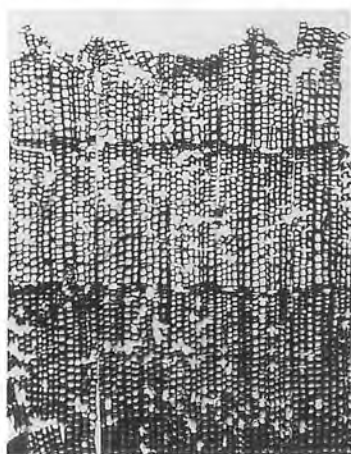
木口面 30倍
2号木棺 側板 イヌマキ



板目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
2号木棺 底板 イヌマキ



板目面 200倍



板目面 50倍

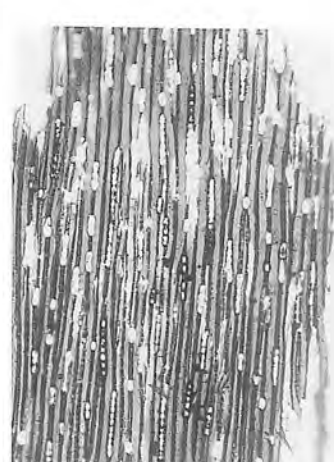
写真16 顕微鏡写真 (1)



木口面 30倍
2号木棺 脚 イヌマキ



板目面 200倍



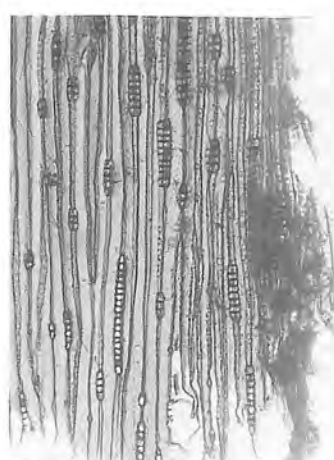
板目面 50倍



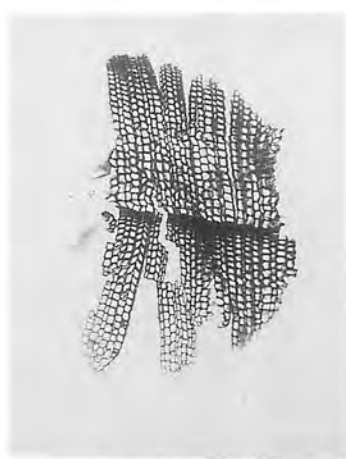
木口面 30倍
3号木棺 1-側板 スギ



板目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
3号木棺 1-脚 ヒノキ



板目面 200倍



板目面 50倍

写真17 顕微鏡写真 (2)



木口面 30倍
3号木棺 7 ヒノキ



板目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
3号木棺 10 ヒノキ



板目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
3号木棺 11 イヌマキ



板目面 200倍

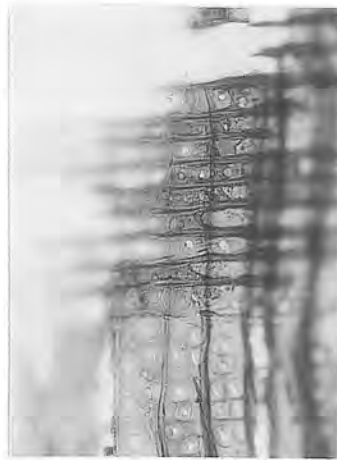


板目面 50倍

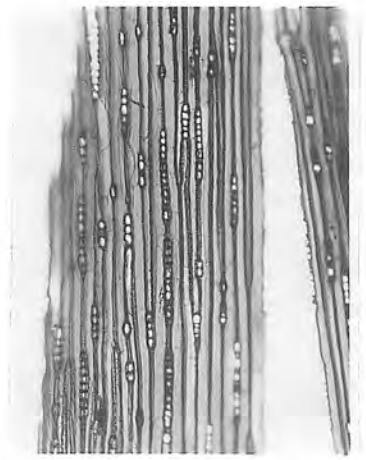
写真18 顕微鏡写真 (3)



木口面 30倍
3号木棺 13 ヒノキ



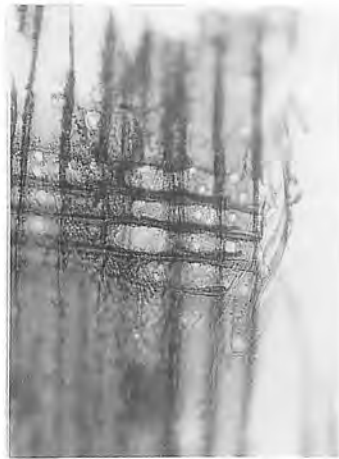
板目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
3号木棺 17 ヒノキ



板目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
3号木棺 18 イヌマキ

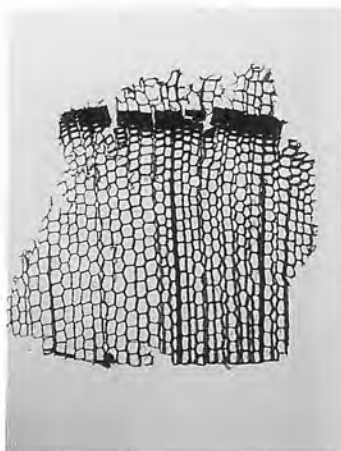


板目面 200倍

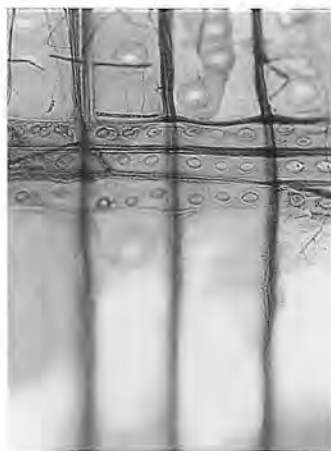


板目面 50倍

写真19 顕微鏡写真 (4)



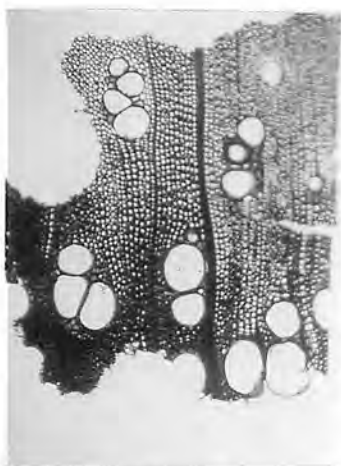
木口面 30倍
3号木棺 19 スギ



板目面 200倍



板目面 50倍



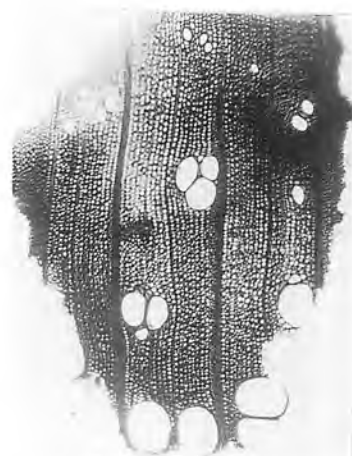
木口面 30倍
3号木棺 24 ニガキ



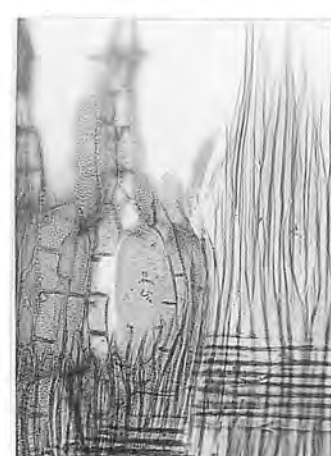
板目面 200倍



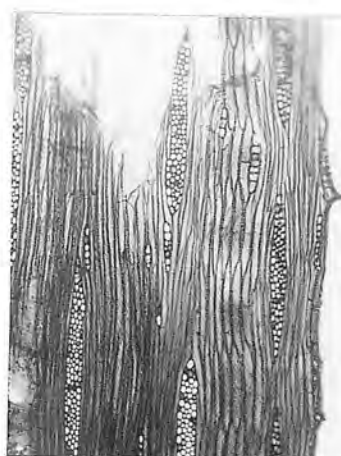
板目面 50倍



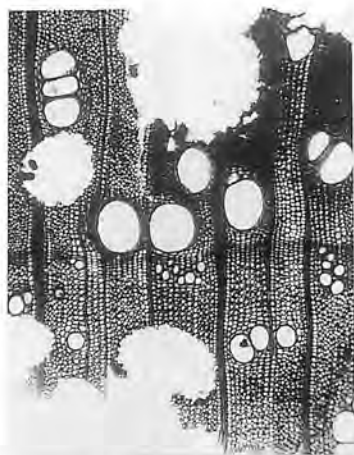
木口面 30倍
3号木棺 25 ニガキ



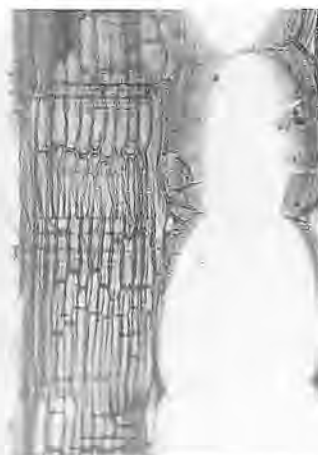
板目面 200倍



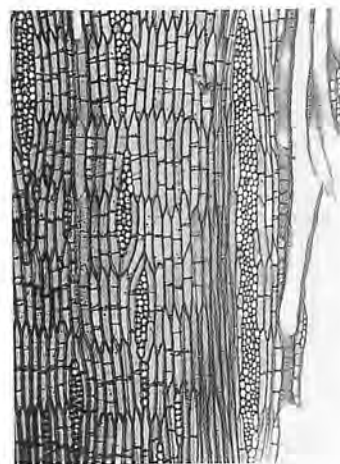
板目面 50倍



木口面 30倍



板目面 100倍



板目面 50倍

3号木棺 26 ニガキ

写真21 顕微鏡写真 (6)

表7 樹種鑑定結果一覧表

写真		遺物名	鑑定結果 樹種名	備 考
16	上段	1号木棺 側板	イヌマキ	
16	中段	2号木棺 側板	イヌマキ	
16	下段	2号木棺 底板	イヌマキ	
17	上段	2号木棺 脚	イヌマキ	
17	中段	3号a木棺 1-側板	スギ	
17	下段	3号a木棺 1-脚	ヒノキ	
18	上段	3号a木棺 10	ヒノキ	
18	中段	3号a木棺 7	ヒノキ	
18	下段	3号c木棺 11	イヌマキ	
19	上段	3号c木棺 13	イヌマキ	2号 蓋
19	中段	3号b木棺 17	イヌマキ	2号 蓋
19	下段	3号b木棺 18	イヌマキ	
20	上段	3号d木棺 19	スギ	
20	中段	3号木棺 24	ニガキ	不明
20	下段	3号木棺 25	ニガキ	不明
21		3号木棺 26	ニガキ	不明

7 人骨

土肥直美（琉球大学医学部）

1. はじめに

百按司墓の第1号墓所には木棺3基が安置されている。当該木棺は何度か移設されていたようで、木棺内に段ボールやビニールが敷かれている状態で、いわゆる攪乱を受けているため原位置を保っているとは考えにくい。それでも木棺内の人骨資料について整理することで、百按司墓の復原整理に有意になると考える。



写真22 木棺内の人骨調査の様子

2. 第1号墓所の木棺内の人骨

第1号墓所に安置された3基の木棺のうち、1号棺と2号棺から人骨が検出された。人骨は手根骨や足根骨などの小さな骨を除くとほとんどが小片で、バラバラの状態で見つかり、これらから期待される情報は多くないと思われた。そこで、調査は最小個体数、性別・年齢の推定など、木棺内に納められた被葬者の構成に焦点を絞らざるを得なかった。被葬者数を推定するための方法としては、骨の同一部位をカウントする方法を用いたが、その結果、1号棺では足根骨の距骨、2号棺は同じく足根骨の外側楔状骨が最も多くカウントされた。性別・年齢の推定には比較的保存の良い四肢骨片、頭蓋骨片、顎骨片の特徴を参考にした。未成人の数や年齢は四肢骨の数やサイズ、乳歯の数などを用いて推定したが、四肢骨と歯の両方から推定したため1号棺と2号棺では年齢区分が多少異なっている。推定の結果を下の表に示す。1号墓所内に納められた被葬者の数は少なくとも1号棺に24体、2号棺に18体、計42体と推定された（表8）。人骨片は棺外にも散乱していたが、詳細不明のため今回の調査対象からは除外した。

表8 百按司墓木棺検出の人骨

	1号棺内	2号棺内	計
成人男性	9	3	12
成人女性	6	1	7
性別不明・成人	0	7	7
性別不明・若年	1	0	1
小児	2	7 (幼小児5・乳児2)	15
乳幼児	6		
計	24	18	42

3. その他

この他、百按司墓周辺から採取されたと思われる人骨が京都大学博物館と国立台湾大学医学院に保管されている。京都大学博物館で筆者等が確認した人骨は26体分（男性15、女性11）だった（表9）。また、国立台湾大学解剖学研究室論文集に発表された許（1948）の琉球人頭蓋の研究には1928-1929年に金関丈夫氏によって収集された資料が用いられており、その中に運天の資料が33体（男性19、女性14）含まれている。台湾大学の資料は未確認ではあるが、これらの資料が保管されているものと思われる。

表9 京都大学に保管される百按司墓本棺出土人骨

標本番号	Nr	荷札	資料数（概数）	備考
166			♀（頭骨のみ）1体	山崎氏より
1042	Nr.1	A 東6?	♂1体・♀1体	
1043		なし		1箱
1044		なし	♂1体・♀1体	
1045A・B	Nr.4	不明	♂2体	
1046	Nr.5	不明	♀1体	
1047	Nr.6	A6	♂1体・♀1体	
1048	Nr.7	なし	♂1体・♀1体	
1049		不明	♀1体	
1050		A9	♂1体	運天 前口湧川久屋子（※久は大の誤写か？）
1051	Nr.10	A10	♂1体・♀1体	朱? 付着
1052	Nr.11,12	A11・A12	♂1体・♀1体	1箱
1053	„	„		
1054		なし	♂1体	
1055		A1511・A1		
1056			♂2体・♀2体	1箱
1057				
1058		A17	♂3体	
計			♂15体・♀11体	総計26体

第Ⅲ章 修理の概要

1 修理の経過

既に経年変化による木棺そのものの損傷は著しく、昭和58年（1983）に実見した荒川も「百按司墓の漆龕の現状は実に実に憂慮するべき物がある。このまま放置するならば、遠からず漆龕は腐朽破壊が進み、やがて消滅してしまうであろう」（荒川1983）と指摘する。他方本村教育委員会でも当該資料の保護処置については何度か検討しており、文化財保存調査委員会においても議題にあがっている。しかし実際には保存修理には費用がかかること、修復に関する技術の不足から村の文化財担当職員においても当該文化財の保存修理に苦慮していたのが現状であった。

今回、幸いにして住友財団の助成をいただき、修復計画を具体的にすることができた。修理は取り上げから展示までに3ヵ年度に渡り実施した。各年度の調査概要は前章まで述べてきたとおりである。本章では修理の概要について中心にまとめていく。

修理事業は主に表10のように年度毎に進められた。

まず、平成13年度に現場調査及び今帰仁村歴史文化センターへの移送と薫蒸処理を中心に実施。特に、原位置の確認、人骨の取り上げ、現場からの搬出、薫蒸を行った。

平成14年度には元興寺文化財研究所に保存修理業務委託を契約し、主に木棺のクリーニングや、補修と現況調査を中心に、防霉防虫処理、剥落止め、復原図の作製を行った。最終年度である平成15年度には3号木棺の復原修理・2号木棺の蓋部の復原製作などを行い、今帰仁村歴史文化センターへ返納後、展示しこれを一般公開している。平成16年度に修理報告書の作成を今帰仁村教育委員会で行った。

表10 修理の工程

年度	日 付	内 容	
13 年度	平成13年 11月26日	第3号木棺を村歴史文化センターへ移送 今帰仁村にて	今 帰 仁 村 に て 調 査
	平成14年 3月 1日	第1・2号木棺を文化センターへ移送	
	平成14年 3月16～17日	薫蒸処理（受託業者：沖縄サニタリー）	
14 年度	平成14年 6月24日	木棺の移送方法等の検討打ち合わせ（宮城・山内・角南）	元 興 寺 文 化 研 究 所 に て 修 復 作 業
	平成14年 6月25日	木棺検討会	
	平成14年 7月29～31日	梱包積み込み	
	平成14年 8月13日	移送（宮城）	
	平成14年 8月 3日	元興寺文化財研究所にて修復作業	
	平成14年 8月 5日	状況確認・打ち合わせ（宮城 奈良出張）	
	平成14年 8月上旬	8月上旬 処理前状況の記録	
	平成14年 8月下旬	8月下旬 クリーニング	
	平成14年 9月	塗膜の剥落止め	
	平成14年 10月～11月	脱塩処理	
	平成14年 12月	乾燥	
	平成15年 1月～2月	合成樹脂含浸による木部材の強化	
15 年度	平成15年 2月～3月	塗膜の剥落止め処理	元 興 寺 文 化 研 究 所 に て 修 復 作 業
	平成15年 4月～5月	木部虫損及び欠損箇所の補修と接着	
	平成15年 5月	樹種鑑定	
	平成15年 5月	脚材の復原製作	
	平成15年 7月	木製部材の防霉・防虫処理	
	平成15年 7月10日	蓋部復原製作の打ち合わせ調整（宮城・赤嶺）至：那覇	
	平成15年 8月	修復後の経過観察	
	平成15年 9月17日	百按司墓木棺修理打ち合わせ調整（宮城 奈良出張）	
	平成15年 10月	3号木棺の組み立て復原	
	平成15年 11月	2号木棺の復原製作	
	平成15年 12月 1日	検査（宮城 奈良出張）	
	平成15年 12月 3日	返納	

2 修理の方針と仕様

1. 目的

修理にあたって、下記のような目的と方針をたて指針とした。また、これらの方針に基づいて契約を行った。

文化財の保存修理及びその管理にあたっては、原物の形質、色合いなど原形を長期維持させることが課題である。復原整備にあつては過度な復原製作を避け可能な限り原形をとどめるように努めて再現をはかる。当該資料に関しては特に同種の資料がほとんど現存しないことから、唯一資料である。しかし破損も著しくこのまま放置していくと貴重な文化財が滅失する恐れもある。あわせて、本村にとって百按司墓は今帰仁城跡とあわせて「今帰仁上り」の重要な参拝地として、村の指定文化財として登録されている。この観点から木棺を大切に守り、活用していくことが重要である。当該資料の保存修理により後世に貴重な文化遺産を継承する。

2. 方針

修理にあたっては、現状を破壊せず、できる限り現状を維持させるように努める。また、管理にあたっては学際的に当資料について研究を行い地域住民に広く活用されることが重要であるため今帰仁村歴史文化センターに保管し、調査の成果とともに木棺を展示公開する。

3. 修理仕様

業務名：百按司墓木棺修理委託

※下記特記仕様書は2ヶ年度分の内容を包括する。

※実際の契約にあたっては、年度毎に契約を行い、年度毎に成果品を分けている。

受託者：沖縄県 今帰仁村字仲宗根232番地

今帰仁村教育委員会 教育長 山城清光

受託者：奈良県 奈良市中院町11番地

財団法人 元興寺文化財研究所 理事長 辻村泰善

特記仕様書

1) 目的

この特記仕様書は、百按司墓木棺の修復の委託業務に適用するものである。

2) 適用範囲

本業務は資料の破損状況に応じてクリーニング・防腐・防虫・防錆・修復・強化処理を施す。処理レベルは次のとおりとする。それによりがたい場合は、監督員と協議の上その他の文献を準用し報告書の中で設計に対する根拠を明示すること。

3) 資料

この作業対象となる資料は、別添図面（図7～11参照）に示すとおりである。

4) 業務内容

対象資料についてクリーニング・漆塗層の剥落止め処理・乾燥・合成樹脂含浸による木部材の強化・木部虫損及び欠損箇所の補修と接着・釘の防錆処理・脚材の復原製作・木製部材の防腐・防虫処理・修復後の経過観察・復原のための調査と現況図及び復原設計図の作製を行う。

・復原設計検討を実施し、木棺の復原を行う。

5) 業務の実施について

(1)受託者は、本業務の実施に当たっては業務主任技術者を定めるとともに業務工程表を受託者に提出し、承認を受けるものとする。

(2)受託者は、本業務の実施に当たっては、連絡員を定め、担当係との密接な連絡を取り、必要に応じて担当係と協議するものとする。

6) 成果品の提出

保存修理業務

第1号百按司墓木棺 1基

第2号百按司墓木棺 1基

第3号百按司墓木棺 1基

報告業務

(1)記録 原稿1部（製本2部）

(2)図面 原稿1部（観音開2部）

(3)報告書 原稿1部（製本2部）

(4)写真等 ネガフィルム（ネガアルバム製本1部）

打合せ簿を整理して提出すること。

7) 検査

成果品提出物の検査の結果、不良個所があった場合は、速やかに訂正し、再検査を受けなければならない。

8) その他

疑義が生じた場合は監督員と協議の上で決定する。

3 体制

1. 体制

修復業務に関しては（財）元興寺文化財研究所が受託して実施した。業務を遂行するに
辺り下記の体制で実施した。

平成14年度

受 託 財団法人 元興寺文化財研究所
監 修 所長 坪井清足
事 務 管理部長 伊藤健司
事 務 吉村佐紀恵
業 務 文物修復研究室
責 任 者 室長 山内章
調 査 角南聡一郎
技 術 山内章
作 業 山内章・藤原千沙
写真撮影 大久保治
樹種鑑定 井上美知子

平成15年度

受 託 者 財団法人 元興寺文化財研究所
監 修 所長 坪井清足
事 務 管理部長 狭川真一
事 務 吉村佐紀恵
業 務 彩色資料修復室
責 任 者 室長 山内章
調 査 角南聡一郎
技 術 山内章
作 業 山内章・大垣奈緒美・木下雅代・谷真澄
写真撮影 大久保治
X線透過試験 村田忠繁
塗膜分析 井上美知子

2. 外部委託

以下の作業については外部の専門業者に委託した。

燻蒸（殺虫・殺卵・殺黴処置） （株）エフ三益（大阪市）
1号木棺飾金具の複製品製作 スタジオ三十三（京都市）
2号木棺屋根の復原図面作製 設計同人G A N 代表 赤嶺和雄（那覇市）
2号木棺屋根の復原製作 松原工務店（大阪府堺市）
2号木棺の支持安定台の製作 スタジオ三十三（京都市）
3号木棺の脚と底板の棧の複製品木工製作 千本家具製作所（奈良市）
木棺の美術品輸送 日本通運（株）奈良支店（奈良市）

4 処置内容

修復業務受託（財）元興寺文化財研究所

1. 運搬に際しての漆膜と金具の保護処置 〈第1号木棺、第2号木棺、第3号木棺とも共通〉

木棺を当研究所へ運搬する際の振動により、1号木棺の漆膜や金具・鉾が脱落する虞れがあった。そのため、今帰仁村歴史文化センターに於いて保護処置を行った（写真23）。

まず、剥落しつつある漆膜の剥離箇所に兎膠（ホルバイン工業（株）製）溶液を注入し木地と接着した。次に、脱落しそうな漆膜と金具や鉾の表面に布海苔液で典具帖紙（極薄の楮紙）を張り、仮固定した。紙張りは修理時に水で湿らさなくても容易に剥がせるように布海苔液の濃度を調整した。



写真23 運搬前処理

2. 漆膜の剥落処置

漆下地は泥下地で、水気を含むと脆く粉状に崩れる状態であった為、アクリル樹脂（パラロイドB72：ロームアンドハース社。以下文中ではB72と略記する）溶液を塗布し強化をした（写真24）。その後、兎膠10%溶液を剥離部分に注入し電気コテで熱を加え、水蒸気で徐々に塗膜を柔らかくし圧着した（写真25）。

塗膜は全体的に剥離が激しく、反り返り・袋状・鱗片状等、多様な破損劣化が見られた。特に、棚板上面部は袋状に浮き上がって剥離し、棚板下面部には大きく反り返り剥離しており、上面・下面の剥離の様子に大きな違いがみられた。

1号木棺は取り出された時の状態は、かなり腐蝕し、屋根部・底板・6脚の脚が欠失し、中には白骨が七部目ほどまで入っていた。外側の朱漆は剥落し失われていたが、内側には剥離した状態で残存していた。漆膜の剥落止めは、



写真24 剥落処理（兎膠を注入）



写真25 剥落処理（塗膜圧着）

まずB72で漆下地の地固めをし、次に下地と漆の隙間に兎膠を注入し、電気コテで圧着した。

①漆膜の剥離（下地と共に剥離）

一部残っている漆がそのまま塊となって全体的に浮き上がって剥離していた。（浮き上がって剥離している箇所を一つ一つ位置を合わせながら兎膠を注入し、電気コテで接着、固定した。）

②漆膜の剥離（漆離）

木地が虫喰され、漆下地が薄皮のようにかろうじて遺っている箇所があった。（B72溶液を注射器で注入し下地と木地の接着強化をし、兎膠を下地と漆膜の間にさして、電気コテで接着した。）

③木地の補填（補填剤注入）

虫喰跡が激しく、木地がなくなり虫糞の塊上に漆下地と漆膜がかろうじて違っていた。（木地の欠損箇所にエポキシ樹脂＜セメダインハイスーパー5、又は30：セメダイン（株）製。次に漆膜箇所に兎膠を注入し、電気コテで圧着した。）

木地の補填（補填剤注入が困難な場合）

木地の虫喰が激しく、空洞になっている奥までハイスーパーを注入できない箇所があった。（漆下地ごと剥がせるところは一旦剥がし、木地の端面に合わせてハイスーパーを充填し、漆下地の下の欠損部を補った。次に剥がした下地層をハイスーパーで接着し、兎膠で接着して戻した。）

④剥落止め手順

上述した剥落止め手順として、まず、下地と漆膜の隙間に兎膠を注入し、漆膜の表面に軽く湿りをあたえ、テフロンペーパーをあて、電気コテで熱を加えながら漆を伸ばして圧着した。

⑤剥落止め処置剤（兎膠）の特質

漆膜は激しく反り返り剥離していたが、漆膜に湿りをあたえ加熱することによって漆膜が柔らかくなり元の形に戻すことが出来た。接着には可逆性のある膠を使用した。兎膠はゲル温度が比較的高く注入後すぐにゲル化が進み液垂れしにくいという利点がある。

3. 分析

分析の結果、1号、2号の外側、3号木棺の朱色塗料は漆で、それぞれHg（水銀）が検出された。2号木棺内部の茶色塗料は漆であるが、Hgは検出されなかった。

4. 木棺の梱包と運搬

木棺を安定台に載せ梱包し。運搬は本村教育委員会で行い元興寺文化財研究所へ移送・搬入した。

5. 燻蒸

木棺は虫害や黴・菌類による害が懸念されたため、酸化エチレンと臭化メチルの混合薬剤（エキボン：液化炭酸（株））を用いた包み込み燻蒸により、殺虫・殺卵・殺黴処置を行った。燻蒸施工は搬入時と平成15年7月の2回実施した。

6. 返納と保管

平成14年6月5日に元興寺文化財研究所に受託し同年8月1日に運送、奈良県にて開梱してから、約一年奈良県にて沖縄の資料が海を渡り修理されたことになる。返納に際しては美術品を専門に取り扱う業者に見積もり依頼し、日本通運によって今帰仁村歴史文化センターへ返納を行った（写真26）。

返納後は館内で展示まで一時保管することを計画していたが、最も環境の安定した保管場所ということもあって直接展示ケースへ保管した。保管に際しては紫外線に注意する必要があると指摘されたため紫外線カットした照明



写真26 開梱

を用いることが望まれる。また、湿度については現在今帰仁村歴史文化センターにおける管理現状を把握できないためデータの収集につとめることが肝要で、平成15年度にデータロガーを購入し、湿度と温度を計測する予定である。また、保管方法についてもさることながら、活用を計ることも重要である。このことから同センターの展示ケースにおいて百按司墓の歴史を紹介するとともに、修理についてもパネルで紹介する（写真27）。



写真27 展示

5 1号木棺の修理

1. クリーニング

木地に付着した土汚れや虫糞を除去した。

2. 漆膜の剥落止め処置

木地の脆弱な箇所には有機溶剤に溶解したアクリル樹脂パラロイドB72を注入して強化処置を施した後、剥離し捲れた漆膜を兎膠で接着した。処置方法は、反って捲れた漆膜を水蒸気で柔らかくし、剥離部分の隙間に兎膠溶液を注入し鑊を使って木地と接着した（写真28）。

3. 木地の強化処置と補修

木地の破損箇所をエポキシ樹脂（セメダインハイスーパー：セメダイン（株）製）で接着した。欠損部は充填用のエポキシ樹脂（アラルダイト6504：チバ・スペシャル・ケミカルズ（株）製）を補填、成形し、表面をアクリル樹脂絵具（アクリルガッシュ：ホルベイン工業（株））で補彩した（写真29）。

4. 金具の強化と防錆処置

1号木棺の角部の金具は薄くて脆弱ため、裏面にB72溶液で典具帖紙を貼って強化した（写真30）。金具と鉾は錆をクリーニングした後、防錆剤ベンゾトリアゾールを混合したアクリル樹脂（トアインクラック：東洋ペイント（株）製）を塗布して防錆処置を施した。防錆処置後に剥がれた金具をハイスーパーで元の位置に固定した。最も残りの良い金具については複製品を製作した（図14）。



写真28 剥落止め処置（1号箱内面）



写真29 補彩

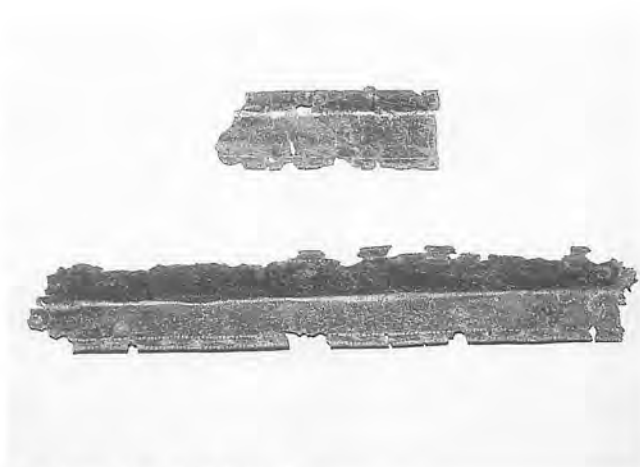


写真30 金具強化処置

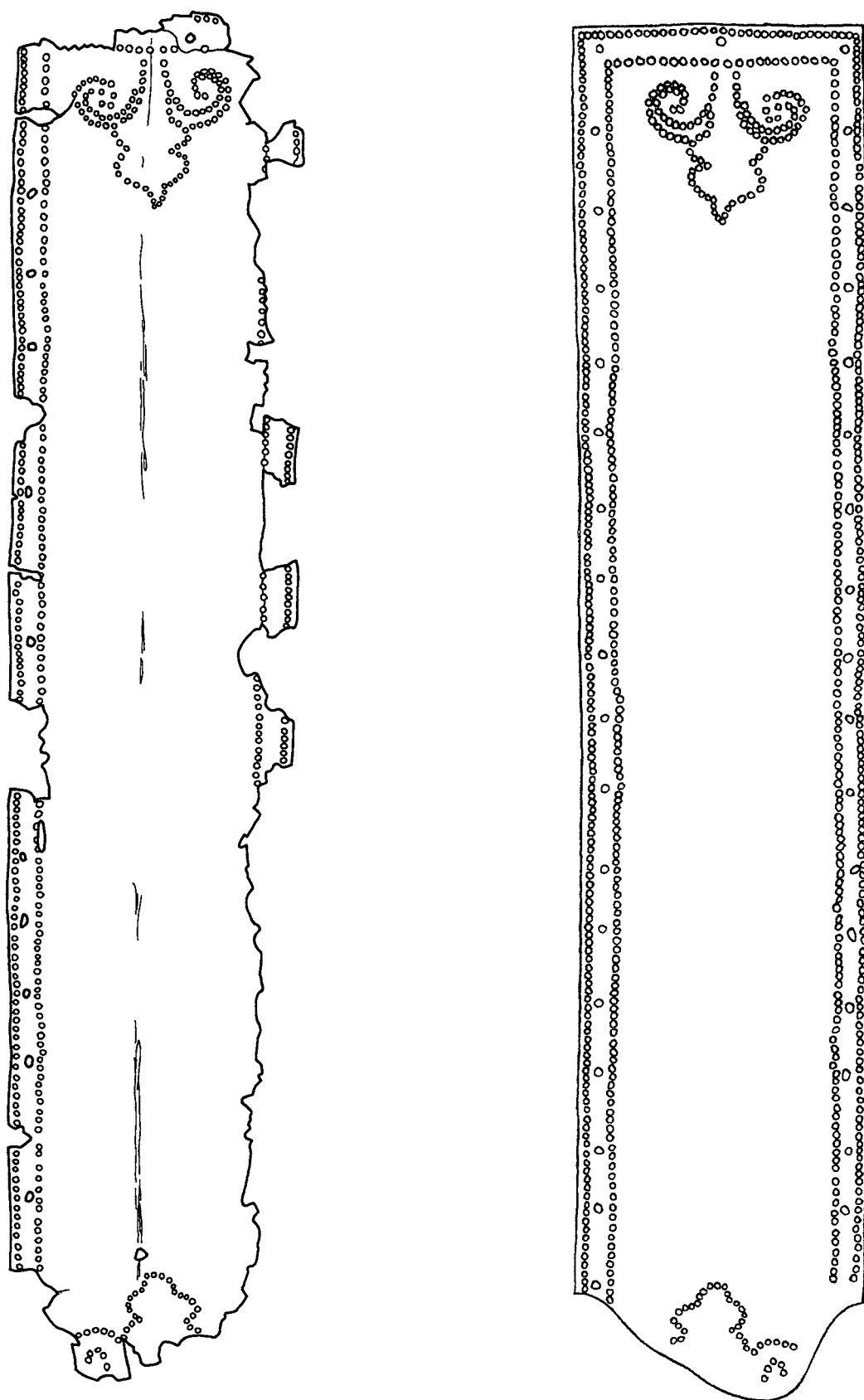


图14 1号木棺金具 (左：展开实测图表面 右：复原製作图裏面)

6 2号木棺の修理

1. クリーニング

木棺の表面に付着した土汚れや虫糞等を筆・竹串・粉末消しゴムを用いて除去した。また、底部に遺存していた骨片を採取した。クリーニング後、黴の再繁殖が懸念されたのでエチルアルコールに溶解した防黴剤チモールを全体に塗布した。木地にこびりついた汚れはアンモニア水を使ってクリーニングした（写真31）。



写真31 クリーニング

2. 漆膜の剥落止め処置

特に該当なし。

3. 木地の強化処置と補修

① 板材の補修

虫食いや腐朽で破損・劣化した個所はアラルダイト6504またはマイクロバルーンを混合したハイスーパーを補填、強化し、側板の大きな欠損個所はアラルダイト1264で芯材を作り、表面はアラルダイト6504で成形し、補填した樹脂表面をアクリル樹脂絵具で補彩した（写真32）。



写真32 脚の補修

② 脚の補修

脚の底部が欠損した個所はアラルダイト1264で芯を作りアラルダイト6504で成形した。樹脂だけでは強度が不十分と思われる個所は芯材にハイスーパーでガラス繊維を貼り強化した。脚と本体の固定が不安定な個所はシリコンゴムを挿入し仮固定した。

③ 側板と底板の固定

側板の組合せ個所と側板と底板の接合面は木釘で固定されていたが、修理前はこの木釘が所々欠落し固定が不安定な状態であった（写真33）。このため、木釘が欠落した釘穴に竹釘を挿入し、ハイスーパーで接着して固定した。竹釘の挿入個所は図15に記載した。



写真33 接合面の固定

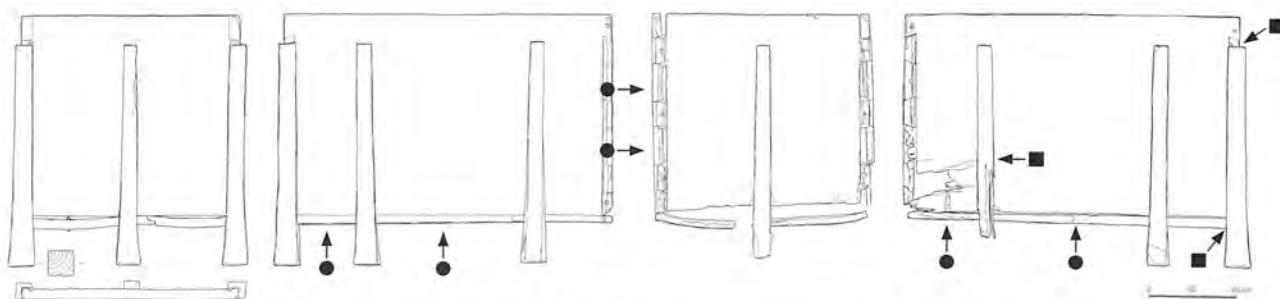


図15 側板と底板の固定 (矢印固定箇所、■＝シリコンゴム挿入箇所 ●＝竹釘挿入箇所)

④底部支持台の製作

補修した脚への荷重を少なくし本体を安定して支えるために、底部にアクリル材の支持台とシリコンゴムを挿入した(図15)。

4. 金具の強化と防錆処置

特に該当なし。

5. 2号木棺の屋根の復原製作

2号木棺の屋根材と推測する部材と島袋源一郎のスケッチ等の資料を参考として屋根の復原製作を行った。当教育委員会と元興寺文化財研究所で部材の実測を行い、復原図面は那覇市の設計同人GAN代表赤嶺和雄氏に委託した。

設計図面を元に検討を重ね、屋根を試作した上で再度詳細な検討を行うことになった。試作品(写真33)の製作は大阪府堺市の松原工務店(松原茂明社長)に委託した。試作品を基にした検討会を開催(写真34)し設計案を完成させ、松原工務店に複製品製作を委託した。木棺本体や屋根材の樹種はイヌマキで、複製品の木材料はオリジナルに合わせることが望ましいと考えたが、現在では、屋根板などの大きな部材を復原できるイヌマキ材は入手出来ない。このため、ヒノキ材を用いて複製品を製作した(写真34)。また、釘はオリジナルに合わせて巻き頭の銅釘を作り使用した。



写真33 試作品



写真34 検討会

7 3号木棺の修理

1. クリーニング

木地に付着した土汚れや虫糞を除去した（写真35）。

2. 漆膜の剥落止め処置

木地から剥離した漆膜の剥離間隙に兎膠液を注入して接着した。

3. 木地の強化処置と補修

木地の破損箇所をハイスーパーで接着した。欠損部はアラルダイト6504で補填、成形し、表面をアクリル樹脂絵具で補彩した（写真36）。

資料番号3-23・3-24・3-25・3-26の4点は木の劣化が著しいため、ハイスーパーで接着と強化処置を行った後、B72溶液を含浸し木地の強化を行った（写真37）。これらの資料は自然乾燥後に再度ハイスーパーとアラルダイト6504で補修し、樹脂部分をアクリル樹脂絵具で補彩した。

4. 金具の強化と防錆処置

特に該当なし。



写真35 クリーニング



写真36 補彩



写真37 強化処置

8 3号木棺その他部材の修理

1. クリーニング

筆などを使って付着物を除去した。

2. 漆膜の剥落止め処置

漆膜の剥離箇所に兎膠溶液を注入し接着した。

3. 木の強化処置と補修

①木の補填

木の破損・劣化部分にアラルダイト6504または可塑剤マイクロバルーンを混合したハイスーパーを補填し、樹脂の表面をアクリル樹脂絵具で補彩した。

②下地の強化

B72溶液を塗布し漆下地と思われる付着物の固着を強化した。No.3-17は牛膠溶液を塗布して木の脆弱な箇所の接着と強化を行った。

③破片の接着

No.3-20はハイスーパーで破片を接着した。

④樹脂含浸

部材全体をB72溶液に浸漬し、樹脂溶液を浸透させた後に引き上げ自然乾燥させた。この処置により脆弱な木を強化することが出来た。

4. 金具の強化と防錆処置

①釘の防錆

錆を除去した後、トアインクラックを塗布し防錆処置を施した。

②位置不明の釘の防錆処置

1) 銅釘・鋌・飾り金具の防錆

ベンゾトリアゾール溶液に浸漬し、引き上げ後、自然乾燥した（写真38）。

2) 鉄製釘

アクリル樹脂（Paraloid B44：ROHM&HAAS社）溶液に浸漬し、引き上げ後、自然乾燥した。

表11 3号木棺その他部材の処置内容

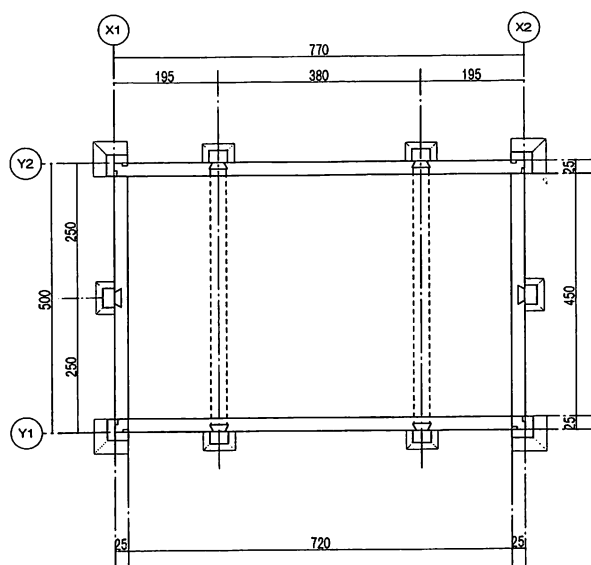
資 料	処置内容
No.3-11	クリーニング、漆膜の剥落止め、補填、釘の防錆
No.3-12	クリーニング、補填
No.3-13	クリーニング
No.3-14	クリーニング
No.3-15	クリーニング、下地の強化
No.3-16	クリーニング、漆膜の剥落止め、補填、
No.3-17	クリーニング、牛膠による木の接着と強化、釘の防錆
No.3-18	クリーニング、補填
No.3-19	クリーニング
No.3-20	クリーニング、ハイスーパーによる接着
No.3-21	クリーニング、下地の強化
No.3-22	クリーニング
No.3-23	樹脂含浸、補填
No.3-24	樹脂含浸、補填
No.3-25	クリーニング
No.3-26	クリーニング
No.3-27	クリーニング、下地の強化
No.3-28	クリーニング、下地の強化
No.3-29	クリーニング
No.3-30	クリーニング、下地の強化
No.3-31	クリーニング
No.3-32	クリーニング



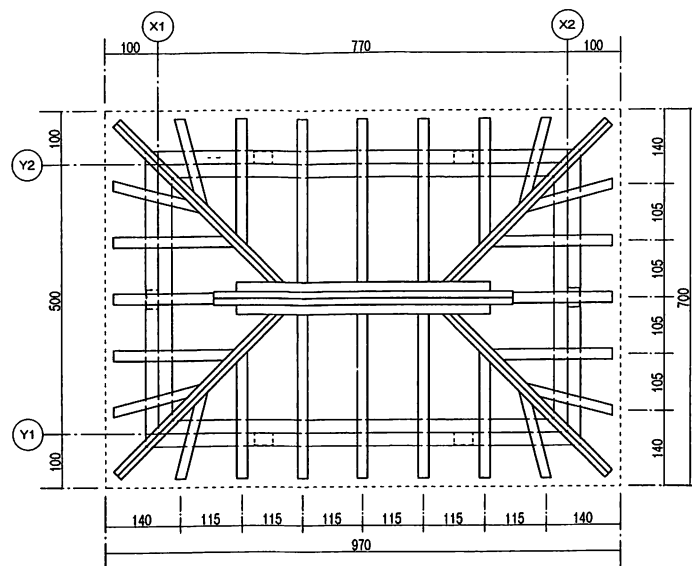
写真38

9 復原図の設計と作製

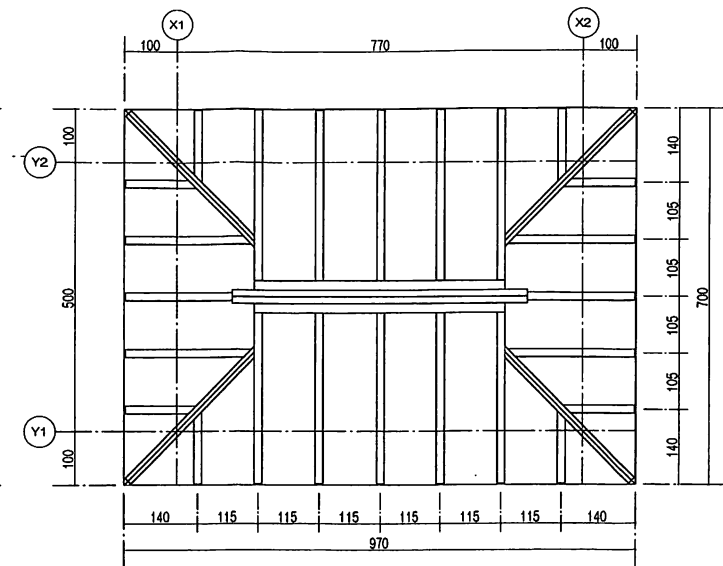
元興寺文化財研究所で木棺の部材を実測し、それを基に本村教育委員会と協議を重ね、2号木棺（3号b）の復原設計を行い、復原図を作製した（図16～19）。



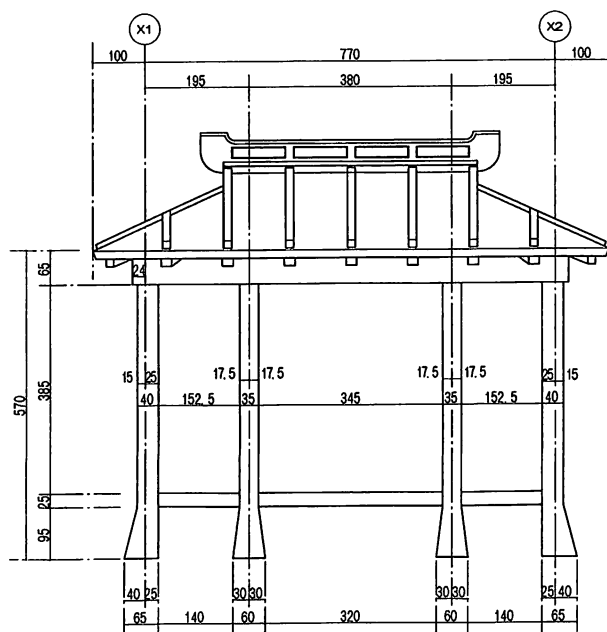
平面図



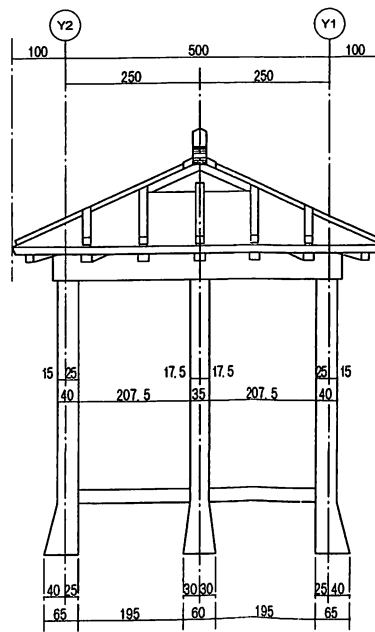
小屋伏図



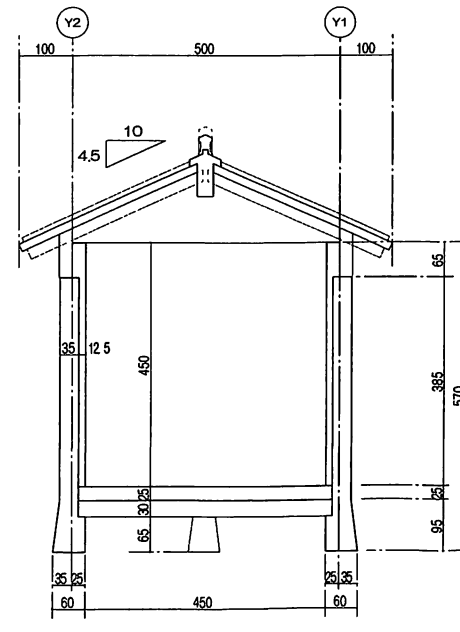
屋根伏図



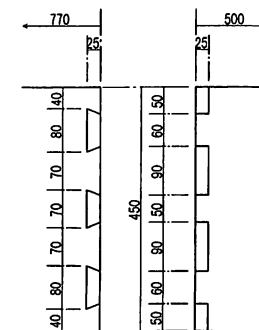
立面図



立面図



断面図



仕口

図16 2号木棺復原図 (1)

PRPJCT	百按司墓の木棺 (板厨子) 修理事業	TITLE	2号木棺 (平面図・立面図・断面図)	2003.9.30	承認	検図	担当	財団法人 元興寺文化財研究所 (有) 設計同人GAN	SEET No A-1/4
				SCALE 1:10					

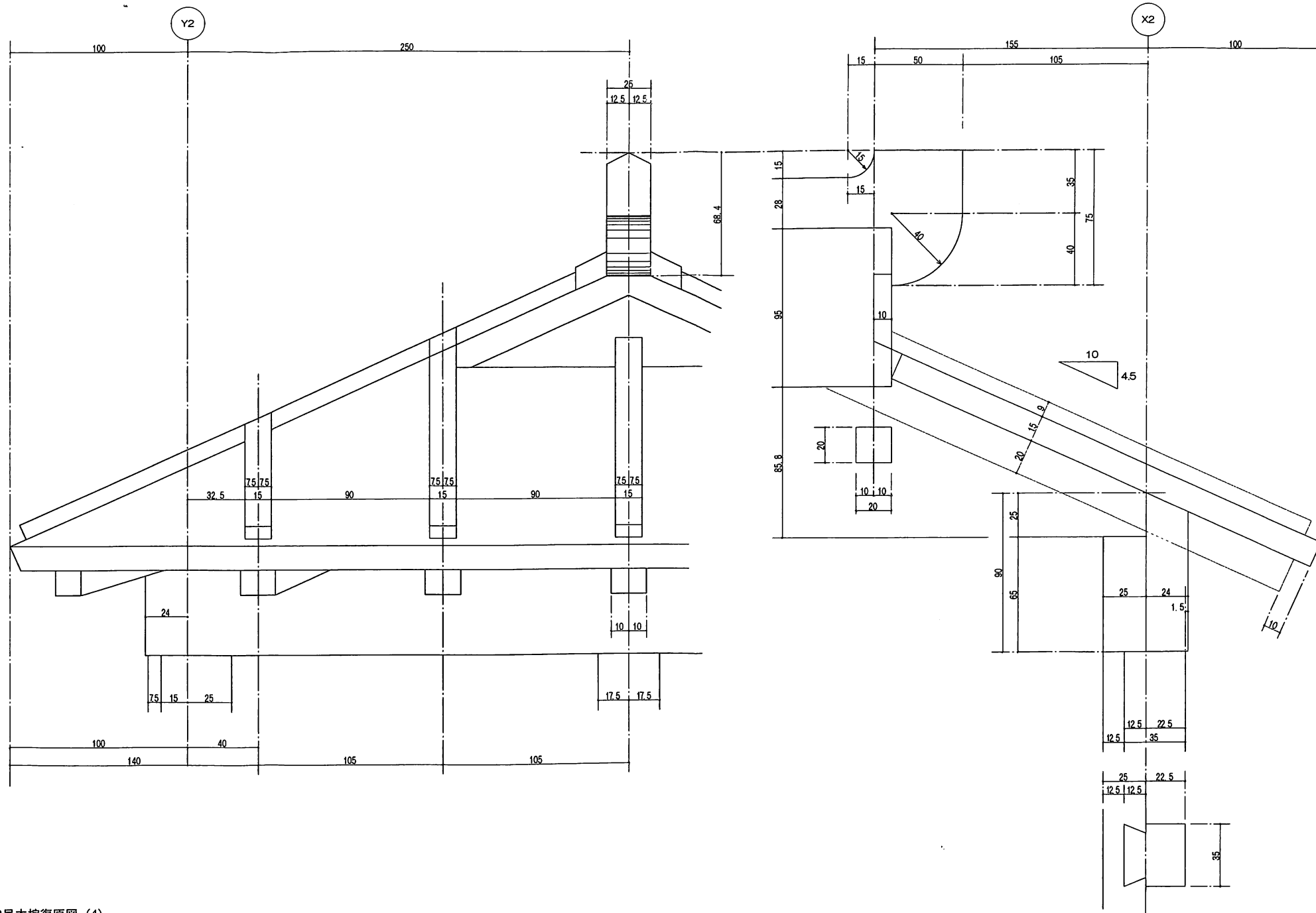
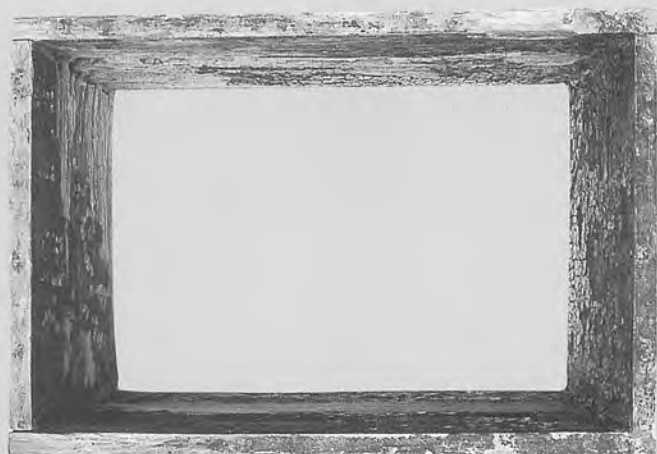


図19 2号木棺復原図 (4)

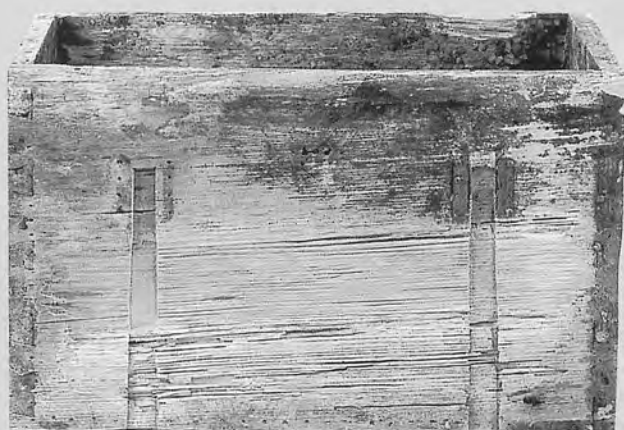
PROJECT	百按司墓の木棺（板厨子）修理事業	TITLE	2号木棺 断面図-2	2003.9.30 SCALE 1:10	承認	検図	担当	財団法人 元興寺文化財研究所 (有) 設計同人GAN	SEET No A-4 4
---------	------------------	-------	------------	-------------------------	----	----	----	-------------------------------	---------------------



5



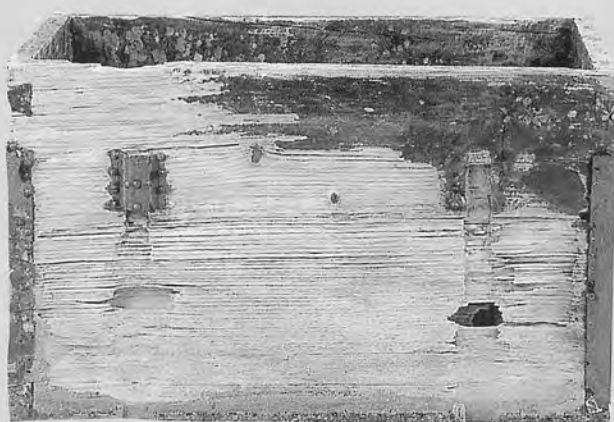
1



2



3

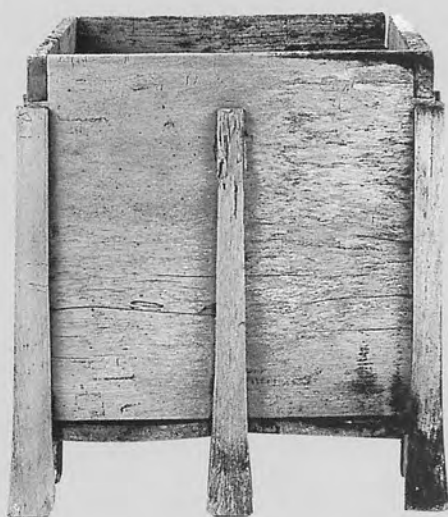


4

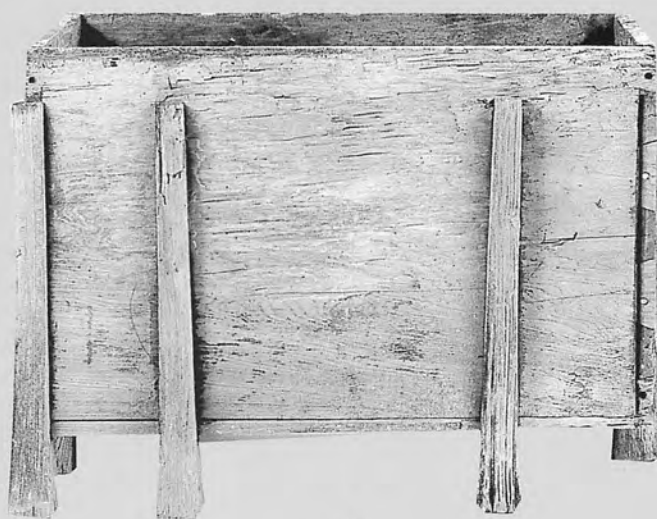
写真39 1号木棺修理完了写真



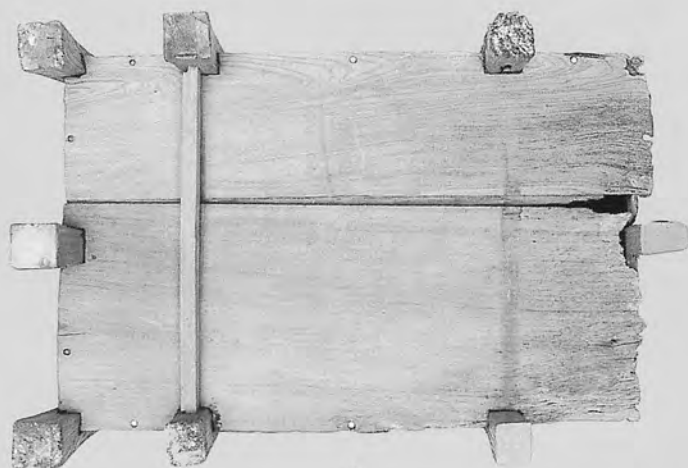
5



1

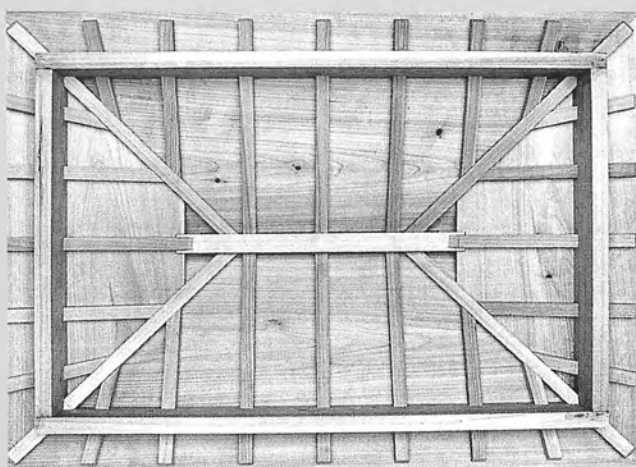


2

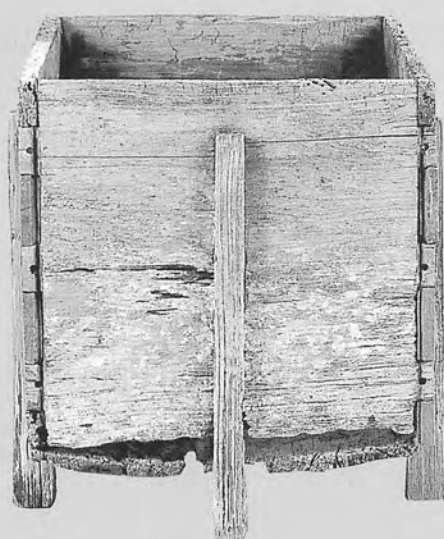


6

写真40 2号木棺修理完了写真



7



3



4

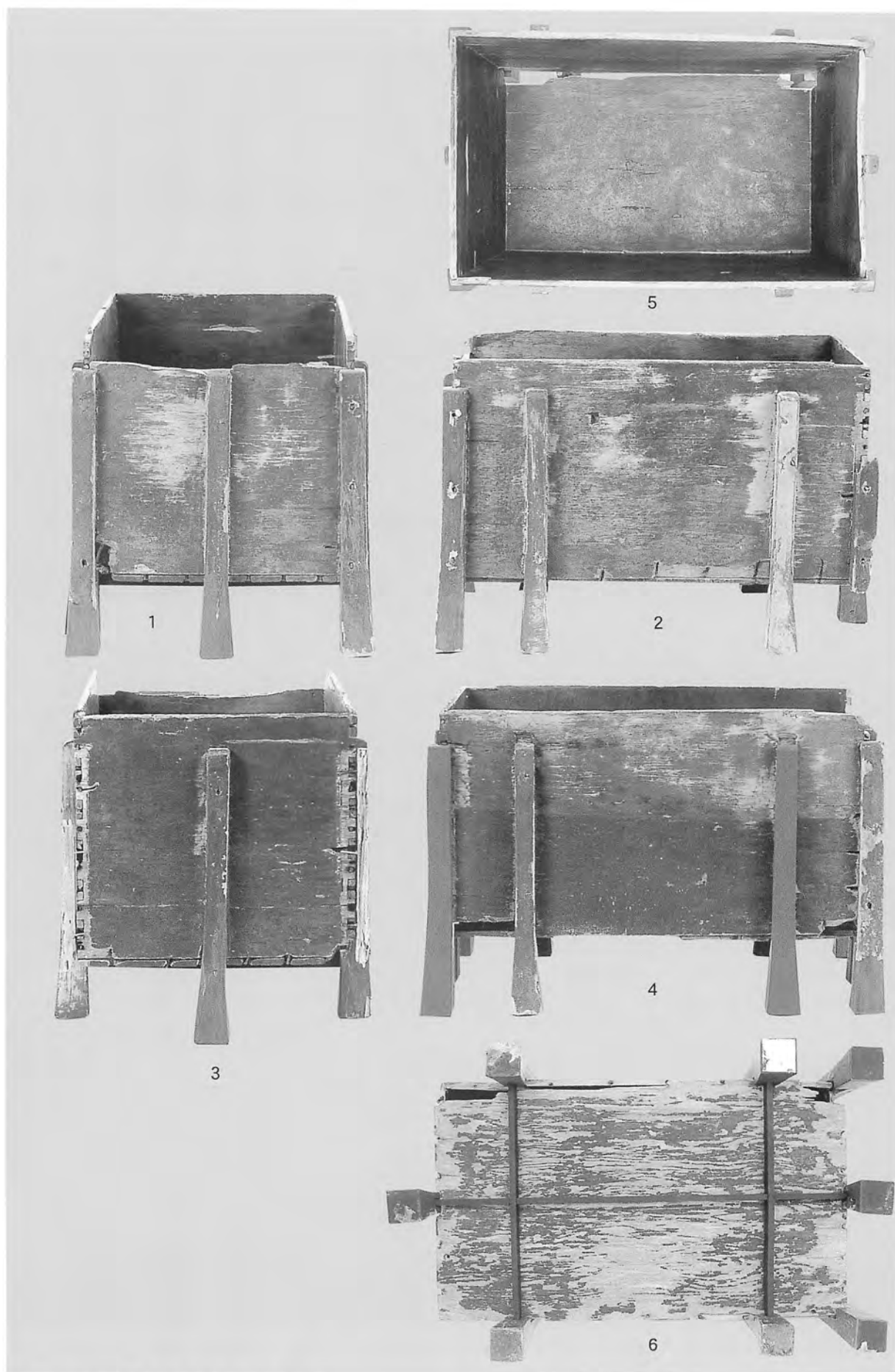


写真41 3号木棺修理完了写真 (1)

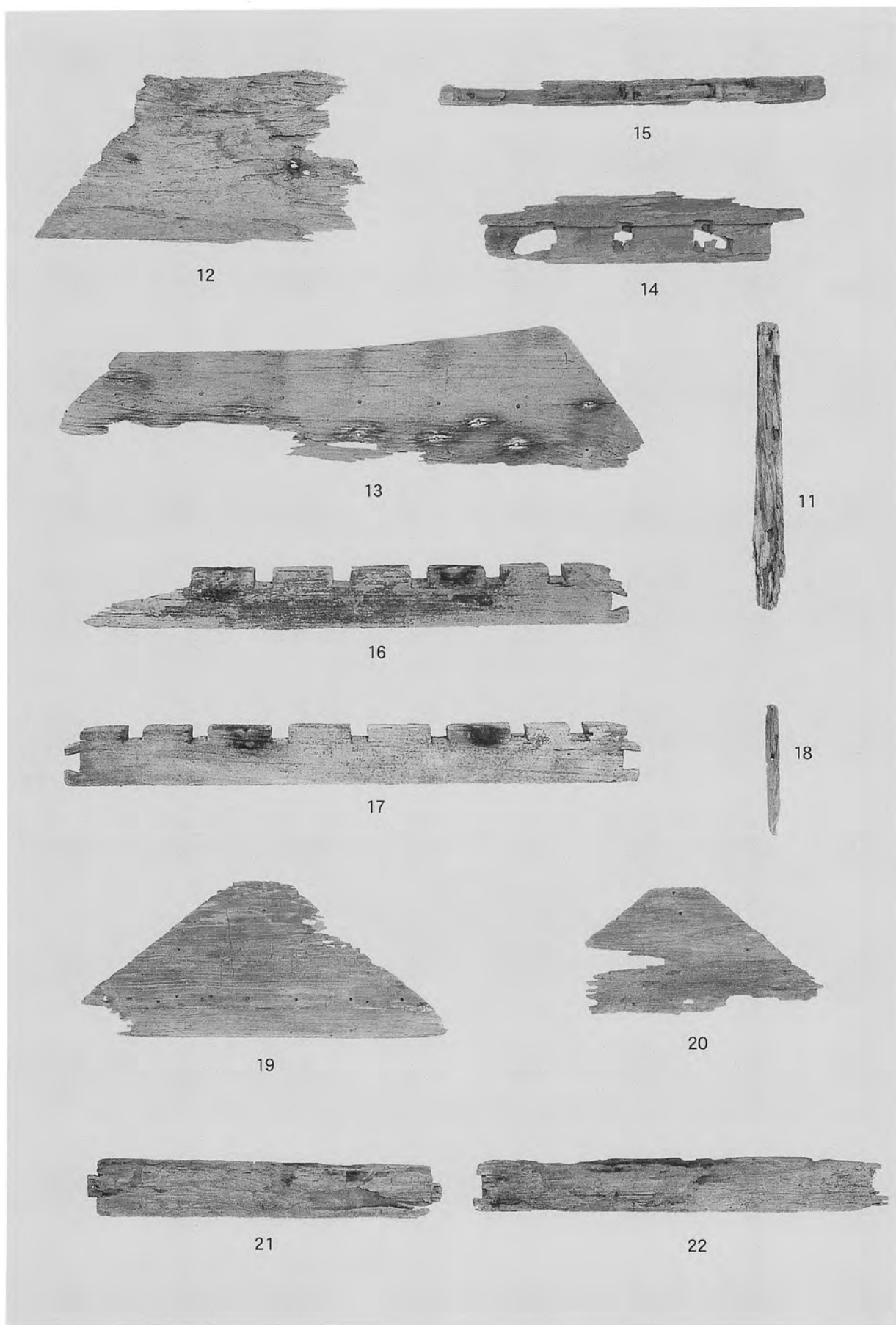


写真42 3号木棺修理完了写真 (2)

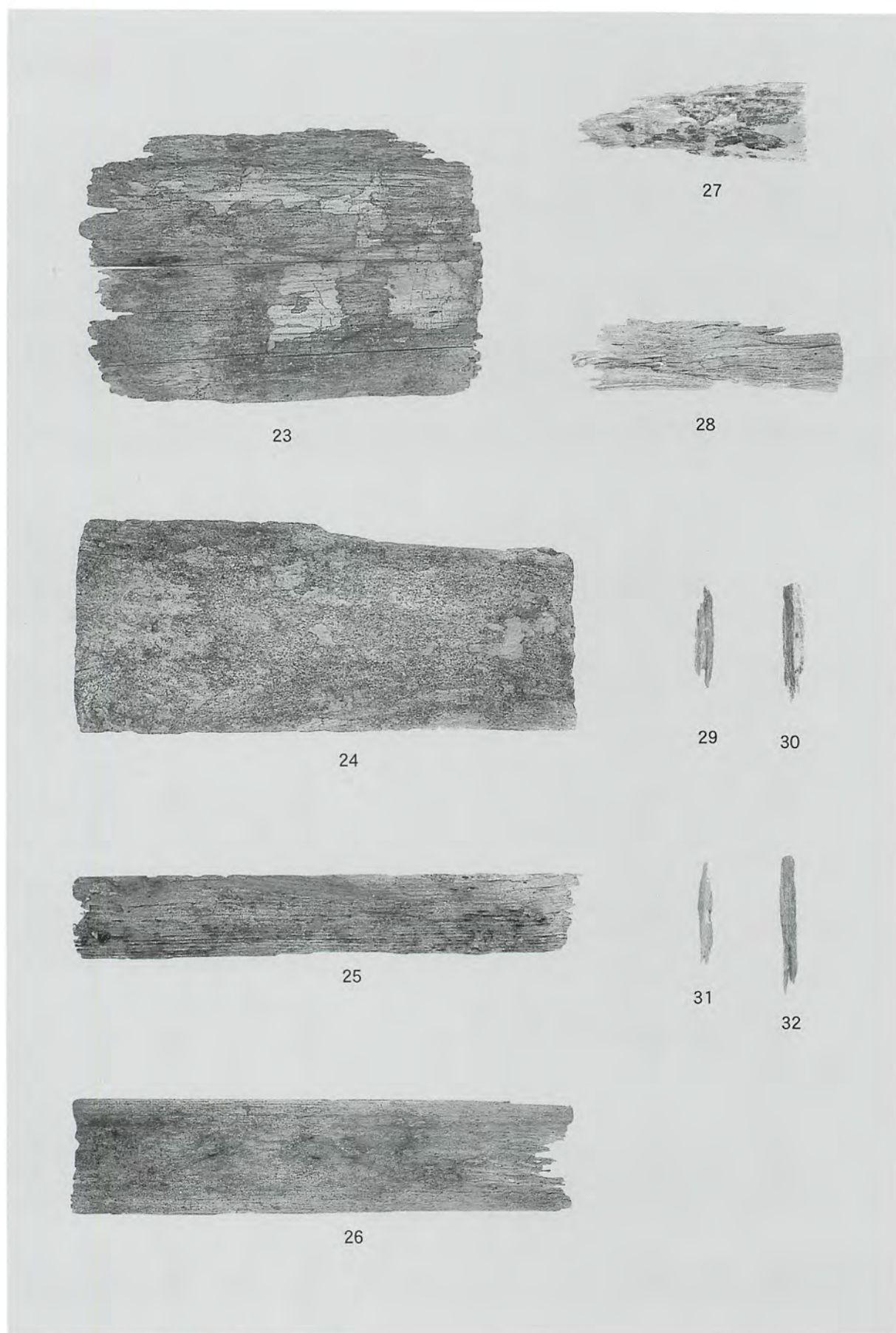


写真43 3号木棺修理完了写真 (3)

第Ⅳ章 おわりに

百按司墓の木棺修理について、調査の成果を含め前章まで紹介してきた。百按司墓は今帰仁村のみならず沖縄県を代表する歴史的な墓である。墓所内の木棺についてもこれまで笹森儀助、島袋源一郎、東恩納寛惇（1950）、河村只雄（1999）、田辺泰（1937）など、著名な研究者によって写真や図等とともに紹介されており周知のところである。しかしこの中で最も知られている木棺は、戦前沖縄県教育會府設郷土博物館へ移送展示され、残念ながら先の大戦にて滅失し現存していない。今回の木棺は現存する資料としては唯一の資料で、百按司墓第1号墓所には概略3基存在する。第5号墓所にも2基、村内の他の墓でも木製の厨子を確認することはできるが、いずれも白木で漆の塗られていないもので形式的には今回修理した木棺とは異なるものである。

今回の修理で明らかになったことを列記する。

まず1号木棺については既に原位置から動かされており、極近い最近に人の手が加えられているようである。これは底板の代わりにビニールが敷かれていたことなどから分かる。側板は崩れ落ち穴があいており、これについては今回部材の強化とともに補填を行っている。ただし、脚部との継ぎの部分には意図的に穴が開けられたと考えられる様子が確認されることから、形状を維持する状態で補填を行った。漆膜の剥落は著しく、木棺の脆弱化とともにかなり厳しい現状であった。外面においては特に著しく、また内面においても大部分はささくれ立っているため、修復業務責任者である元興寺文化財研究所の山内章氏によってご苦勞をお願いすることとなった。また、接着に膠をつかったのは今後の保全・分析を考慮してのことである。1号木棺で関心を集めたのは薄板の金具である。分析によって真鍮であることが判明したが、本土では江戸時代に流通する真鍮が沖縄ではどの時代から確認されるのかを知ることで木棺の製作年について迫ることが出来るかもしれない。また金工の技術的な側面からもアプローチすることによって木棺の年代的あるいはその成立の背景などについても迫れるかもしれない。これに関しては中野徹氏より中国の文様との関係についてコメントいただくことができた。

2号木棺はバラバラになった部材が棺内に入っているような状況であった。バラバラの部材は3号木棺として検討を行った。その結果一部の部材については2号木棺に伴う蓋の部材であると想定することができた。これにより2号木棺が3基の木棺の中で唯一身と蓋の構造を伺うことができた。屋根部材については幸いなことに棟、屋根前板、軒と想定される板材が揃っていたためおおよその形を想定して復原製作することができた。しかし実際には勾配や棟の部分のデザイン、屋根側板部分などについては写真（図6-⑥⑨）、図（図6-①）などを参照に復原した部分も少なくない。これらの復原製作についても今後詳細に検討する必要がある。2号木棺については漆膜もほとんど残っておらず、また縁金具は無い。

3号木棺については、2号木棺に入っていたもの全てを3号としているが、検討の結果4つのグループの部材に分類できると想定した。1つは先に紹介した2号木棺の蓋の部材群である。もっとも形が良く退色も少ない資料であった3号木棺aとした部材群については側板の4面、底板、脚材などがほとんど揃っていたため元の形に復原することができた。約30年前に一部の部材が琉球大学附属資料館風樹館に保管されていたため、あわせて当資料についても復原部材として元に戻すことができた。この部材については保存状態もよく、色彩もほとんど退色していないことから本来の色調を想像するには参考になる。さて3号木棺とした部材だが、上述した木棺のいずれに該当するのか結局最後まで

分からなかった部材がもう2群存在する。1つは1本の脚材で1～3号のいずれの脚材とも形状が異なることからかつて百按司墓内に存在した多くの木棺の中の一つであろうと考えられる。もう一つは屋根材の板と考えられる資料である。本資料は脆弱化しているが漆塗りであることが確認できることから、これもかつてここにあった木棺の部材であるものと想定した。なお、不明の部材とした資料群は材質が樹種鑑定の結果二ガキと判明していることから木棺の部材ではなく、家形の墓の部材である可能性が高いと考える。

以上、百按司墓にあった木棺についてはこれまであった墓所内という劣悪な環境から救済することができ、かつ保存修理を目的とした調査を実施し、類例資料を収集する機会を得ることができた。今回の修復事業は、一重に平成14年度及び平成15年度に住友財団文化財修理事業によって助成を得て実施することができたものである。これまで木棺の保存整備が望まれていただけに、整備することができたのは住友財団のおかげである。このことは貴重な資料の復原修理に際して大変有意義であった。記して謝意を表する。

最後に、実際の修理にあたっては財団法人元興寺文化財研究所に修理委託して実施し、多くの専門の先生からご指導をいただき、少ない時間の中で成果をあげることができた。今後、木棺だけでなく百按司墓そのものの整備や保全を計る必要がある。特に来訪者が百按司墓を理解しやすいように木棺の復原模型や墓所内に本来あった家形の墓、現存する各墓所内の木片の保存なども検討が必要である。整備の推進、景観復原、円滑な活用のためのソフト整備など漸次進め、当該地域の歴史的風致を回復することが重要である。

参考文献

<史料>

- 1697年『中山世譜』(琉球史料叢書4) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 名取書店 1942年
1745年『球陽』(読み下し編) 琉球研究会編 角川書店 1974年
17世紀初頭編纂『おもろさうし』 外間守善著 角川書店 1993年
1471年『海東諸国紀』 申叔舟著 田中建夫訳 岩波文庫 1991年
1989年『古琉球三山由来記集』 東江長太郎 那覇出版

< あ >

荒川 浩和

- 1983年「百按司墓の漆龕－琉球漆工芸資料－」『漆工史』第6号 (p35～45)

石野 祐子

- 1999年「運天の百按司(ムムジャナ)墓」『なきじん研究』vol.9
今帰仁村歴史文化センター (p129～133)

上杉 茂憲

- 1881年「上杉懸令関係日誌」
(1965年『沖縄県史』第11巻資料編1)

鶴山 まり

- 1998年「櫃－その系譜と展開－」『故事』
天理大学考古学研究室紀要第2冊天理大学考古学研究室

Edmund Simon

- 1914年“riukiu,ein spiegel fur altjapan”
(エドモント・ジーモン 1979「琉球／古日本の鏡」について『えとのす』第11号)

沖縄県史編集室(編)

- 1966年『沖縄県史』第12巻資料編2 (p840～843) 所収
(1881年「沖縄県下今帰仁間切白骨埋えいノ件」)

< か >

加藤 三吾

- 1906年『琉球の研究』(中) (p54)

金関 丈夫

- 1978年『琉球民俗誌』(p229～245) 法政大学出版局
(金関丈夫 1929～1932年(『歴史と地理』24巻6号～29巻4号)

菊池 幽芳

- 1908年『琉球と為朝』

木下 義宣

- 1991年「百按司墓」『沖縄県の信仰に関する建造物』(p39) 沖縄県教育委員会

〈 さ 〉

島袋 源一郎

1919年『沖縄県国頭郡志』(p428)

1940年『本部町瀬底島大低門中元祖由来記』

新城 徳佑

1975年「百按司墓」『今帰仁村史』(p601～602) 今帰仁村役場

〈 た 〉

田辺 泰

1937年『琉球建築大観』(PLATE86・図)

田山花袋 編

1899年「百按司墓」『南船北馬』博文館

(1979年 復刻版『琉球名勝地誌』グリーンライフ／巻頭写真・p176所収)

田山 録彌

1901年『日本名勝地誌』博文館

〈 な 〉

仲原 弘哲

1984年「百按司墓」『広報なきじん』昭和59年2月 今帰仁村役場

1993年「運天の歴史」『なきじん研究』3 (p118～120) 今帰仁村歴史文化センター

1999年「運天間切役場(番所)と百按司墓図－写真に見る今帰仁92－」『広報なきじん』

平成11年6月 今帰仁村役場

2004年「今帰仁の調査から」『墓からわかる家族の歴史近世墓シンポジウム報告書』

浦添市教育委員会

〈 は 〉

東恩納 寛惇

1950年『南島風土紀』(p393)

1957年『琉球の歴史』(巻頭図版・p60～p63)

〈 や 〉

屋我 嗣良・金城 一彦・仲宗根 平男

1976年「イヌマキ古材の抗蟻性について」『木材工業』vol.31-2

四柳 嘉章

1998年「琉球漆器の漆技法について－塗膜の科学的分析報告(Ⅰ)－」

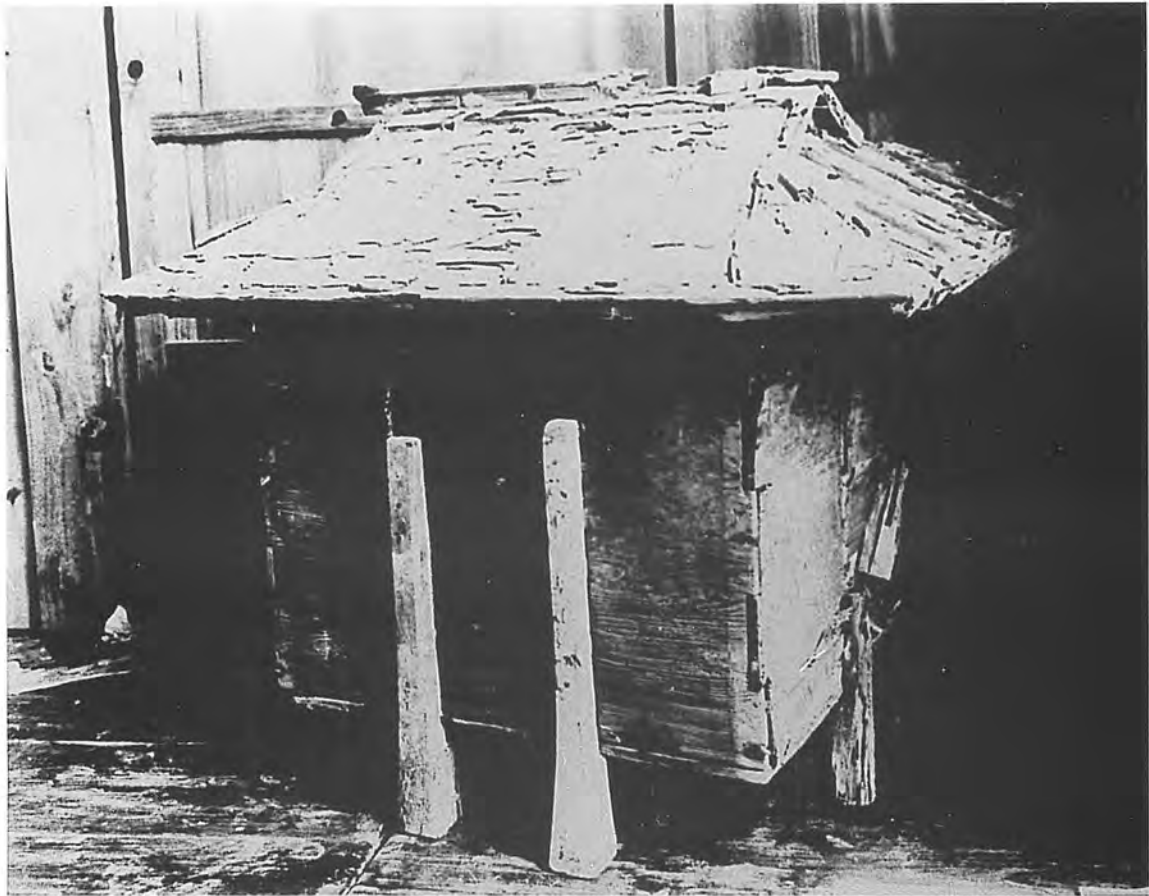
『浦添市美術館紀要』第6号 浦添市美術館

1998年『首里城京の内出土朱漆器の化学分析』『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書

(Ⅰ)－』(p337～339) 沖縄県文化財調査報告書第132集

沖縄県教育委員会

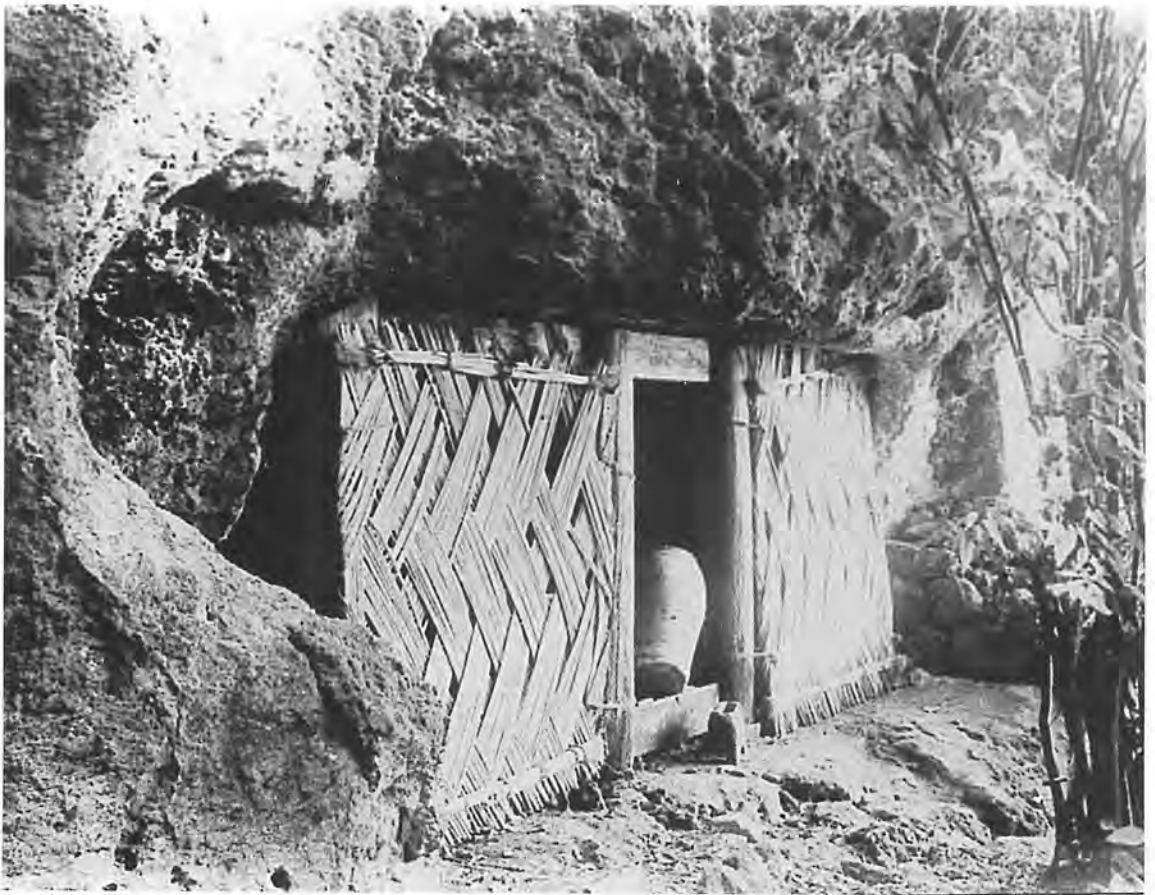
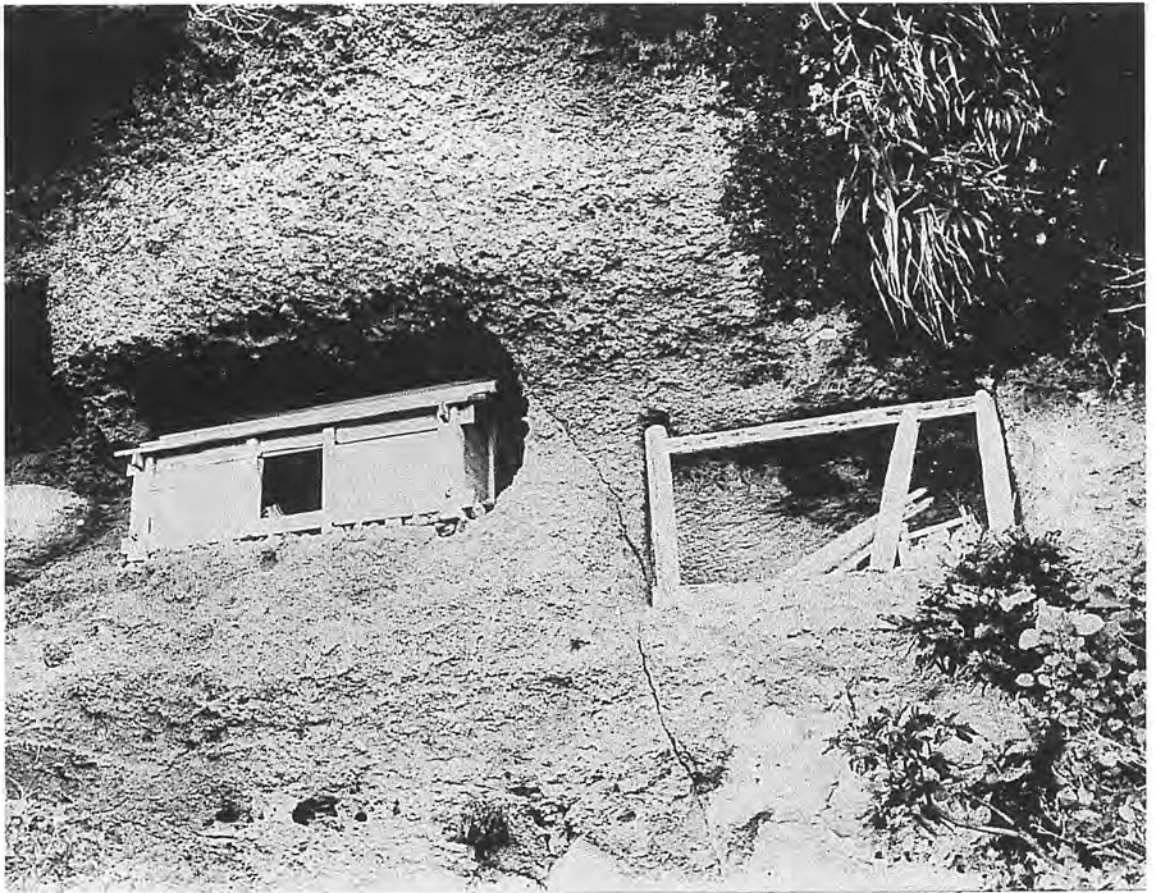
付 篇



『琉球建築大観』 早稲田大学所蔵（田辺泰撮影）資料



『琉球建築大観』 早稲田大学所蔵（田辺泰撮影）資料



『琉球建築大観』 早稲田大学所蔵（田辺泰撮影）資料

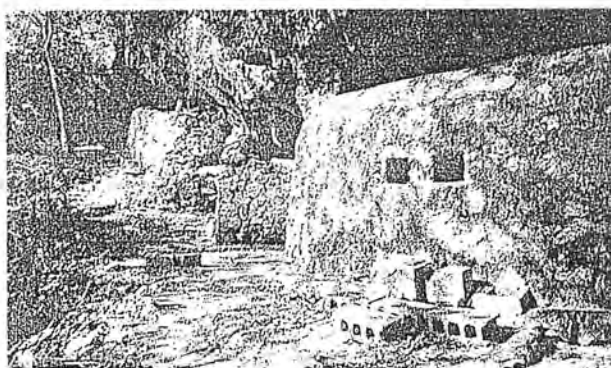


『琉球建築大観』 早稲田大学所蔵（田辺泰撮影）資料



『琉球建築大観』 早稲田大学所蔵（田辺泰撮影）資料

『琉球新報』 2002年4月10日（朝刊）



修復作業が行われている木棺が収められていた百按司墓—今帰仁村運天

百按司墓木棺の 修復作業始まる

今帰仁 住友財団が助成

【今帰仁】今帰仁村運天の百按司（ムムジャナ）墓に収められていた木棺の修復作業が、住友財団十周年の記念助成を受けて、三月から始まっている。

今帰仁村教育委員会（山城清光教育長）が保管する木棺は三つ。本格的な修復作業は、奈良県の業者や県内の専門家の協力を得ながら、二〇〇二年度と〇三年度で行う。山城教育長は「念願だったので、今回、助成を受けて始められるのは大変うれしい」と喜んでい

た。村教育委員会では修復後、村歴史文化センターで一般公開する方針だ。木棺があった百按司墓は運天港北東のがけの斜面中腹に位置し、九一年に村指定文化財に指定されている。木棺は高さ四〇—六〇センチ、幅が六五

センチ、奥行きが四五センチ、五〇センチ。外見が一部、そのまま残っているもののや木材がバラバラに壊れているものがあるという。村教育委員会による

今帰仁村の「百按司墓」

【今帰仁】今帰仁村運天の村指定文化財「百按司墓（むむじやなばか）」に納められていた約500年前の1基を含む木棺（もっかん）3基がこのほど修復を終え、村歴史文化センター（仲原弘哲館長）に保管されている。同墓は地方の首長だった按司（あじ）の墓とされ、骨を納め

た木棺は、石製や陶製の厨子甕（ずしがめ）より古く、県内に現存する最古の棺（ひつぎ）といわれる。また漆（うるし）の塗装は県内最古級の漆装資料とされる。村教育委員会の宮城弘樹文化財専門員は、墓を含めて「県、国の文化財指定へと調査を進めたい」としている。

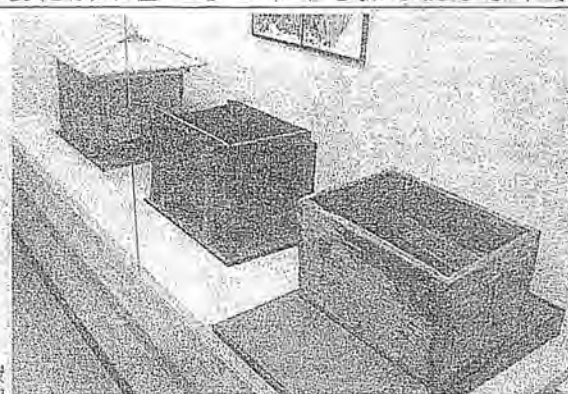
県内最古

木棺修復

漆の塗装も一級の資料 関係者「県、国の文化財に」

百按司墓の木棺は琉球王府時代の歴史史料「中山世譜」に（中国年号の）弘治十三年（一五〇〇年）の記録のある木棺と記録されている。明治期の沖縄を記録した「南嶋探験」の著者、笹森儀助も一八九三（明治二六）年に当地を視察した際、木棺のスケッチを残した。その後、老朽により著しく破損が進んでいた。このため財団法人「住友財団」が昨年度と本年度に計約七百万円を助成し、奈良県の元興寺文化財研究所に委託して修復した。

木棺は、ばらばらになつていた一基を組み立てたほか、穴が開くなどしけた漆の塗装を膠で張り



今帰仁村運天の百按司墓から出され修復保管された3基の木棺＝今帰仁村歴史文化センター

ニノス田 局
百按司墓 今帰仁村の運天港北東のかけ中腹にある。「按司」は有力首長の呼称。百按司墓の名称は「数多くの按司の墓」の意。墓4基を1991年に村文化財指定。

り付けた。一基には棺上部の屋根形の部材が残っていたため、笹森儀助のスケッチも参考に屋根を復元した。

木棺は木製で脚が付き家型の構造。朱色の漆の塗装、黄銅の金具の飾りが施されている。同財団の修復事業資料は「（県内で）現存が確認される木棺はほかにない。琉球漆器の最古資料であり、琉球工芸技術（漆装、金工、木工）、葬制、琉球史を考える上で極めて重要な資料」としている。

木棺は歴史文化センターの展示室に保管されており、村教育委員会は説明版を用意し、公開することになっている。

仲原館長は「記録される一五〇〇年より以前に納骨があったのは確実。木棺は、どの時代にもどのような人物が葬られたのかや、葬制の変遷を知る上で貴重な手掛かり。当時の漆装の技術を明かし、伝来の歴史を伝える資料ともなる」と話した。

最古の木棺お色直し

今帰仁村文化財「百按司墓」の3基

「当時の葬制知る貴重品」

6日から
一般公開

【今帰仁】16世紀以前の有力貴族の墓とされる今帰仁村連天の「百按司（むむじやな）墓」に納められていた木棺3基が、昨年12月までに修復され、村歴史文化センター（仲原弘哲館長）に展示されている。形が残って現存する木棺とし

ては最も古い。仲原館長は「葬られた人物や、なぜ連天にあるのかなど謎は多いが、1500年代以前に棺を作り、2次葬を行う葬制の歴史がたどれる貴重な資料」と説明している。6日から同センターで一般公開する。



修復された百按司墓の木棺＝今帰仁村歴史文化センター

修復は、明治時代に書かれた実測図や実写図も資料として送られ、破損部分や漆の塗装がはげた部分が修理され、朽ちて崩れた部材を組み立て修

復した。また、実写図から屋根型の棺のふたを新たに復元した。修復のため、中に納められていた人骨は、現在琉球大学で人定などを分析調査中。仲原館長は「木棺は石棺や素焼きの厨子型より古いもの。当時の棺を作る技術や葬制のあり方を知る貴重なもの。さらに研究が必要」と説明している。

同センターは今回の修復で使われなかったばかりの木片や説明文を付け、本年度内に展示内容を詳細化する予定。

百按司墓は村指定文化財。琉球の正史「中山世譜」などの文獻に「監守貴族の墓（墓内）に木棺が数個あり（王家の）巴の金紋がついている」「新しい木棺の側面に弘治十三（一五〇〇）年九月某日」と記述されている。明治時代に当時の研究者が銘のある木棺を確認し、首里博物館にそのうち二基が移されたが、沖縄戦で焼失したという。修復された木棺は、首里に運ばれず墓に葬られていたもの。木製の箱型と木の脚がある家型。琉球石灰岩の粉を混ぜた下塗りの上から朱色の漆が塗られ、真ちゅうの金具の飾りが施されていた。明治期の墓の修復以降、木棺の老朽化が進んだため、今回、財団法人「住友財団」による文化財保存修復事業で約七百万円の助成を受け、二〇〇二年から奈良県の元興寺文化財研究所で修復されていた。

今帰仁村文化財調査報告書 第18集
百按司墓木棺修理報告書

印 刷 2004年8月20日
発 行 2004年8月20日

編 集 今帰仁村教育委員会
社会教育課文化財係
TEL (0980) 56-3201

発 行 今帰仁教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232番地

印 刷 沖縄高速印刷株式会社
TEL (098) 889-5513
